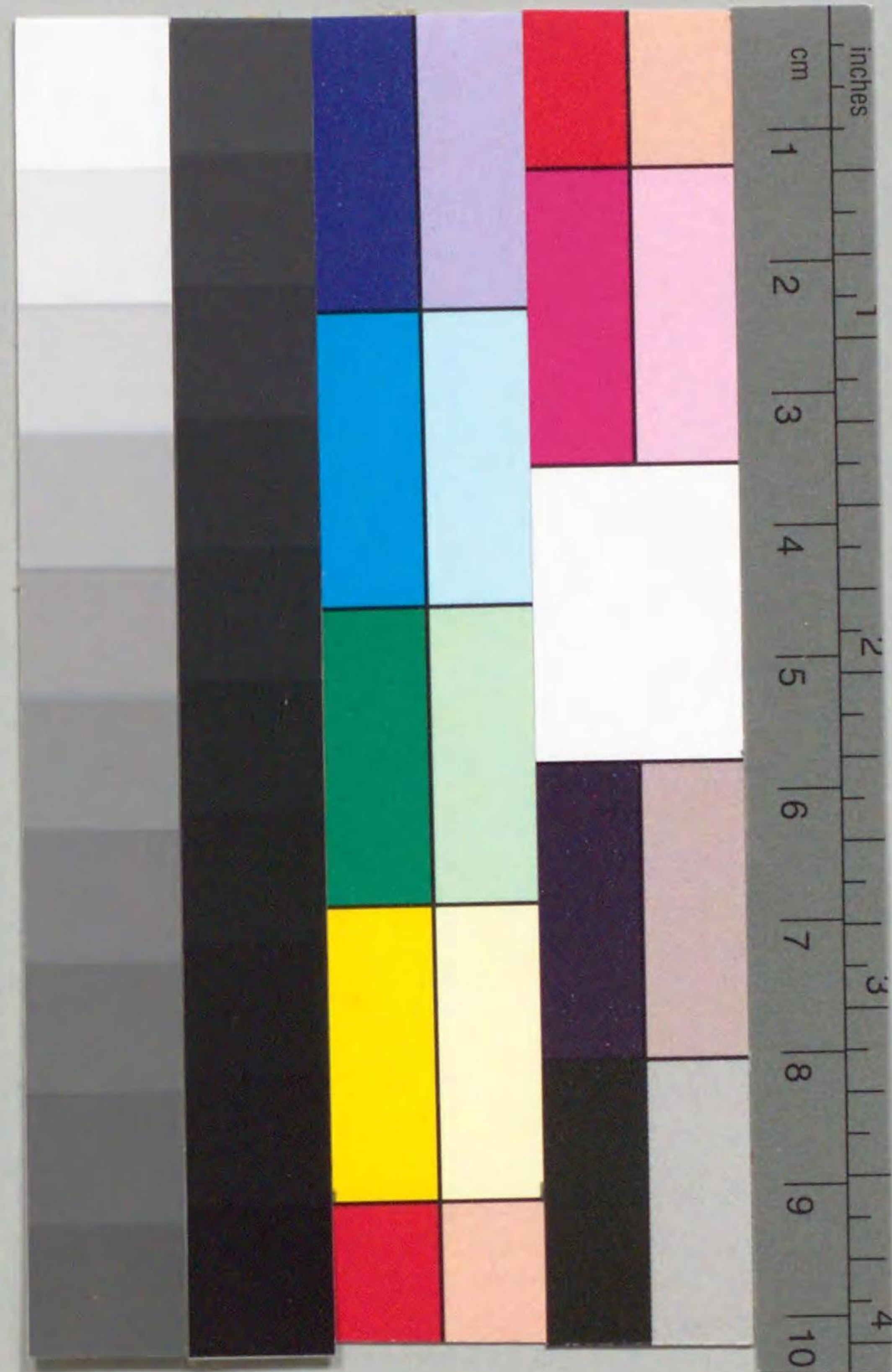
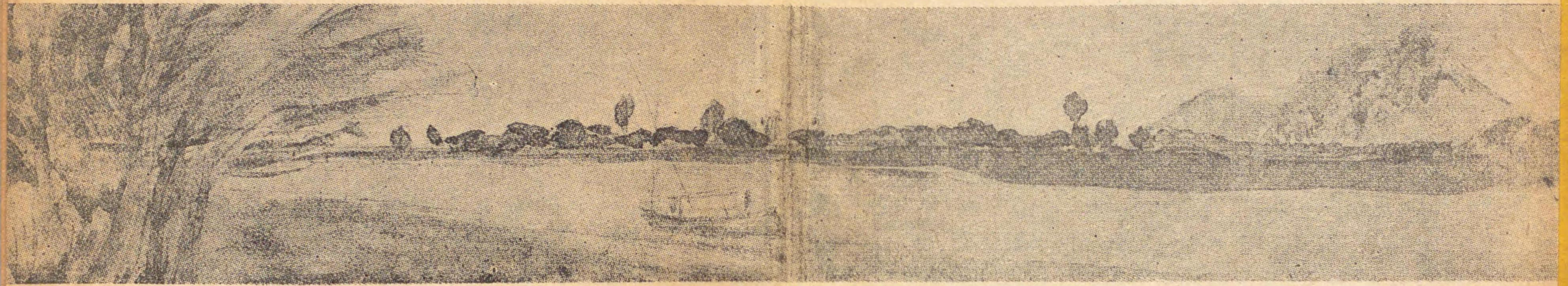


支那小史
黃河の水





鳥山喜一著

支那
小史
黄河の水

株式會社
清水書房



49
T-33



815067

新版のことば

この小著はアジヤいな世界の多くの民族の中でも、遠い昔に花花しい文化を生み、かつ育てて来た民族の一つとしての漢民族の歴史を、つづつたものであります。と申しますと似よつた書物は決して少くないと存じますが、そういうものの中にあつて、著者は特に少年子女のために、この漢民族の文化史的発展のあとを、平易な用語や一面には挿畫の導きで、読みやすくわかりやすいように叙述し、しかも漢民族やその歴史の正しい観方みかたをつかませようと試みました。それでその叙述には幼稚な比喻や表現もありますが、しかしそれは單なる逸話や傳説の寄木細工よせぎさいくとして組み立てたものではなく、時代を通じ民族を貫く歴史の流れというものに、十分な注意をしておきました。

「黄河の水」と名づけたのは、黄河は漢族文化のシムボルともいえるからであります。

新版のことば

本文でおわかりになるやうに、黄土層に特色づけられたこの河の、遠い遠い水源にもたええることのできるその文化の起源、長い広い流域の變北にも似たその社會の過ぎこしあとその深い底にひそむ知らざる力にも比すべき、漢民族の内に包む力さういう上から見て著者はこの名を選んだのであります。そうしてこの名によつて最初の版を世に送つてから、もう二昔もすぎたのであります。その間に著者は内容と、またこの書の一つの特色をした挿畫とについては、たえざる注意を拂つて來ましたし、またそれによつて長い生命をつづけてまいつたのでした。なほ最初に著者が自標とした「少年子女のため」だけでなく、思いがけない位の廣い範圍の讀者層にも迎へられたのであります。それは著者が念じたシナ歴史への關心と理解とが、この書を通じてある程度に成功したのかと、著者には大きい喜びともなりました。

いま敗戦といふたましい事實は、私どもにいろいろなことを反省させることとなりましたが、中でも歴史の問題は大切なものの一つでありましょう。それは我が國と中國との

長い過去の歴史と、現在の國際的な交渉の上からもいえます。しかしこの際にもつと大切なことは、漢民族の歴史自體について、私どもが何を學ぶかといふことです。漢民族の歴史が、多くの外民族との接觸や交渉や戦争によつて、いかに強い影響を他に及ぼした反面に、いかにしばしば敗戦や屈辱の苦い經驗をなめたものか。またそれにもかかわらず、いかにそういう苦難を乗り切つたばかりでなく、そういう時にもよくその社會を維持し、文化を發展させて來たかという事實などは、わが國の將來についても、何かを教へるものがないとは申されません。この書はそうした面について、年わかい人人にも、わかっていたただけるような用意をもつて、叙述したところもあります。

いま新しい書きかえによつて、新しい書肆から出版されることとなりまもたが、現在のいろいろな事情から、活字の組み方や挿畫の數や種類などは、大分かわることとなりました。しかし装幀などはもとの形を生かすことにしました。表紙畫と題簽。最初の出版のとき當時尋常科三年だつた長女のクレヨン作品です。歴史を芝居にたとえて、芝居人形で

新版のことば

四

それを表現したものであります。見かへしは著者の旅行スケッチの一葉で、これは今から三十餘年ばかり前の津浦線鐵橋附近の黄河の景です。そうしてこれは小著のレットテルとして長くいきて來たものなので、新版にもまたとりあげた次第であります。

昭和廿四年六月

鳥山喜一

目次

新版のことば

一 黄土を舞臺に（傳説の時代）

穴居の民……………九

指南軍……………二二

文字の發明……………二五

大洪水……………二八

二 天命の動き（夏・殷の時代）

酒の罪……………三

象牙の箸……………二

三 聖人と大盜（周の時代）

上手な釣人……………二八

覇者の争ひ……………三二

聖人の出現……………三四

強者の天下……………三八

食客と學者……………四二

四 萬里の長城（秦の時代）

大皇帝……………四五

萬里の長城……………四七

虞美人草……………四九

五 沙漠をこえて（前漢の時代）

男まさりの皇后……………五四

土産の葡萄……………五七

不老の神藥……………六二

美人の嘆き……………六四

飛行機の出現……………六六

六 ローマへの道（後漢の時代）

佛陀の福音……………七〇

紙の發明……………七三

ローマへの道……………七五

襁褓皇帝……………七九

七 北方の嵐（三國・晉・南北朝の時代）

水魚の交り…………… 八三

竹林の七賢…………… 八六

北方の嵐…………… 八九

索虜と島夷…………… 九二

筆の力と信仰の熱…………… 九六

八 太陽の輝き（隋・唐の時代）

大運河…………… 一〇二

日没する処の天子…………… 一〇四

民は國の本…………… 一〇八

老女の即位…………… 一一一

美人と悪將軍…………… 一二五

太陽の輝き…………… 一二九

兵士の我がまま…………… 一三五

海東の盛國…………… 一三八

九 論語の活用（五代・宋の時代）

纏足の始り…………… 一三二

論語の活用…………… 一三五

つむじ曲りの大臣…………… 一三八

新文字の創作…………… 一四二

恥の鐵像…………… 一四五

畫筆の誇…………… 一四八

一〇 蒙古風（元の時代）

- 少年會長……………一五四
- 悪魔の天降り……………一五六
- 蒙古風……………一五九
- チパングの島……………一六二
- 石の下にも若草……………一六七

一一 新世界からの光（明の時代）

- 永樂錢……………一七一
- 南倭北虜……………一七四
- 皇帝の悲み……………一七七
- キリスト教の福音……………一八〇

一二 眠れる獅子（清の時代）

- 辮髪の強制……………一八五
- 獅子の雄姿……………一八七
- 四庫全書……………一九〇
- 阿片の禍……………一九五
- 落第生の謀叛……………一九九
- 弱い者いぢめのヨーロッパ……………二〇二
- 一寸の蟲にも五分の魂……………二〇六
- 秘密結社……………二〇九
- 黄龍旗を倒して……………二一一

一三 五色旗と青天白日旗（中華民國）

看板のぬりかへ……………二二六
霧の中のうすあかり……………二二九
國恥紀念日……………二三三
青年の力……………二三七
青天白日旗……………二四一
雲間の白日……………二四六
結び……………二四五

支那
小史
黄河の水

一、黄土を舞臺に

—傳説の時代—

穴居かつの民びよ

歴史はちょうど芝居のようなもので、その土地は舞臺、そこにいろいろな活動をした人種は、役者にたとえることが出来ます。シナの歴史の舞臺は、後にはたいへんに廣くなりましたが、始めは黄河こわがの流域のほんの一部分でした。またその役者も一番おもい役をしたのは、漢民族かんみんぞくであつたといえます。それは日本の歴史の大立物おおたてものが、大和民族であるようなものです。

この漢民族が何處から來たかといふことは、まだ明かには分つて居ませんが、黄河の上流の地方からだんだん東へ東へと移つて來て、その中流域に定住するようになった。

たのだろうということだけはいえるのです。そこで大昔の漢民族は、始めはまだ一つのまとまった大國をつくるということもなく、あっちこちに小さい部落を作り、獵をしたり家畜を飼って居たのです。それから農業をやり、次第に文明に進んで來ました。その家というのも、北シナの地理上の特色である黄土層の切れ目の崖を掘って、それに住んだと思われます。こういう穴居は何千年後の今日でも、甘肅省・陝西省・山西省・河南省などには現存してゐますので、大昔の生活の様子も大よそ推察できます。いま黄土層ということを示しましたが、これは大昔も大昔、まだ人類の生活も始まらなかつた地質年代に、いまの中央アジア方面の沙漠から、吹き送られた細い細い砂が、北シナに積り積ってできあがつた地層であります。これはすこしの水があれば肥沃な耕地ともなりますので、漢民族が早く農業の民となつたのはこのおかげです。また時にはよく断層となつて、要害の地形をも作っています。

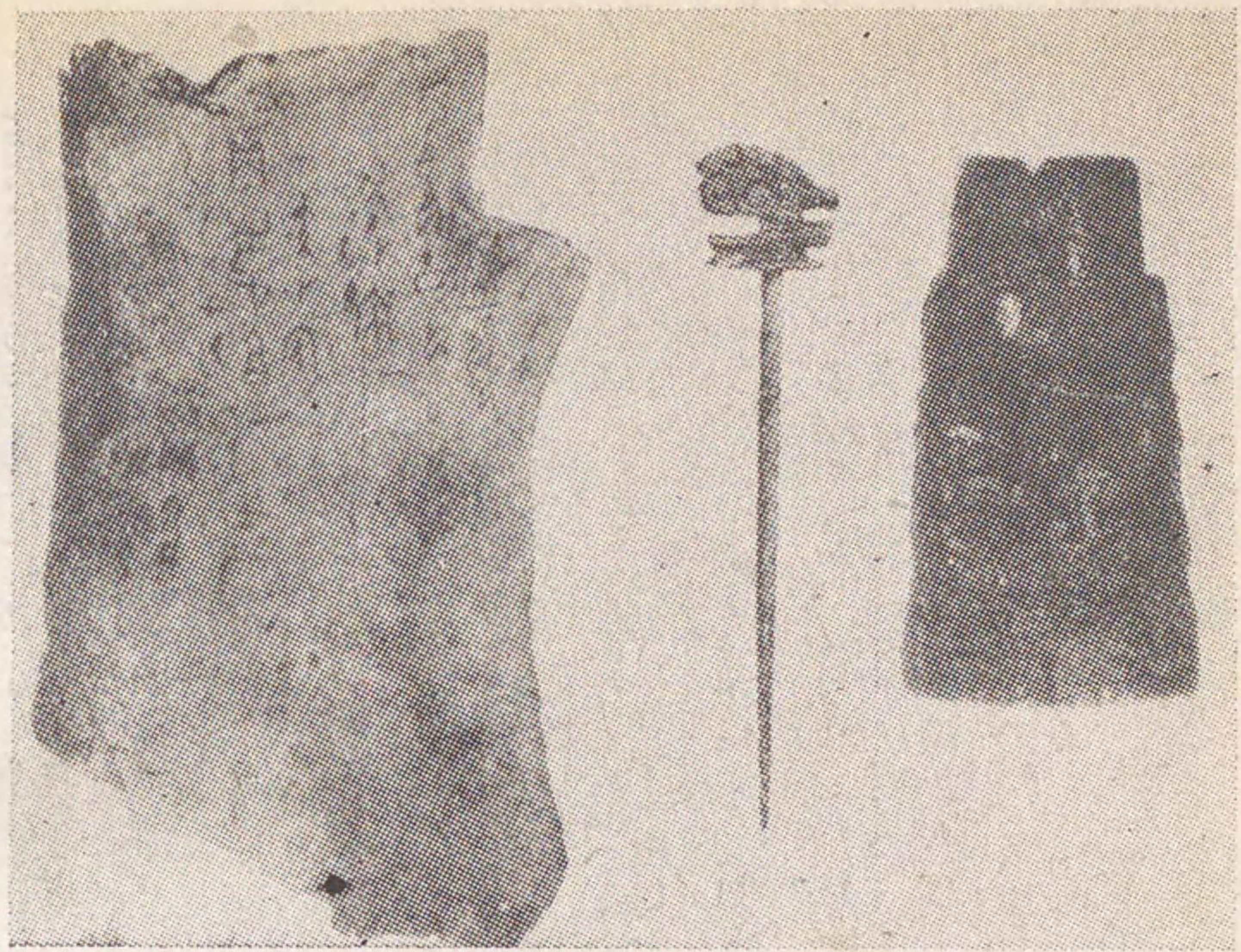
こんな有様の漢民族が、だんだんにその文明を高めて行つた次第を、シナの古い云



山西省の黄土の断層



山西省雁門関下の穴居



殷墟出土の遺物



周代の銅器

上圖は殷の都のあとから發掘された象牙の器物の破片(右)
骨製の筭(ころがい)(中)
獸骨にほられた文字(左)

い傳えでは、えらい聖人たちが出て、教え導いてくれたものとして居ます。たとえば有巢氏^{いうそうし}が出て、穴居その他の衛生上よくない住居をして居るものに、家をつくることを教えたとか、燧人氏^{すいじんし}はまだ火というものを知らなかった民に、初めて火をおこすことを教え、食物を煮たり焼いたりする法を傳えたとかいろいろのものがその一例です。煮たり焼いたりして、はじめて料理といえるのですから、シナでは日本の御馳走になくてならないお刺身のようなものは、野蠻時代のもので、料理の數にははいらないと申します。これはわき道へそれましたが、そんなふうには料理法も覚えて來たのです。また伏犧氏^{ふくぎし}というのは、家畜を保護することや、いろいろの礼式のことを教えたというし、神農氏^{しんのうし}はその名からして農業に縁^{えん}があるように、農作のことはいうまでもなく、商業や醫藥のことも教えて、人人の生活を豊にし、幸福を増してくれたということだと思います。この中で燧人氏・伏犧氏・神農氏を三皇^{さんこう}という總稱でつたえて居ます。

指南車

こういう云い傳えのあとに出て、初めて當時のシナを統一したと伝えられるのが黃帝であります。黃帝は三皇につぐ五帝——徳のすぐれた天子とも聖人ともいふべき五人を、ひっくるめて呼ぶ名稱——の最初とされてゐます。

漢民族が黄河の流域に來た頃には、それよりも前に苗族といふのが住んで居て、争も起つたらしいのですが、だんだんそういうものを敗かして、南方におっぱらいました。黃帝はそういう仕事をしとげて、漢民族の部落を一まとめの大きいものに作り上げた、天子といふことになつてゐますが、その名は前にいつた黃土層の色からつけられたことは明かで、漢民族と黃土との關係はこれでもお分りでしょう。黃帝の勢力に抵抗した相手の一人に、蚩尤といふ頭は銅で額は鐵、おまけに四目六手の怪物がゐて、これが戦をする時は雲や霧を起して黃帝を苦しめる。方角が分らないので、黃帝の方

は、たびたび弱りましたが、帝もさるもの、ついに指南車を發明して、どんなひどい雲や霧につつまれても、すぐそれによつて方角を知ることが出來たといふことです。

この指南車は今の磁石と同じもので、シナではこんな大昔から、これを使つて居たと主張する人もありますが、このお話の指南車は磁石とは關係のない器械のもののようなものです。もともともとき話のようなものに出てゐるので、歴史的事實とは申されません。磁石の使用のはつきり知られたのは、ずっと後の宋時代（一〇—一三世紀）で、シナ人は羅針盤を發明して、世界文化の上に大きい役わりを演じました。

それはさておき、黃帝の頃には宮室も造られ、役所の制度も整えられ、また黃土層のおかげで農業も發達し、養蠶も始められたといわれるし、舟も車もそのほか日用の器具器械の製作から、特に大切なことは文字の發明もあつたと伝えられています。つまりこれはだんだんに、漢民族の生活が高められ、政治も整つて來たことを、分りやすいようにえらい人物のてがらとして作りあげたお話なのであります。

黄土層のおかげで漢民族は、早くから農耕を始めましたから文明への進みも早く、従って四方の外民族に對してはその文明を誇り、その住地は世界の中央であると考えて、中國とか華夏とかいうような美しい名をつけていました。後にはまた中華といったこともありました。あとでいう禹王の建てた夏という國名も、古い文字では饗と書いて、頁は人が正面に顔を向けたところ、頁は兩手で、夂は兩足をそろえて立った形と説明されています。つまりこれは人間を意味しているのです、漢民族だけが人間で、まわりの外民族は動物と見下していた考を示したものであります。こういう考え方はシナの歴史を通じて、長く漢民族にいだかれていたことですが、それはあとでだんだん説明しましょう。こういうように漢民族は自分の國土を、中國・華夏または中華などといい、自分たちのことを中國の人とか中華の人とか誇って居ました。それで今の中華民國というのも、こういう古い美名がつけられたものであります。この中華とか中國とかいう名は、あとでお話しをする秦とか漢とか宋とか明とかいうような、國

號（或は王朝の名）とは別に、それらを通じての名として、現在に至るまで生きているのであります。皆さんはわが國の雑誌や新聞でもそれを御承知でせう。

文字の發明

こういう文明の進みの中で、最も大切なのは文字——私どものいう漢字——の發明であります。前にいった黄帝のとき蒼頡という人が、鳥獸の足あとを見て作ったといいますが、これももとより一人の仕事ではなく、何代も何代もの間に自然に發達し、ひろく行われて來たのを、こういう偉人の發明として分りやすいように傳えて居るのでしよう。

漢字の組立と使い方には六通りあつて、それを六書といひます。

象形 日月動植物器具など、その形をうつした繪文字です。字引の扁や冠になつて

指事 ある事物を指し示す字です。一二三もこれです。上(ノ、上)下(ノ、下)の如き、一定の位置を示す一の上下にしるしをつけて、その上か下かを明かにしたような文字はこれです。

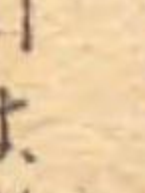
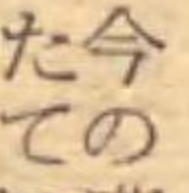
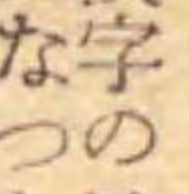
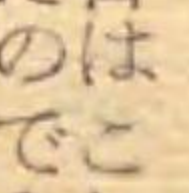
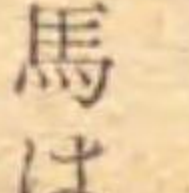

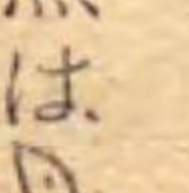
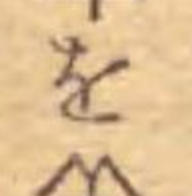
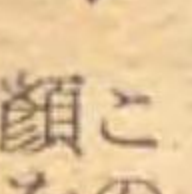

形聲 一方はその文字のもつ意味と、一方はその發音を示す文字との、二つの文字の組合せの字。同じ魚でもいろいろあるから、魚に里・周・付などをつけて、鯉・鯛・鮒などを區別する類です。

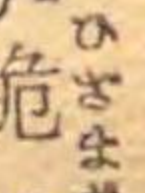

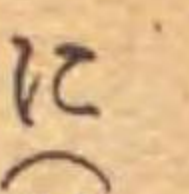
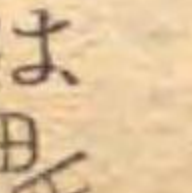
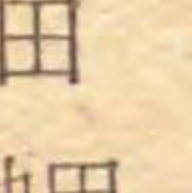
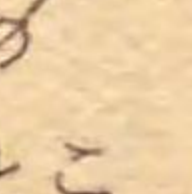
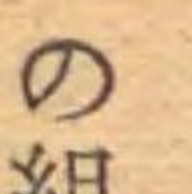
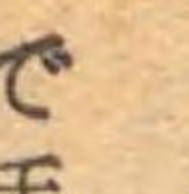
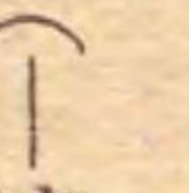
會意 二つ以上の文字を組合せて、一つの新しい意味のある文字をつくるのです。木が多く立ち並んで居る林とか、日が地平線上に上つて來た意味で、旦をつくるのがこの例。


轉注 これと次の假借とは、使用法から來た分類のものです。轉注は本來の字の意味を引きのばして、似よつたものに應用したものです。たとえば、金は金屬の總名ですが、それから金屬の中では一ばん貴い黄金にも、金屬で作つた武器にも、貨幣の意味にもなるのがこの例です。

假借 これは物の音とか、鳥獸の聲をうつすような場合に、用いられるもので、その文字の本來の意味とは關係なく、たゞその音が意味を有するので、木をきる音に「丁丁」(チヨウチヨウ)車の音を「轆轤」(リンリン)などというのは、この例です。

の六つがそれでありませう。

こういう文字を見ますと、それによつて昔のシナの社會の有様などを、考える上のいい參考になりますから、少し説明しておきましょう。繪文字の象形には、山は、日は、月は、目は、今今の漢字の目はこれか、馬は、魚は、車は、~~車~~など、そのものの形をとつたものもあります。またその形で第一に目につく所をとつて、例えば牛を、羊を、この二つは角を主として、顔をとつたのでしよう。子を、子供の頭の大きいところをつかまえて作つたもの

のようなものもあります。女はで人が跪いて居る形にしてあります。これは女は男に従うべきものということ、意味しているのです。大昔のシナでは、男女同権などということ、考えられても居なかつたのです。それから母 この字は指事です は、~~母~~で、女に即ち乳房をはつきりつけて、おかあさんということであらわして居ます。會意で一つの例をとりますと、男はで、田と、これは農具の形ですが、それで力とか労働との組み合わせです。男は田に出て労働するものとされて居たことが分ります。父はで手に棒 (―は指揮とか支配とかの意味を示して居ります)を持って、家を支配することを示して居ます。

それから皆さんのよく御存知の字の一つをいいますと、貝があります。昔、シナで貝(子安貝・寶貝)を貨幣としたことは、あとでいふ殷のときの實物が残つて居るので明かです。貝の字は子安貝の形に象られ、などいろいろに書きますが、そこで貝という部分を含む字は、財産に關係のあるものとなります。次にいうのは主と

して形聲の字ですが、財・資・貸・賃みんなそれです。貝はお金ですから、貝を分けると貧になるのです。なお貝は禮物としても使用されました。賞・賜・寶などはこの例です。漢字をこういうようにして見ると、なかなか面白いことがあります。

なお古い時代の文字は、どんな形をしていたかと申しますと、今の楷書その他とはかなり違っています。一番古いと思われるのは、殷の時代のものと云われる、亀甲・獸骨などに彫りつけられた字で、甲骨文字（殷墟の文字）といわれます。その次は銅器に刻まれたもので大篆といわれて、複雑な字劃が多く、またなかなか美術的なものです。

大 洪 水

黄帝の後に出て、やはり五帝の中に數えられる堯と舜とは、後世のシナ人が仰いで聖人とし、人君の模範とたたえて居る天子です。一口に堯舜の世といえば、理想的な

太平な世を意味することともなり、それだけ何事も理想的な飾りつけがされて居ります。堯帝はまことに儉約に身を保ち、ただ人民の安樂な生活を心がけたといひ傳えられています。太陽や水というもののお蔭は、誰も蒙らないものはないが、それは餘りに大きいので、みんなが見のがしがちであるように、この天子のありがたい政治で、天下太平になり、萬民は平和な暮しをすることが出来たが、それを天子の功德だと感じなかつたほど、大きい恵を民にかけたということです。それで人民はすこしの不安を感じることもなく、

日が出りや働き、暮れたらねむる

井ほりや水湧き、田を耕さやみのる

天子のお蔭が何あろう。

と節おもしろくうたい、ひもじい思いをすることもなく、その日その日を楽しく暮らすことができたということです。

この堯は初め親孝行で名高い舜しゆんという人が居ることを聞いて、そういう人に政治を委かせたらなおよく治るだろうと、舜を召して大臣にしました。舜は百姓の子でしたが、堯をたすけてよく政治を行いましたので堯から天子の位をゆずられました。こういう風にいい政が出来れば百姓の子でも天子になれるということは、シナの國がらの一つの特色で、それはその歴史を通じて流れてゐる考であります。

さて舜は地方の政治に注意しますし、また漢民族に抵抗する苗族なども征伐しました。殊にこの時には音楽が盛になったことですが、舜の作ったという歌なども傳えられ、その一つは今の中華民國の國歌にもなつて居ります。

この堯舜の時代を通じての一つの難儀は、黄河その他の河の大洪水でありました。堯のとき鯀こんという人に命じて、之れを治めさせましたが、うまく行かない（後に鯀は刑罰を受けました。）そこで鯀の子の禹うにやらせました。禹は八年間も我が身を忘れて、この天下を苦めて居る大水を治めることにつとめ、その間は我が家の前をすぎても、

立ちよろうともせず、職務第一にはげんだといわれて居ます。さまざまの苦心で、ついにさしもの洪水をすっかり治め、民の患うれいを救うことが出来ました。舜はこういう禹の功勞を見て、堯と同じように、我が子のあったにもかかわらず、禹に天子の位をゆずりました。それでこの罪人の子ともいふべき禹は、舜から位を受けて天子となりました。萬民をそのひどい苦みから救い、その生活を安樂にしてやったから、人民の感謝を受けることとなったのは當然ですが、その人望の最も多い者は、天の心にかなる人であるから天子となれるとする所に、シナの特色があります。前にいつた堯が舜に、またこの舜が禹に、平和に王位を譲ゆずつたことを、シナの歴史では禪讓せんじやうといひます。

二、天命の動き

—夏殷の時代—

酒の罪

天子の位をゆずられた禹は、王を稱し國の名を夏とつけました。これはシナで國の名をつけた始めだといわれて居ます。禹は後に質素儉約の神様のようにながめられましたが、その政治の上にも、日日の行の上にも、常に勤儉力行の主義を實現して居ました。このとき、始めて大變にいい酒を造った人があつて、禹王に献上しました。王はこれを飲んで見て、「これは甘い」とほめは致しましたが、「いまにこれで國を亡す者が出て来るだろう」といって、その發明をした人をしりぞけたという話も傳えられて居ます。

禹王はまた前のように、天下で最も人望ある賢臣を選んで、その位をゆずろうとしましたが、人民は王子の啓こそ、私どものほんとうの王様ですといつて、ききませんので、ついに啓が王位をうけました。そうして子孫が相ついで王となり、この王統は四百年ばかりつづきました。こういうえらい王の子孫にも、長い年月の間には、いろいろな人が出ました。最後の桀王になつて、一騒動が起りました。桀王は大變ぜいたくな人で、人民からの税を重くして、立派な御殿をつくつたり、日夜宴會にふける。肉で山を作り、酒の池をほつてそれに船を浮べ、三千人の家來を集め、一令の下に牛みたいに、それをガブガブ飲ませて喜ぶというような、馬鹿なこともして遊びました。これでは政がよく治まるはずはありません。

シナでは古くから王即ち天子のほかにも、多くの大名があり、それぞれ王から土地をわけ與えられ、その人民を支配する、いわゆる封建制度が行われて居ました。王はそういう諸大名の總支配者ともいふべきものでしたが、この桀のような王ではとても

そのしめくくりはできません。そこでそういう大名の中で、一番人望のあつた湯王と
いうのが、桀王の如き亂暴者は天子ではない、そんなものは攻め殺してもさしつかえ
ないといって兵を出して、これを攻め滅し代つて王様となり、商(後に殷)の國をた
てました。禹王が心配した酒の害は、こうしてその子孫にまづあらわれたのでした。

象牙の箸

殷の國は六百年もつづいたといわれます。初め湯王は善政を行つて、桀王に苦めら
れた人民の難儀を救いましたが、その子孫には紂王という、前の桀王と並んで、暴君
のお手本となつた王が出ました。紂は腕力もあり智慧もありまして、決して低能では
なかつたのですが、ぜいたくが好きで人民を苦めました。その時の賢人で箕子とい
う人は王が象牙の箸を作つたのを見て、この調子ではそのぜいたくは極まる所なく、國
を滅すこととなるだろうと嘆きました。が不幸にしてその通りに、紂王はだんだんわる



安亳殷鎬洛邑
山(河)南(河)東
西(河)南(河)東
省(南)省(南)省(南)
夏(縣)商(縣)周(縣)
都(初)都(後)都(後)
都(初)都(後)都(後)

一二二二年 神武天皇即位
前四六二年

のこことと傳えて居りますから、シナの歴史がいに古く、

その文化のいかに古かつたかも、察することが出来ましょう。なお古傳説によれば、
夏・殷・周の中心地は略圖に示したように、黄河の南北わずかの部分でした。

さて商(殷)の湯王が夏の桀王を、周の武王が殷の紂王を、武力を以つて倒して新
しい國を建てたことを、シナの歴史では放伐といひます。漢民族の教えでは、天下を

治めるのは天であるが、然し天は手も口もないから、天のような、情ぶかくて公平な心をもつ人に、その命めい即ち天命を傳えて代理をさせる。天子はその文字の通り、天の子ということ。そうしてこの天の子として、その父即ち天の命を受けるといふことは、人望の最もあつくなつたことで知られると信じて居たのです。だからいつでも一番よく天の心にならうような政をする人は、たとひ百姓の子であっても、また罪人の子であっても、舜しゆんや禹うのように、天命が下つて天子になれる。それで堯ぎやうが舜しゆんに、舜しゆんが禹うに位をゆづつたのは、堯・舜の勝手な心からでなく、天命が舜や禹に下つたと信ぜられたからです。又たとい親から天子の位をゆづられても、人民をいじめ亂暴をして、天の心にそむくようなものは、天子のねうちがないものとして、この桀や紂のように攻め滅されても仕方がなく、またそんな者は殺してもいいというのが、漢民族の考え方なのです。かく天命が革あらたまることを、革命かめいというのです。

こういうように、平和な手段ばかりでなく、武力でもって、王位を奪うことを承認

するので、天命を看板かんばんに、王位をねらう者の現われたのも當然で、シナ史に王朝の興亡の、たびたび見られた原因はそこに存します。

三、聖人と大盗

——周の時代——

上手な釣人

殷を滅した武王（姓は姬、名は發）は、都を鎬京（陝西省長安縣）にさだめました。この周の國は武王の父の文王の時に勢力が張りましたが、それにはこんな話があります。或る日文王が獵（かり）に出るとき（うらな）トをしたら、「今日の獲物は龍でもなく虎でもなく熊（ひくま）でもない。獲る所は霸王（は）の輔（は）」と出ました。當時の天子や大名は、獵やお祭をする時はトによつて事をきめたものです（殷では龜の甲や獸の骨に字をほりつけてトに使いましたが、それが前にいつた甲骨文字です。殷の都のあとから今も發掘されることがあります）。さて文王は獵に出たところ、渭水（いすい）という川の岸で一人の老人が釣をして居る

のを見つけてきました。話をして見ると、大變えらい人物であることがわかったので、「貴公（あなた）こそかねて私の先君（せんくん）太公（たこう）が探し求められて居た方である」といつて、太公望と名づけ、これを大臣にしました。太公望は呂尙（りやう）というのがその本名で、山東省から流れ流れて、この周の領内へ来て毎日釣をして居たのですが、一向に釣れない。「おじいさん、毎日毎日、何を釣るつもりです」と聞くものがあれば、「おれは魚なんぞは釣らないよ」とばかり、相手にもしませんでしたが、ここに太公望もまた望みの獲物を得て、文王に仕えることになりました（釣をする人のことを太公望とすることはこの事から起つたといふことです）

武王もこの大臣の輔（たすけ）によつて民心を得、遂に殷に代つたのです。二代目の成王（せいおう）は、まだ子供であつたから、叔父の周公旦（しゅうこうたん）という人が、攝政（せつしやう）となつて政を行い、後世の模範となる制度も作られました。漢民族は血統を重んじ、祖先の祭を絶やさないとを貴び、孝をもつて百行の本としましたが、そういうことに伴う（ともな）禮制（れいせい）なども整えられました。また人民の生活の安定のためには、土地を國有として井田法（せいでん）を行いました。こ

の法は九百畝ほの田地を九等分し、その區劃をする溝が井の字になるのでこの名があります 周囲の地を八家に貸與え、その收穫で生活させ、中央は公田として八家が共同耕作をして、その收穫は官に納めるしくみでした。この成王から次の康王こうおうにかけては、周の全盛時代で天下太平、わるい事をする者もないので、刑罰はあっても、これを行うことがなかったと伝えられて居ます。

けれども盛衰せいすいは何事にも免れ得ません。さしも太平をよろこんだ周も、十代目の幽王ゆうになって大いに變化を見ることになりました。周が國を建てた頃には、北方からも西方からも、野蠻人の侵入しんじゅうがありました。これをよくおさえつけて居ました。そうして又こういうものに備えるために、いろいろの設備もありました。幽王はその愛してゐた妃の一人が、いっこう笑顔を見せてくれないので、どうかしてこれを笑わせたかと思つて一策を案じたのが、野蠻人侵入の警報でした。外民族が侵入してきたときは、烽火のうしをあげてあいずるすることになつて居たので、早速それをやらせました。諸

大名は「すわ一大事」と、取るものもとりあえず、都へ馳せ上つた。ところが都は何處を風が吹くかという静さ、勢めんめんこんだ面面は鳶とびに油揚あぶらあげをさらわれたよりも、もつと間まの抜けた様子をしたことでしょう。これを高殿たかどのから見、その妃は始めて笑つたので、王様は喜びました。がおさまらないのは諸大名の胸中でした。こんな馬鹿げたことをした國王でしたから、間もなく北方から侵入して來た犬戎けんじゆうという野蠻人に、攻め殺されてしまいました。それで次の平王は今までの都を保つことも出來ず、危険であるからといふので、東の洛邑らくい河南省洛陽縣。後世の洛陽と同地。に都をうつしました。これは西洋紀元前七七〇年神武天皇即位前一一〇年のことです。

覇者はの争しや

シナの歴史では、この平王が東へ都をうつしてから後、ざつと三百年ばかりの間を、春秋しゅんじゆうの世といひます。この間の事のあらましは聖人としてよく知られている、孔子こうし

が、書いた「春秋」という歴史の本にあるので、こういう名がついて居るのです。

この時代は北から野蠻人が攻めて来る。周の天子は全く勢力がなくなつて、漢民族を救うことが出来ない。そこで有力な大名達が、一方には周の王様を尊んで、諸大名に忠實を誓わせ、外はこの侵入者を撃ち退けるために、起ち上がることとなりました。こういう強い大名を覇者といひます。

その最初に立ったのが、今の山東半島地方を支配した齊の國の桓公で、管仲という賢臣のたすけを得て覇業を遂げました。この管仲は小さい時ひどい貧乏でしたが、同じ貧乏友達の鮑叔牙と、仲よく商賣などをしていました。後にその叔牙にすすめられて、桓公の臣となり、ついには大臣になったのですが、その貧しいときの友人の交りを、いつまでもかえなかつたといふので、美談として伝えられて居ります。この「管鮑の交」

のことを、後に唐の杜甫(とほ)という詩人が、「貧交行」という詩に讚美しました。

また覇者になろうとした人の中に、宋の國河南省の南部の襄公河南省がいます。南方の楚の

國と、泓水河南省という川のほとりで戦つたとき、敵が川を渡つて進んで来たのを、家來が「いま攻めれば勝ちますから」といったが、「いや君子の戦は堂堂とやる、敵が困つて居るところにつけてむ法はない」といって、敵兵の川を渡るまで待つて、「さあ討て」と命令を下しましたが、時はすでに遅く、大敗北をしてしまったといふ話を残して居ります。これから「宋襄の仁」といって、情をかけないでもいいものに情をかけてかえつて馬鹿を見ることをいふ言葉ができました。このほか晋の文公晋は山西省に都がありました楚の莊王楚は湖北省に都がありましたという人も現われましたし、西方には秦の穆公秦は陝西省に都がありました更に東南には吳江蘇省方面や越浙江省方面が覇者として立ちました。吳と越とは久しい間、たがいに戦つて居ましたが、越にまけた吳王の夫差は、父の仇・國の敵と、夜は薪の上にて、その恨を忘れぬといふ勢で、ついに越を攻めて、その王勾踐を會稽山に降参させました。吳は勝つて心ゆるみ、越は復讐を謀り、ついで越が勝つて、會稽の恥をそそいだといふ物語もあります。

こんな工合に戦争が、あっちにもこっちにも、繰返されて居ましたが、いかに國をひろめた大名にしても、戦争は決して幸福なことばかりを伴いません。従ってそんなことはやめて、お互が平和にしようではないかという平和會議——その當時の語では弭兵會——が、開かれたこともありました。一方には慾心が出て来て、すぐ戦争になつてしまいました。こんな工合で、弱い者は強い者にその國を削られ滅されて來ましたが、またその強い大名の家では、家老に権力がうつり、晋の國の如きは滅されて三人の家老が、その領土を分割して韓・魏・趙の三國を建てました。この三つの新しい國が自立した西洋紀元前四五三年をもつて春秋時代の終り、次の戰國時代の始めと致します。そうして弱肉強食の傾向が、一層露骨になつて來た戰國時代が始まるのであります。

聖人の出現

こういう力の世の中に、一方には道を説いて、天下を平和に治めさせようとする聖人も現われました。それは孔子です。孔子は名を丘といい、今から二千四百年も昔に魯の國今の山東省の中部にありました國の曲阜という所で生れました。小さい時から他の子供とは違つて、すぐれた徳をもつて居ましたが、大きくなつてはシナの青年のすべての志すように、まず役人となりました。それはほんの小役人ではありましたが、よくその職をつくして、人人から心服されたということです。然し孔子は世の亂れをどうにかして治め、人民をその苦から救つてやり度いという、ほんとうの政治家の尊い心をもつて居ましたから、その理想とする堯・舜や周公旦のやつた道德を基とする政治を實行し、周の天子を昔のような尊嚴のものにし、禮儀にかなう世の中にしようと努力しました。それで方方の國國に出かけて行って、大名や大臣にそれを説きましたが、何分にも腕づくの時代ですから、孔子のいうような、道德で國を治めるなどということには、應じてくれる人はありません。そこで故郷に歸つて、前からつき従つて來た弟子等に

道を説き學を教えて、七十四でその一生を終ったのです。この學問が後に儒學といわれるものです。

孔子といえば、きうくつな修身の先生と考え、その言行を記した論語ろんごという本は、あくびの出るお談議のように思う人もあるようですが、それは大まちがいです。孔子は一人一人がその心を修めて行く心もちをもつて、家をも國をも天下をも治めようという、政治を説いた人です。そのいうことは決して二十世紀の今日の青少年の心に、あてはまらないようなものではありません。澤山の眞理をいつて居る聖人の言葉は、決して死ぬものではないからです。皆さんは「論語よみの論語しらず」といふ諺を御存知でしょう。私は「論語よみの論語しらずはうらやまし、論語よまず論語しらずは」という歌のあることを申して、皆さんに論語もお読みなさいと、おすすぬめ致します。

この孔子の生れたよりも少し先に、やはりえらい學者で、老子らうしという人が出ました。ある云い傳えでは、この人はおかあさんのお腹の中に、何十年も居たから、生れた時

には、もうおじいさんであつたので、老子というんだなどと申します。この人も同じく天下の大亂を治めることや、人人の修養について、貴い言葉それは「老子道德經」という本に見られますをのこしました。然しそれは孔子が道德的な、いろいろな箇條でもつて、世を治めて行くとするのとは反對に、何にもかれこれいわず、自然に任せておけば、天下が治るものだと言張しました。早い話が、凸坊と茶目とが喧嘩をしているとすれば「や、あぶない」の「喧嘩はわるいことだの」といったって、なかなかやめはしない。ほうっておけば自然にやめて、かえって仲がよくなることもあります。そういう心持で政治をすることを説いたのです。老子の言葉は大へん意味も深くむずかしいものですが、その一例を手っとり早くいえば、こんな風なのです。さて老子は生れたことに、不思議な話があるように、死んだことも一の神秘で、シナの歴史では西の方に去つて、終る所を知らずといつてあります。それで後世になると、仙人になつたともいい、或はインドに入つて、お釋迦様になつたのだなどという説さへ、こしらえたものがあります。

後に道教という教では、この老子をその開祖として、崇めることとしました。

この他には、人人が相愛して、戦争などを、この世からなくしてしまえということ
を説き、非戦論を主張した墨子という人もありました。

強者の天下

前にいったように、小さい弱いものは敗けて國をとられ、春秋の終には、強大な國
が七つとなり、いはゆる戦國の七雄が、相對抗することとなったのです。その七雄と
は、秦・趙・魏・韓・燕・齊・楚です。周の天子は、上に立つことにはなつて居まし
たが、もう飾り物だけのねうちもなく、天下はこの七國の腕力次第で、風も起れば雨
ともなりました。それでこの時代はその名の如く、戦争が烈しく戦われました。七雄
というのも、つまりは天下をねらう大盗なのです。

中でも秦は一番つよく、他の六國は一國だけではとてもこれに勝てません。それで



六國の同盟——合従といひます——を計畫して、秦を
やっつけようとする人が出て來ました。これは蘇秦と
いうもので、巧みな辯舌で次第に六國を説き伏せて同
盟させ、自らはその大宰相となつて威を振りました。
然し六國同士はお互に利害關係があるから、仲間割れ
のしやすいのは當然ですし、また秦はその同盟の邪魔
をして、自國の安全を謀りました。それに同盟軍は秦

を攻めて函谷關で大敗し、韓と趙とは秦に攻められて、八萬人からも殺されたことも
ありましたので、同盟は永續させませんでした。これを見て張儀という者は、六國に
秦の強いこと、秦にはとうてい勝ちにくいから、これと平和に結びつくことの利益を
説いて、連衡の策に成功しました。初めこの張儀は辯論の術を學んだが志を得ないで、
ぐずぐずして居たある日のこと、細君と喧嘩をしました。すると張儀は急に口をあけ

て見せて、「オイ、おれの舌はまだあるか」とききました。細君は妙な顔をして「何です、舌がなければ口がきけないぢやありませんか」というと、「よし。この三寸の舌さえあれば」といって家をとび出したが、ついにこの大業をしとげたということである。合従の従は縦(たて)の意味で、六國は、南北即ちたての關係にあるのでその同盟を合従といい、連衡の衡は横(よこ)と同意で、秦は西、六國は東にあたるから、この東西即ちよこをつなぐので連衡といつたのである。

合従が破れ、連衡は出来ましたが、秦は六國を滅すことを目的にして居ます。六國とてもそれぞれ強者をもって任じているものですから、秦に屈服するような有様には、永く我慢することは出来ません。それでこの連衡も、やがてこわれて、我利我利の諸國は、戦によってその領土をふやし、その野心を満足させようとしたのです。

戦争は大小いく十、いく百もあつたでしょうが、中にも燕と齊との戦では、初め燕が勝つて、齊の城はただ僅に二つだけが残つて、あとはみんな燕に占領された。それを田單(てんたん)という齊の大將が、火牛の計(けい)といつて、牛の尾にたいまつをつけ、角には刀を縛りつけて、敵陣にあればこませてこれをなやまし、忽ちにとられた七十餘城を

取りかえしたという、すばらしい話もあります(この牛は青島牛の先祖ですよ)。また秦が趙を攻めて、長平(ちやうへい)という所で戦つたときには、秦は降參した趙の將士四十萬人を生埋にしたという酷い物語りも傳えられて居ます。

そのうちに、秦に周(しゅう)を滅し、その王に嬴政(えいせい)というのが出て來ると、諸將軍の力によつて、とうとう六國を滅し、西洋紀元前二二一年我が國では第七代孝靈天皇の御代に天下を統一しました。ここでシナには、始めての統一的大國家が現はれることとなつたのです。この政という秦の王こそ、萬里の長城で有名な、始皇帝(しこうてい)であります。

食客と學者

前の春秋時代にしましても、この戦國時代にしても、力づくの世の中でありましたから、天下に事をしようとする人は、それぞれの才能に應じて、立身出世をもくろみました。殊に戦國には、それが一層はげしくなりましたし、また一方には野心ある大

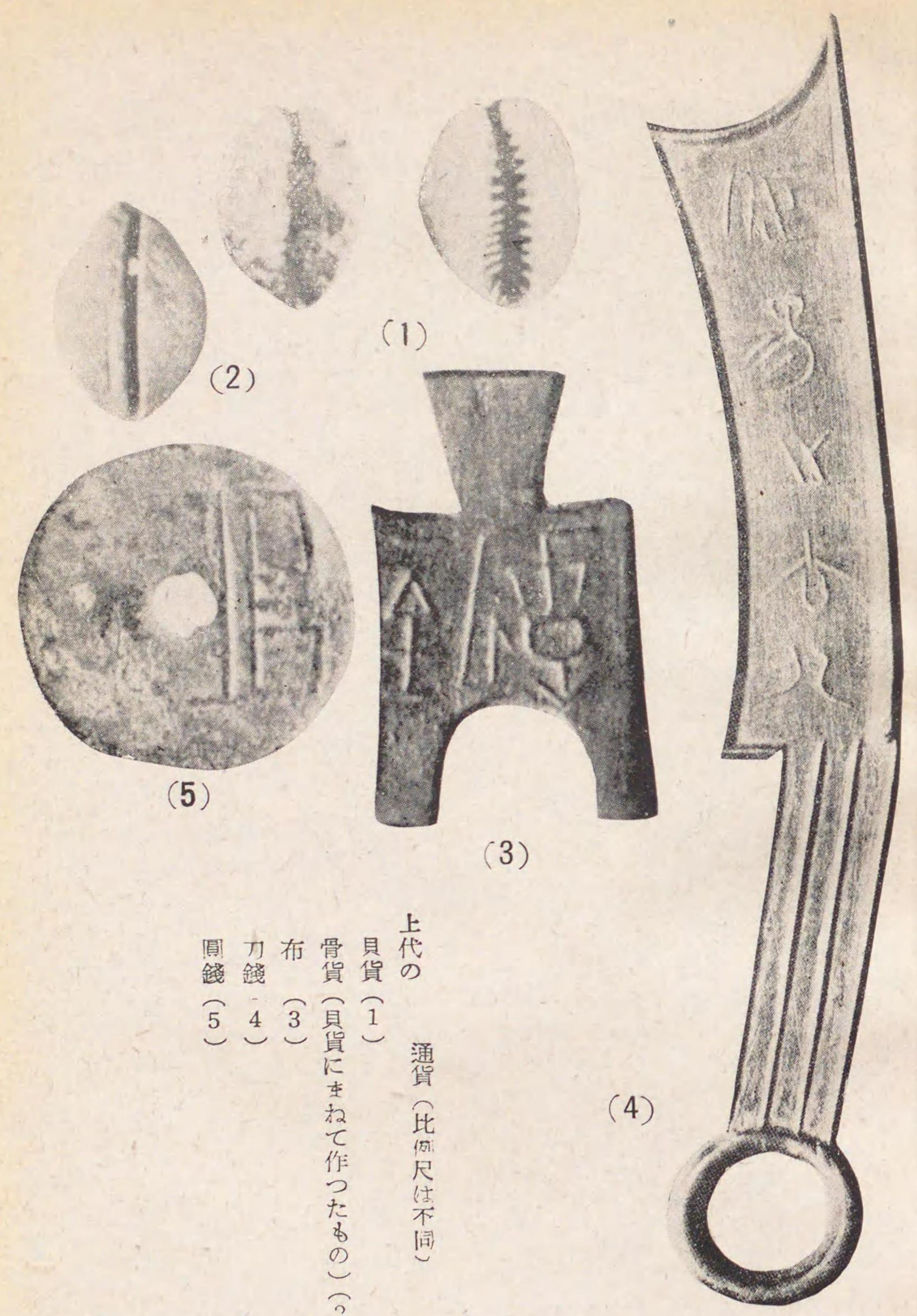
名が、一藝一能のある者は、何かの用に立てようと、これを歓迎して、客分きやくぶんとして優待しました。そこでこういう食客しきかくは、どこの國にも養われれました中にも、齊の孟嘗君まうせうくんは食客つねに数千入、楚の春申君しゆんしんくんは三千餘人、趙の平原君へいげんくんは數千人、魏の信陵君しんりやうくんもまた三千人というやうなレコードが残されて居ます。しかもこの食客——居候いせうこうは、「三杯目にはそつと出し」などというのではなく、威張いばったもので、「出ずるに車なし、食うに魚なし」などと駄駄だだをこねたものもあります。それでその生活も、なかなかぜいたくなのがありました。趙の平原君が楚の春申君の所へ使を出すとき、富強を示そうというので、髪には玳瑁たいまいの簪かんざしをささせ、腰には珠玉しゆぎよくで飾った刀を佩はかせてやりました。ところが楚の數千の食客の中で、一番いい待遇を受けて居たものは、寶玉をちりばめた履つらをはいて居たということです。この食客は然しただぶらぶらして居ただけではなく、それぞれの主君のために、いろいろの役目をしたのです。

それからまた當時は、頼まれればいやといわずに、人殺しも引受ける一種ひととこだての男俠

も居ました。そういうものの活動の中で、最も劇的の場面を歴史に残して居るのが、燕えんの太子たいしに頼まれて、秦王の政を刺そうとした荆軻けいこです。

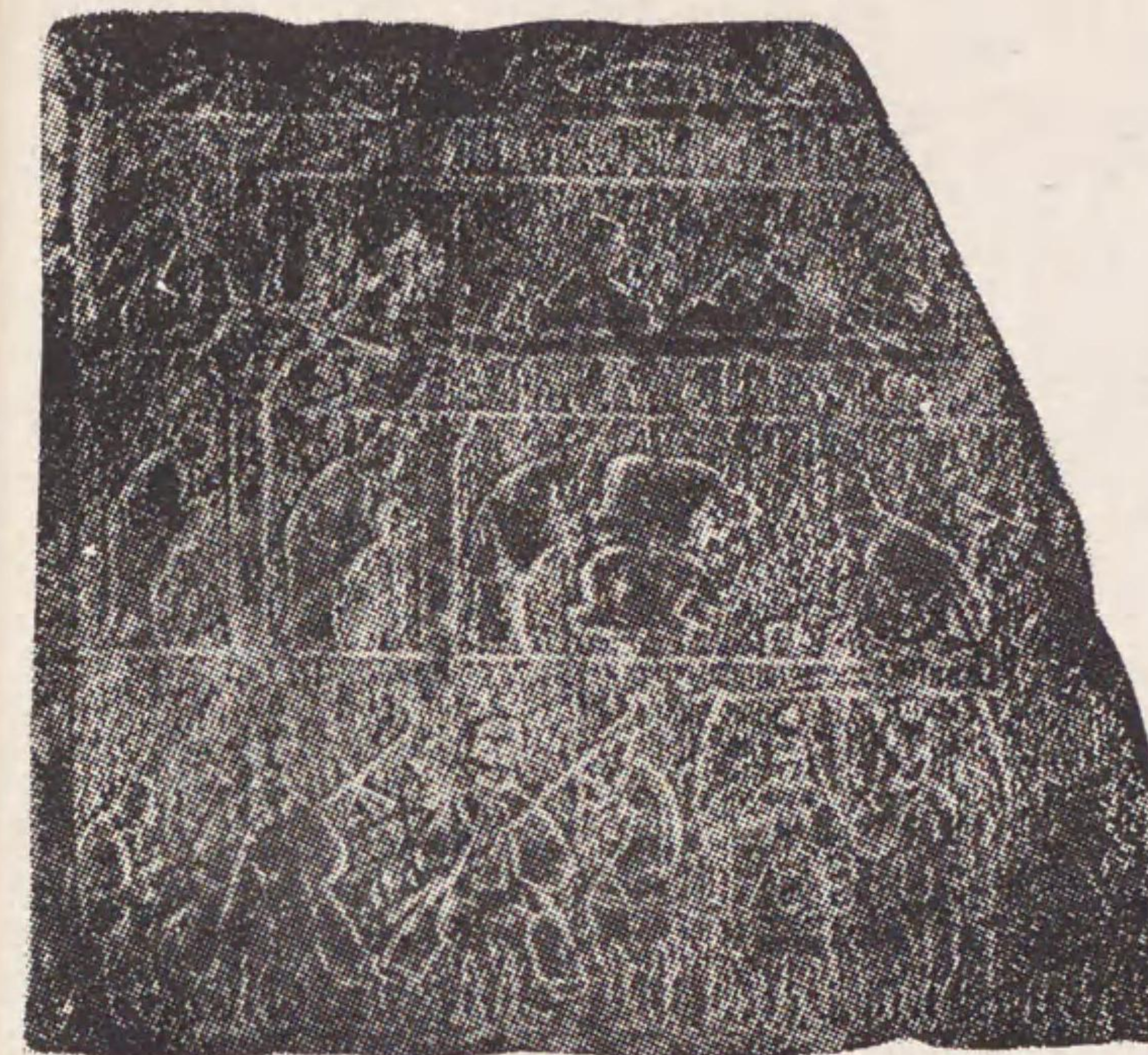
なおまた血なまぐさい風の、吹きまくる世ではあったが、その亂れの間にも、學者が澤山に出て、いろいろ世を救う道を説きました。道德政治で天下を太平にしようとしてめたのは、孔子について賢人とあがめられる孟子まうしであります。それから老子のように放任主義をとって、それよりもはげしいことをいったのは莊子せうしでした。戦争の盛な時ですから、戦術兵法を説いた人もあります。又こんな世の中は、とても道德などでは治まるものでない、人間というものは、もともと性質が悪いものだから、それを導き治めるには、刑罰けいばつの他に方法はないと、法律萬能を主張する學者もありました。商鞅しやうあうや韓非かんひは、この派の學者でしたが、商鞅は戰國の初め、秦で實際の政治をとって治蹟をあげました。秦は代代この方針によって、國を富まし兵を強くし、終には天下の統一を遂とげることとなつたのであります。

なおこういう間に産業も發達して來ましたが、中でも生活必需品の鹽や鐵が注意されます。山東省の齊せいの國はこの二つの物で富強となり、富豪も現われました。また各國ともその國力の増大を競きそった時代ですから、荒地をひらき農地をふやす必要から、農業の上の改良や鐵の農具の發明もありました。絹織物なども盛になり、その取引も廣く行われ始めたようです。それで商業の取引の必要から、前の貝貨などはすたれて、青銅錢がつくられ、刀とうとか布ふという名のものや、圓錢も現われて來ました。それから當時の美術工藝の進歩は、いろいろの形をした青銅器——主としてお祭りに酒や食物を供えるための器に見られます。それは意匠いしょうの面白さや、鑄造ちうぞうの技術の精巧せいこうさに驚くものがありますが、またそれにほられた銘めいは古い漢字の形を研究する上のいい標ひょう本ほんになつています。



上代の
 通貨 (比例尺は不同)
 貝貨 (1)
 骨貨 (貝貨にまねて作つたもの) (2)
 布 (3)
 刀錢 (4)
 圓錢 (5)

畫像石といふのは石灰石の表面を平にして、うす肉ほりでいろいろの圖象をあらわしたものです。古代の風俗を見るに最も都合のいいものです。上の圖ではすわつておじぎしているのが見えるでせう。下の圖は宴會のところ。下の段の左の部分にだいどころです。こういう石は後漢のときの廟などの壁に使われたものです。



後漢時代の畫像石



四、萬里の長城

— 秦 時 代 —

大 皇 帝



太 皇 帝

前に申したように、秦の國王の政は、長い間の争亂をしずめて、支那の大統一者支配者となりますと、大昔の三皇五帝の功德を、自分ひとり兼ねた、王の王だという誇から、皇帝という尊稱をつかうことにしました。天子のことを、皇帝といふ。また昔は王や后などが死ぬと、家來達かその主君の行などによって

というものをつける習慣がありました。家來のくせに、その主君をかれこれ批評するのは不都合だといって、この秦の皇帝は諡をつけることをやめさせ、自ら第一世皇帝という意味で、始皇帝と稱しました。そうして子子孫孫に傳えて、二世三世もって萬世の末までも、秦の國を榮えさせると意氣込んでいました。

シナはこの秦になって、今まで分裂して、勢力を争って居た國國が、すっかり滅されて、一まとまりになったので、秦ではまた分立の起るもとなるような封建制度をやめ、すべてを皇帝が直接支配する、郡縣の制としました。漢民族はこれではじめて、統一された大國家を、見ることとなったのです。そこで天下に再び騒動の起らないように、武器を取上げるとか、人民に皇帝の威嚴を示すため、美、美、美の行列をして、各地を巡行するとかする一方には、度量衡の制度を改めて、全國同一のもの、さし、ますやはかりを、用いさせることをさめましたし、文字も以前の大篆のような面倒な形から、簡単な小篆や隸書を作って使わせることとしました。この統一政策はさらに進ん

で人人の思想を統一して、秦の政府の方針の法律萬能主義に、服従させようとした。それで李斯という大臣の上奏によって、道德政治などを主張するのは、危険思想として取締ることとし、その手始めに人民のもっている書物は、醫書や卜の書や農業の本のほかは、すべて政府に差出させ、これを焼棄してしまいました。これを焚書の事件といえます。それからそういう思想を宣傳する都の儒學者を捕えて、四百六十人も生埋にしました。これを坑儒の事件といえます。これでやっと危険思想を禁止することが出来たと、皇帝もその大臣達も安心をしました。また皇帝の強い権力の下には、人民は不平ながらもみんな恐れて、うわべは従ったのでありました。

萬里の長城

漢民族がこうしてまとまりついたとき、北の方には匈奴という蒙古人の勢力が、次第に強くなって來ました。匈奴はゴビの沙漠の北に住み、牛・馬・駱駝などを飼い、

その家畜かちくと一しよに、水や草のある所を動きまわっていた游牧民わちやくみんで、騎射きしやが最も上手でした。戦國時代に秦や趙や燕に侵入して、漢民族を苦めたので、趙や燕では、國境に城壁を築いてこれを防いだこともありましたが。始皇帝は大統一を遂げた上は、そういう漢民族の害をなすものをほうっておくのは、その體面に關することですから、三十萬という大軍を出して、これを攻め破り、蒙古の一部分を取りました。そこで侵入を防ぐために、いわゆる萬里の長城を築いたのです。これは前記の戦國時代の城壁をも利用し、山をめぐり谷を越えて、秦の西のはて甘肅省臨洮縣から、東は遼東に達しました。今あるものはつと後の、明の時代に出来たもので、秦のではありません。當時のものはるか北方に築かれたのですが、現在では其のあとが明かでないということです。

始皇帝はその強大な権力で、國內の統一もする、外民族をも撃退する。その宮殿の阿房宮あほうきゆうの如きは、今まで見られなかった大建築で、善をつくし、美を極めたものであって、後に詩人はこれが火災にかかったときの有様を形容して、「火三月紅なり」ともいって居る位です。したいと思うこと、何一つ出来ないことのないこの大皇帝も、

然しなお安心できないことがありました。それは「死」です。そのためいろいろな迷信を信じて、どうかして死からのがれたいと願いました。シナでは昔から、仙人というものが、東海の中の神山に住み、不老不死の薬を作ると信ぜられて居ました。その仙人の處に、その薬をとりに行くのは、方士ほうしといつて特別な修業をした者でありました。始皇帝はこういう方士に頼んでは、その薬を求め、永久の命を得たいと願つたのです。けれども方士たちは、皇帝から澤山のお金をとつて逃げてしまいます。最後の巡幸のときの如きは、「死」という語をつかうことさへ禁じ、犯せば死刑にするさへ申しましたが、それほど欲しがった不死の薬は、とうとう手に入らずに、いやでいやでたまらなかつた死神の手につかまって、この大皇帝はちょうど五十歳で亡くなりました。それは西洋紀元前二一〇年のことです。

虞美人草

始皇帝の次にはその末子の胡亥こがいというのが立って、二世皇帝となりました。この二世皇帝は、父に似もやらぬ愚な性質で、天下を治める腕もなく、ただ自分の快樂ばかり考える人でした。皇帝は賢くなく、政をまかされた大臣等は、勝手なことをして、政をみだすということになったから、始皇帝のときには、その権力に恐れて、反抗しなくも反抗の出来なかつた不平の民は、これを機会に方方でむほんを始めました。その中でも項羽こううと劉邦りゅうほうとが最も有名です。

項羽は書物を習ったときには、「字は姓名が書ければ十分だ」といって、學問には骨を折らず、擊劍を教えられたときには、「劍は一人を相手にするだけのことだ、おれは萬人を敵とする法を學ぶんだ」といって、兵法を研究したということです。項羽と劉邦とは、めいめい方面を分けて、秦の兵と戦いましたが、ついに劉邦がさきに秦の都に討ち入って秦を滅しました。秦は始皇帝が萬世に傳えると威張つた甲斐もなく、たつた二世十五年で亡びてしまつたのです。西紀前二〇六年。

項羽はこれを聞いて、秦の都の咸陽かんようへ急ぎました。道で劉邦を鴻門こうもんに招いて宴会を催し、その場でこれを殺そうとしましたが果さず、劉邦はうまくのがれてしまいました。咸陽に入った項羽は、さんざんに都を荒らし、秦王は殺す、宮殿には火をつける。財寶は奪う、なおひどいことには始皇帝の陵みささげも掘りかえし、そこに埋めてあつた寶物を盗むという亂暴までして、東方に引きあげました。

かくて後この二人の天下争いが始りました。これを漢楚かんその争といひます。それは項羽が自ら西楚せいその霸王、劉邦は漢王と稱していたからです。項羽は年の若い元氣な大將、劉邦はもう五十を越した考えぶかい將軍でした。二人の氣質は、始皇帝の天下巡幸の行列を見たときの感想でもうかがわれましょう——項羽はその盛な様を見て、「よしあいつに代つてやるぞ」と力んだのに、劉邦は「男と生まれたからには、ああなり度いものだ」といふたということです。

二人の争はついに項羽のまけとなりました。垓下がいげという城で、漢の軍に囲まれたと

き、もうその運命をさとり、詩をつくって、その愛して居た虞姫といふ美人に別れをつけ、かこみ 罅を破って逃れましたが、烏江うこうというところで、ついに自殺してしまいました。それは郷里の多くの子弟をひきいて戦に出たが、時に利なくして敗け、多くの青年を殺してしまったことの責任をつよく感じたためでありました。名前だけ書ければいいといった人は、立派な詩人でもあったし、またそういう責任感のつよい將軍でもあったのであります。なおその虞姫の墓からは、あの美しい虞美人草ぐびんそうが萌え出たという傳えもあります。

さてこの戦争に勝って、劉邦は天子の位につきました。これが漢かんの高祖こうそといわれる人です。高祖の政治のやり方は、大體は秦をまねましたが、郡縣制度と封建制度とを交ぜた郡國の制度にし、大名に領土を與えましたが、大切な場所は皇室の直領地ちやくりょうちとしました。

大帝國としての秦は、僅に十五年で亡びましたが、その名はいま私どもがよく使う

シナといふ語のもととなり、また英語のチャイナ (China)、フランス語のシーヌ (Chine)、ドイツ語のヒナ (China) もこれから起りました。この秦のシナ音はチン (Chin) で、これが後にインドに傳わって、チナ (Cina China)、チニスタン (Chinistan) 即ちチンの土地とか訛まがりました。このインド語がヨーロッパに入って前記の語のもととなり、一方はインドに來たシナの僧侶によって、その本國に逆輸入されることとなったのです。秦の名はかくして不滅になったともいえます。

前にいったようにいまの中華民国という國名も、古い中華の考へ方から來たものでありますが、それを西洋風に現わすときには、今の國民政府でも、例へばチャイニーズ・リパブリック (Chinese Republic) と記すように、中華民国のシナ音をローマ字で現わさないで、シナという名稱をとっているのではありません。そういうシナという名のもとが、この秦にあるということはまことに面白いことではありませんか。歴史上の事件というものは、そのときどきに重要な意味があるばかりでなく、その影響が後の世にも及ぶということの、一つのいい例とも申すことができます。

五、沙漠をこえて

—前漢の時代—

男まさりの皇后

漢の高祖は秦に代って天下を取りましたが、それはかの股くぐりで有名な韓信や、張良や蕭何などという、勇將や謀士の輔によるが多かったもので、こういう人人を大そう厚く賞して、自分の一族と同様に、大名にも致しました。

これからの記事に支那の天子をいうとき、例えばこの漢の高祖とか、唐の太宗とか、宋の徽宗とか、明の太祖とかのように、その人の本名でなく、祖とか宗とかいう字の名が現われて來ます。これは廟號というもので、その人人を祭った靈廟の名で、その人を示すわけです。これはまた前にあつた周の文王とか武王とか、また後でいう漢の

武帝とか隋の文帝とかいう、王とか帝とかいう字のついた諡とも別のものであります。シナの天子にはこの諡號と廟號との両方があるのですが、廟號でよく知られているのもあり、諡號で有名なのもあります。実はその人人の姓名を記すのがいいと思いましたが、この本では便宜の上から、廟號なり諡號なり、よく知られている方をとって記述することとおきました。

高祖の皇后の呂氏は、帝がまだ身分のひくい時から、よく夫をたすけ、戦争の間にも辛苦を共にした人でしたが、皇后になると、いろいろ政治の上でも、夫の片腕ともなつてはたさしました。然しその性質が疑いぶかくて、あとで漢の皇室の禍になりそうなのは、大臣でも功臣であっても、これを殺したり、除いたりすることを帝にすすめました。

高祖の次の惠帝のときには、一層その勢力を振り、自分の一家のものを、大臣などにしましたが、よる年波と病とはかかず、權力に心ひかれながらも、ついに高祖の

あとを追いました。あとで一族は不安となり、不安のあげく亂を起しましたが、すぐに滅されてしまいました。

その後、文帝・景帝などが出て、租税を免除したり刑罰を軽くしたりして、民をいたわる政に意を用い、宮中の婦人の衣服も、長くひきずるようなものは許さなかったという位に、質素を旨としました。そのうえ豊年が打つずいて、年貢の穀物もよく納まり、穀物は朝廷の倉にみちみちて、腐るほどになったと伝えられます。

この文帝も景帝も諸侯から出て、本家について皇帝となったので、他の諸侯はとかくこれを軽く見る傾があり、景帝の時には一層わがままになりました。そこで景帝は帝室の威を示すために、吳王の領土を削ったところ、吳王は楚王など七國を誘い、いわゆる吳楚七國の亂を起しました。一時は大騒ぎでありましたがついに帝室の勝利となり、これらの諸國は全く大名たる実力は奪われることとなりました。それで皇帝の権力は非常に強くなり、その富はまた前にいったように、増大して來ましたが、こう

いう時に、景帝について天子となったのが、武帝というえらい方でした。

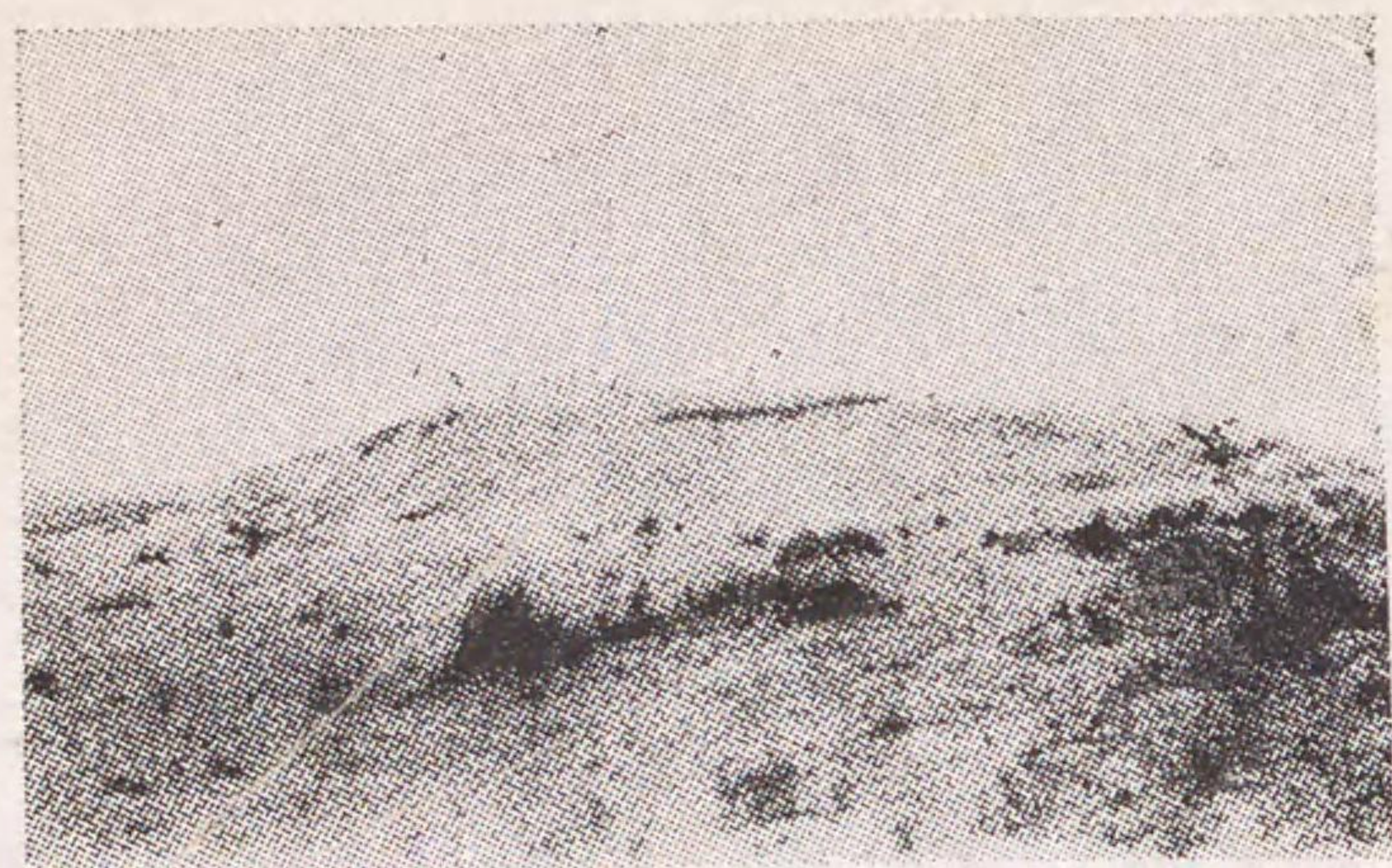
土産の葡萄

武帝は文武いづれにも、すぐれた才能をもった上、前に申したように、権力も強く國庫も富むといふ好都合のときに、帝位につきましましたから、これこそ鬼に鐵棒かねぼう。何事でもできるはずであつたし、また實際いろいろな仕事をして、大皇帝たる偉大いだいさを示しました。

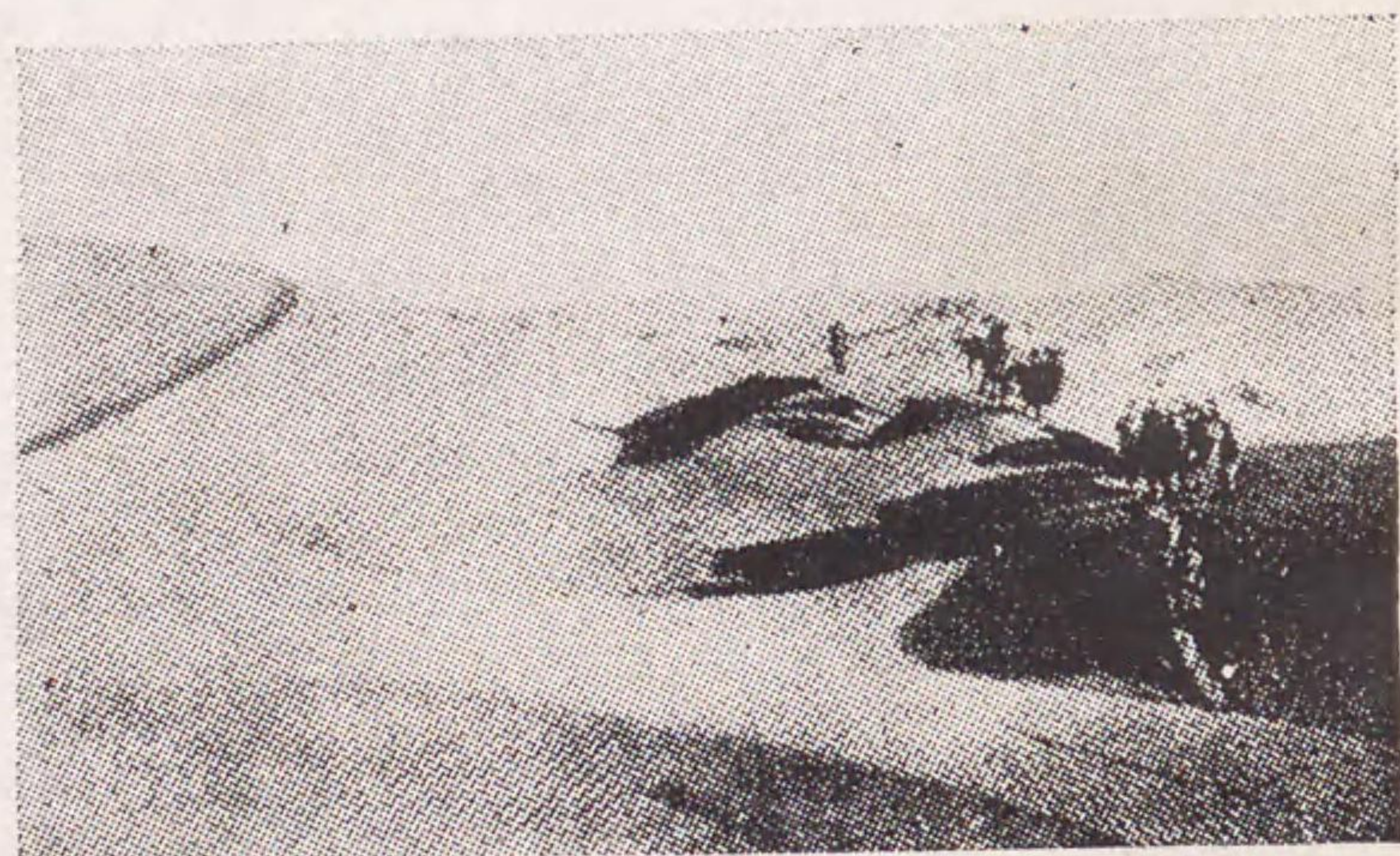
前に秦に破られた匈奴きゆうとは、漢の初に勢をもりかえし、漢の領土を侵したので、高祖はこれを討つたが負けて、擒とらにされたこともありましました。それゆえ匈奴は鼻っぱりが強く、漢は内親王支那では公主といひます。を、その酋長しゅうちやうの妻にやつて、御機嫌をとるといふ有様でした。こんなことは、武帝が我慢できるはずはありません。それでたびたびこれを討つために兵を出しましたが、最後の勝利を得るには、西の方の國國と同盟するのが、

得策だと考えました。それで前に匈奴にひどい目にあつて、西方へ逃げた大月氏といふトルコ人の國に、使を出すことになりました。

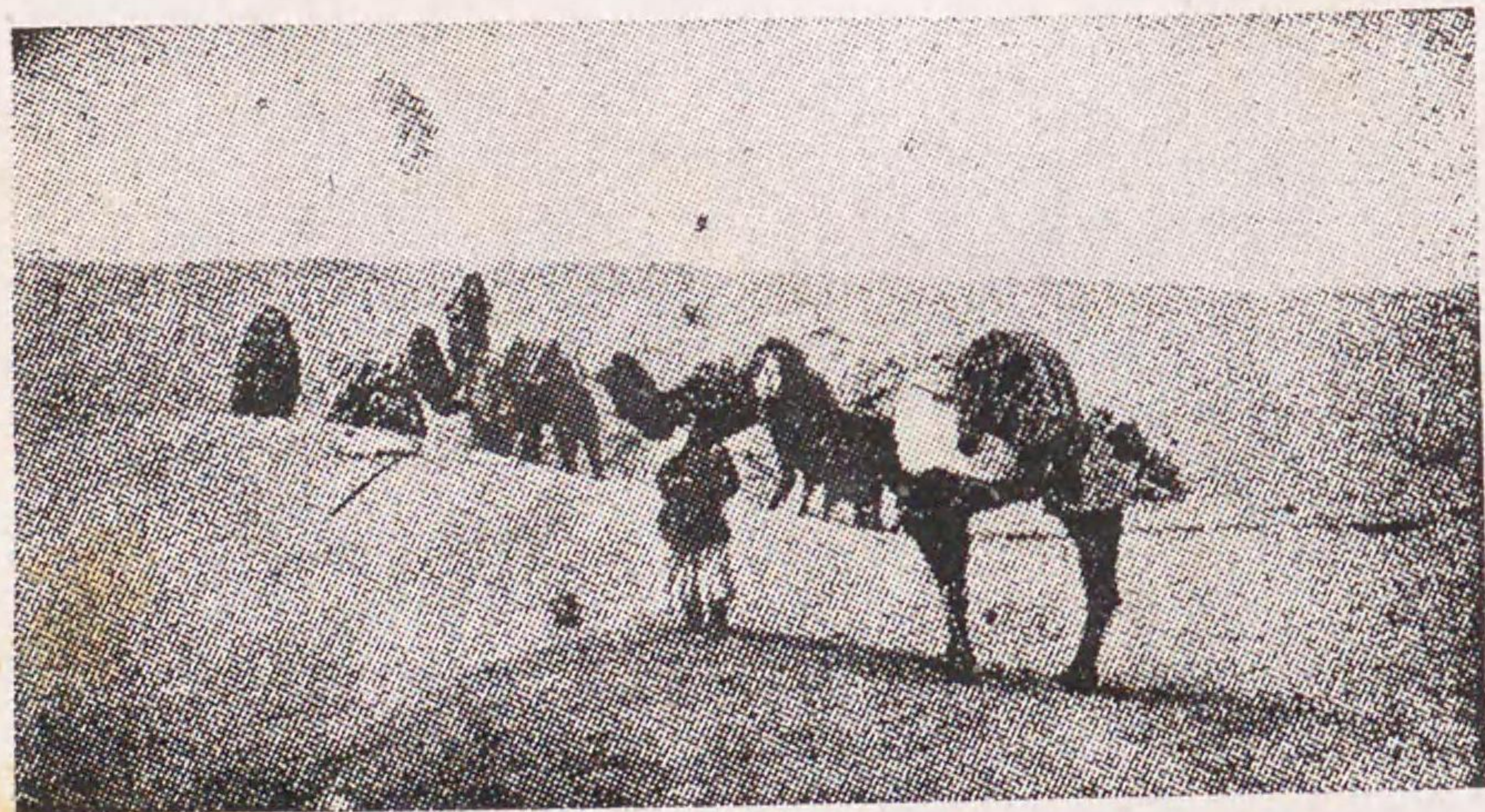
今の地圖で、新疆省という民國の西の地方や、そのまた西の中央アジアなどを、漢の時代には西域と總稱して居ました。そこには沙漠もあれば、峻しい山山も連つて居るし、氣候も大變にわるいのですから、その旅行の困難はいうまでもありません。今まで人のやらなかつたこの冒険旅行は、こういう地理上の苦みの上に、更に匈奴の勢力の及んだ地方を通るので、その危険も一通りではなかつたでしょう。この冒険的な使に、自ら進んで當つた人を張騫といひます。西洋紀元前一三九九年に首府の長安を立て、西に向いましたところ、途中で匈奴につかまり、十年ばかりも捕虜とされましたが、やっと免れて苦心の末、目ざす大月氏に着き、使命を伝えることができました。然しこのさんざんな、苦しみのあげくの願ひにも拘らず、大月氏は應じてくれませんでした、仕方なくまた本國への、つらい旅をつづけなければなりません。



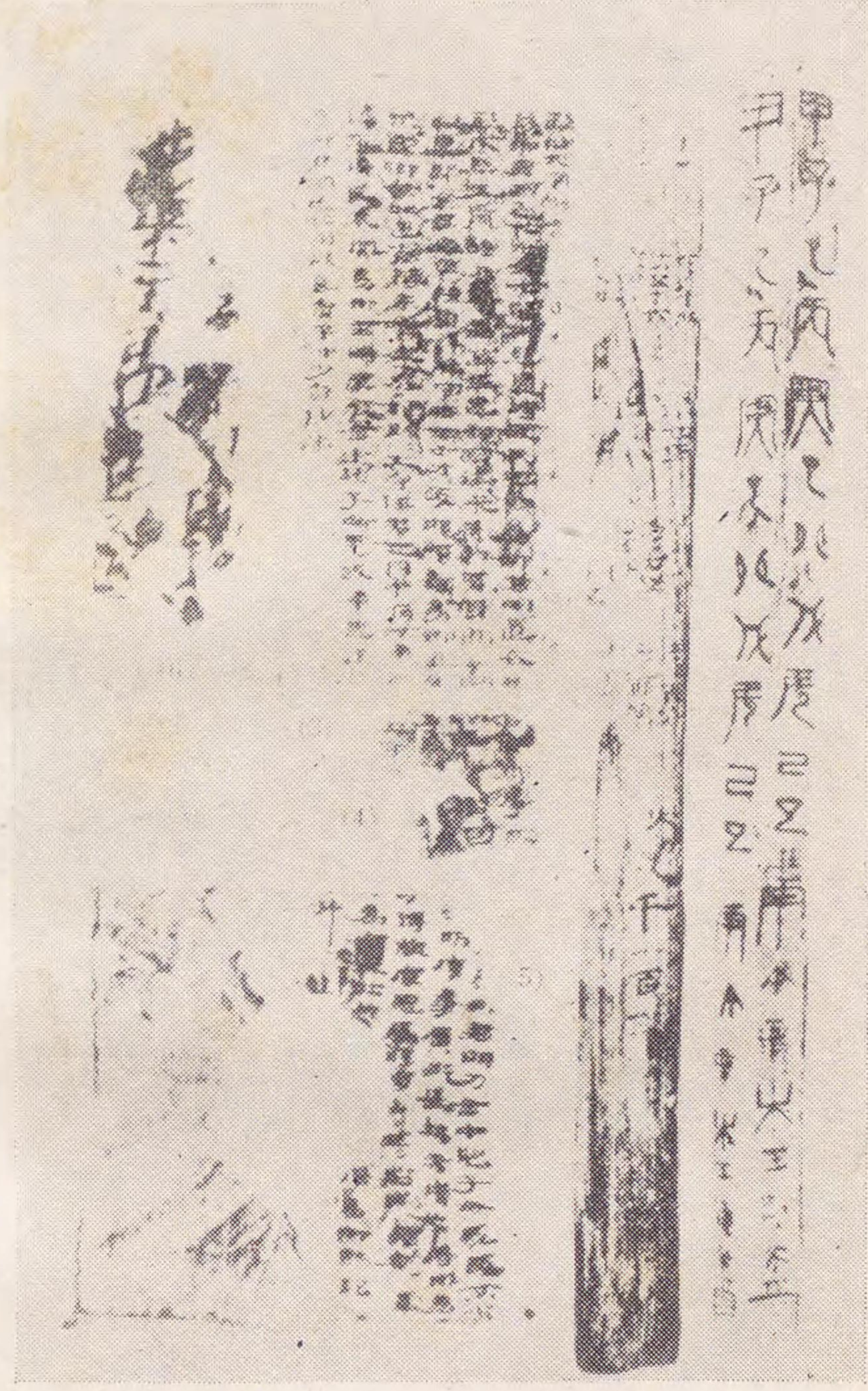
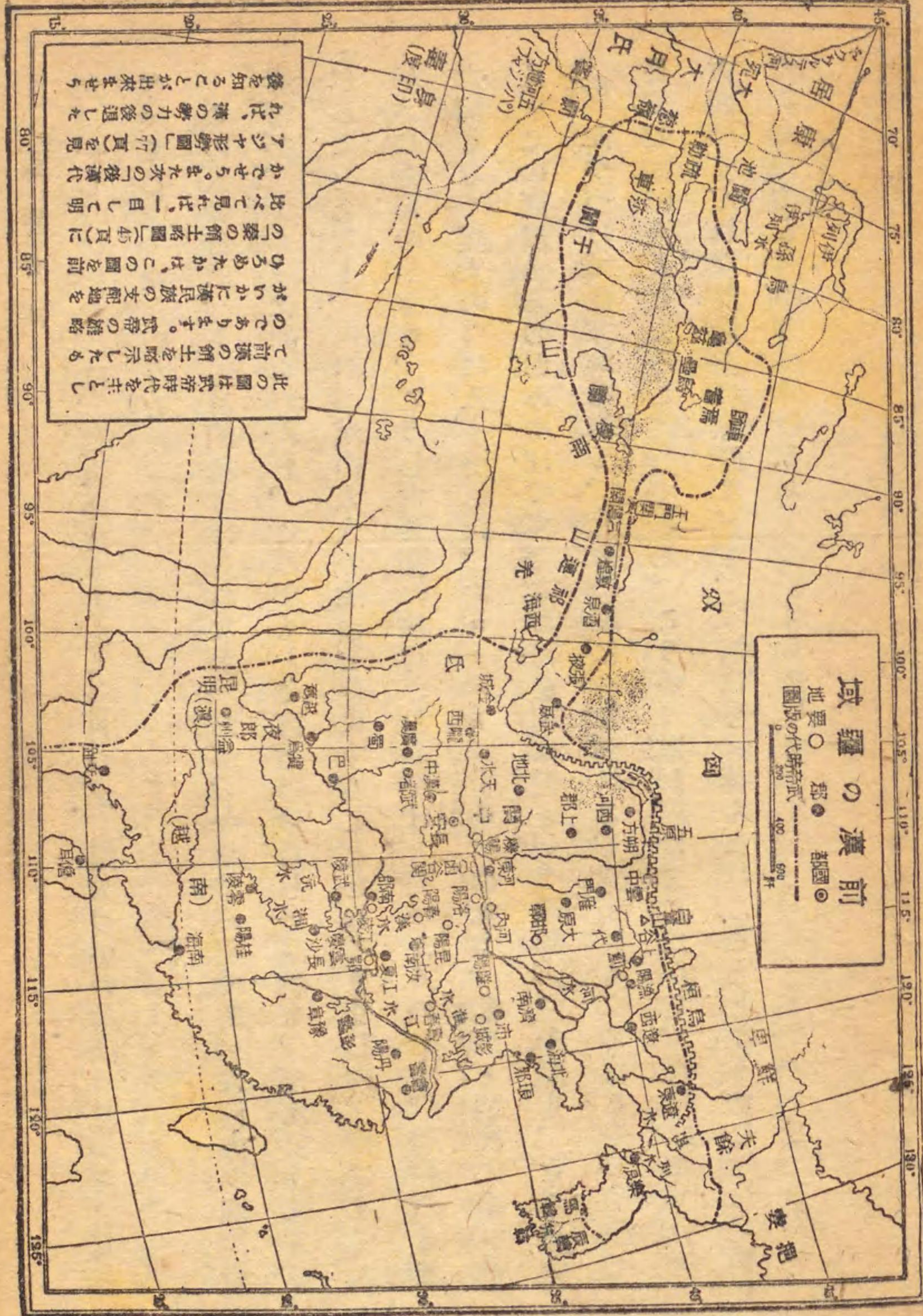
漢時代の長城のあと (新疆省内)



タクラマカン沙漠 (新疆省内)



中と下 二圖はタクラマカン沙漠の現況
張騫や班超の探検のあとを想像する一つの
の参考になりましよう。



漢代の木簡、帛書、紙 (頁74参照)

た。一しよに出たのは、百人あまりもありましたが、歸りついた時は、たった二人と
なってしまったということです。

この大旅行は、その目的は遂げられなかったが、今まで不明であった西方の國國の
事情が、よく漢に知られたし、これがもとで西方の珍らしい品物も、だんだん輸入さ
れることとなり、それが漢の人人の生活を豊にすることもなりました。皆さんの大
好きな葡萄の如きも、こうした張騫ちやうせんの旅行のおみやげともいえるのです。葡萄酒もま
た間もなく漢人の口に入りました。クローバーウマノコ（苜蓿）の如き、胡瓜きうり・胡桃くるみ・胡麻ごま
んなこの西域からのおみやげです。なお汗血馬かんげつばなどという名馬が三千頭も、その高い
嘶うなりをつづけて西方から来て、武帝の厩につながれる、魔術使もはるばるやって来て
長安で都の人人をよろこばしました。こういう道が開けましたから、後にはギリシャ
方面のすぐれた美術上の意匠なども、次第に漢に伝えられることとなりましたし、ま
た漢の産物も西の方へ傳わるようにもなりました。

さて張騫の使に出ていた間も、武帝は決して匈奴のことをすておいたのではなく、
將軍を出して之れを討たせもしましたが、張騫の歸つた後にはさらに大軍を發して、
大いにこれを破り、遠くゴビの沙漠の北に撃退して、漢民族は一時その大勝利を祝い
ました。その後で張騫は西域せいやくの國の烏孫ウソンという國これもトルコ人の國です。に出かけて、この國をは
じめ多くの西方の國國に、漢へ貢みつぎを納めることを誓ちかわせました。

それから武帝は、今の滿洲りょうとうの遼東から朝鮮北部をも、領土に加えました。この遼東
の地方には、古くから漢民族の植民したのもありましたので、周の始めに殷いんの一族
の箕子きしが難を避けて来て、朝鮮という國を建てたなどという傳説も作られていました。
それはとにかく、箕氏を名のる朝鮮國、それを滅して戰國の末に興つた衛ゑい氏の朝鮮國
は、ともに漢民族の建てたもので北部朝鮮に及び、今の平壤を首府としていました。武
帝はこの衛氏の朝鮮を滅して四郡を設けましたが、中にも樂浪郡らくろうは平壤附近を中心と
したもので、そこは長く漢人の植民地として開けたところでした。當時の古墳こかみは今も大

同江南に千餘も遺っていて、そこからの發掘品は、漢代の文化を物語る貴重な資料であります。なお半島の南部には、土着の韓族の國が群立していて、辰韓・馬韓・弁韓などと總稱されましたが、それぞれ中に多くの小國を含んでいました。

漢の勢力の及んだ所を、地圖で御覽になれば、どんなに漢族の領土が、秦のときより廣くなったかということが、おわかりになりましょう。

不老の神藥

武帝はこういう外國征伐の一方に、文事にも注意し、まず董仲舒という學者の説を採用して、儒學をもつて政治や教育の方針を定めました。シナで儒學が國家の政治や教育と、密接な關係をもつようになったのは、この時からのことです。帝自身も有名な詩を作りましたが、「史記」の著者たる大歴史家の司馬遷や、多くの美しい文章を書いた司馬相如も出ました。また東方朔という人は文章も上手として知られて居まし

たが、いろいろの滑稽をもつて宮中を賑わし、そのうちによく帝を諫めて、その惡を改めさせたということです。武帝もかの始皇帝のように、不老不死を願ひ、方士の言葉に迷つて澤山な費用をつかったり、仙人に逢うため、神藥を作るためには、馬鹿馬鹿しいような建物をも、やたらに造りました。皇帝のこういう迷信は、いろいろわるい事が、宮中で流行するものともなり、遂には皇太子を殺すにさへ至りました。

こんなことに非常に無駄づかいをしました上、前にいったような多くの戦争に、また大變な費用をかけましたから、さしもの國の富も残りなく、その補は民間からとらなければなりませんでした。それで租税も高くする、新しい税もふやす、或は賣官といつて金を納めたものには、官職を授けることや、その他の種種なことを考へ出しました。然し何れにしても、民から搾り取るのですから、人民の不平はだんだん高くなり、恨も重なつて來ました。人民のこういう様子を見て、その結果の恐ろしいことを察しましたから、根は賢い皇帝ですから、武帝は詔を發して民をなだめ、無事にその

治世を過ごすことを得ました。

なお武帝の時に、初めて年號というものがたてられました。これは前にいった方士の説に基いて、その御代のさいさを壽ぐことばためにしたのです。これがもとで代代めたい名を選び、いやな事が起れば、すぐ改めることもしました。日本でもずっと後になってシナにならって、年號を立てることとなり、今日に及んで居るのは御承知のことでしょう。

武帝から二代目の宣帝は、内は民治に心をつくし、外は匈奴を破り、西域の國國をも服して、西域都護府を設けました。また帝が宮中の麒麟閣に、文武の功臣の肖像を描かせたことは名高い話です。

美人の嘆き

次の元帝のときに、匈奴は南北に分れて争をしましたが、その南の方の酋長は漢に

援をたのみ、なおその身の安全を謀ることから、結婚をも許されたいと願って來ました。前にちよつといいましたように、匈奴などの民族から漢の内親王を、妻にと願って來たことは、時時ありました。元帝はこの南の酋長をなずけて、北と争わせておくことは漢にとっては都合のいいことゆえ、これを保護してやりました。さて誰をその匈奴の妻にやろうか——これには少しこまりました。が宮中の女官の中から、一番醜いものを選ぶことにしました、

シナでは後宮こうきゅう 婦人たちは宮中の一番奥の建物に居るから、こういふのです。の美姫三千などといって、天子に仕えるものだけでも大變な數です。その宮女を宮中に召されるときには、宮中のお抱えの畫家が、その姿を寫したのだそうです。それでどんなおたふくでも、みんな美しく描いてもらわうと、畫家に賄賂をやつて、うまく美人になりすましました。そういう中にただひとり王昭君おうしやうくんというほんとうの美人だけは、そんなことをしませんでしたために、醜い姿にかかれました。その繪姿が帝の目に觸れたので、「この女を遣わせ」とい

ことになりました。お暇乞いとまごをしに來た王昭君の美しい姿に、元帝は驚きもし、惜しくもなつたということですが、約束は破ることが出来ません。王昭君は馬上に琵琶びわをかかえて、遠く北の旅に上つたと申します。そうして蒙古の地に天幕を家とし、慣れぬ生活の中にも、常に漢を慕いながら、その一生を送りました。その墓にはその周囲の様子と違っていつも青青とした草が生えるといひ傳えて居ります。王昭君が北への旅の姿は、シナでは詩にも畫にもよく題材とされます。

飛行機の出現

そののち漢の皇室では、外戚がいせきの王氏の一家が勢力を振り出し、平帝の時には、王莽わうもうが攝政となりました。王莽はうわべは儉約謙遜けんそんにして、周の善政を行うことをいひふらしましたが、實はなかなかずるい政治家で、いろいろと小刀細工こがたなざいくをして人望を集め皇帝の位をねらつたのでした。そのころ漢では、未來記みらいきとか豫言とかいふものが大

變に信じられて居ましたので、王莽は自分の手下にいつけて、自分の評判の高くなるようなことをしくませました。その上手なやり方にだまされたり、その學問に感心したりして、王莽の學徳を讚美して、漢の朝廷に書をたてまつつた者が、四十八萬五千百七十人もあつたということです。こういう勢になると、さらにへつらう者も出て來まして、ある井いどから白い石が出たが、それには「王莽が皇帝になる」と書いてあつたなどと上奏するものもありました。でついに王莽はその豫言を實行して、漢の皇帝を廢して自ら帝位につき、國の名も新しんとつけました。それは西洋曆の八年の事でした。これから何年何十年などと記すのは、すべて西洋曆を略したものと想つて下さい。

さて王莽は皇帝になると、政治上にいろいろと新しい企くわだてをして、人人の心を引きつけようとしたが、その新政がまことにめちやくちやに行われたので、人民の迷惑めいわくは一通りではありません。前の讚美者は、今はもう不平たらたらになりました。殊に貨弊は澤山の種類を出しましたが、その相場そうばを勝手に、どんどんかえましたか

ら、元來こういう方面に、鋭敏な漢民族は、王莽の政治を呪うようになりました。

このときまた匈奴の侵入も始まりました。王莽は前に申したような人ですから、匈奴を征伐するには、何か新しい方法でやりたいと思ひ、天下に令して、兵器兵術の新式なものを募りました。その中に「一日よく千里を飛んで、敵状をうかがうことが出来る」という、兵器の發明者がありましたので、早速それを採用しました。これは鳥の形に作ったものの上に乗って、始めは風たかのように綱であけてもらひ、そこから機械のしかけで動くものであったらしいのです。いよいよそれをやってみると、數十間飛んだころ、ついに墜落ついでしたと伝えられて居ます。失敗ではありましたが、恐らくこれが世界最初の飛行機、しかも軍用飛行機で、そうしてまた恐らく世界最初の墜落の記録でしょう。

さて匈奴征伐も思うようにならず、國內には方方にむほん人が出て来る。王莽に倒された漢の一族の劉秀リウシウは、このとき復讐を企てまして、とうとう二十三年に新を滅し

て、また漢の皇室を再興し、都を洛陽らくやうにさだめました。この劉秀を後漢ごかんの光武帝こうぶていと申します。漢はこういう風に前後の二期になりますので、王莽が滅した以前を前漢、光武帝からを後漢といひます。またその首府の位置から、前を西漢、後を東漢と分けて呼ぶことあります。

六、ローマへの道

—後漢の時代—

佛 陀 の 福 音

光武帝は天下の騒ぎを鎮めてから、王莽のときのわるい習慣を除いて、節義を尙ぶ氣風を養成することにとめました。次の明帝も民政に心をつくしましたが、帝の治世には、シナの信仰上の重要な出来事——佛教傳來の話が織込まれています。

佛教はインドの釋迦しやかが始めたものであることは申すまでもありません。釋迦は姓を喬多摩ぎょうたまた、名を悉達多しつたるとといい、年代は孔子よりも少し前——西曆前六世紀の中頃——にインドの一城主の王子として生れ、何不自由なく、この世の樂みも喜びをも、味おうことが出来ました。然しつくづく人間の世には、苦の多いことや、また人人がその苦

みにわずらわされている有様を見て、これから免れ、これを救おうと決心された。それで王者となるべき身分をもすてて山に入り、聖者しやうじやにいたり、獨り思案したりしてついに覺さとりを開き、今までインドにあったバラモン教などの他に、別の新しい宗教——佛教——を唱え出したのです。

ここで昔のインドの事を一言しておきましょう。インドは今のヨーロッパ人と同じアリヤン族が、中央アジア地方から、インド河の上流に侵入し、土着民を征服して、最初の社會を作つたのが、四千年位前のことと伝えられています。それからだんだんと東の方に進んで、ガンガ河域に及び、やがては南の地方をも占めました。然し統一されたのではなくて、小さい澤山の國——部落——の群立の有様でした。そういう間にその社會には、僧族・王族・平民（以上はアリヤン族）・奴隸（土人）の四階級が出来、僧族のみが絶對最高の地位を占め、その宗教バラモン教の教權を握って、他の階級を抑え、その間には厳しい法律で取締りがありました。然し僧族の増長と墮落を見て、

宗教を改革して、社會的にも宗教的にも、平和安心を得たいという希望が、多くの人の中に起りました。釋迦はこういう萬民の熱望にのつて、救ひ主として現われたものであります。

この佛教はその後、インドを初めて統一した阿育王アソカ王のとき、その保護によつて、全インドにひろまりました上、北は中央アジアにも、南は海をこえてセイロンにも傳わりました。そうして中央アジア方面から、さらに東して、前漢の終り頃には、たしかにシナにも傳つたと思われます。然し有名な物語りは、明帝が或るとき、西方に功德あらたかな神のあることを夢みて、佛陀ぶつだの教のあることを知り、そこで使を大月氏國に出して、經文や佛像を得、僧侶を伴い歸つたといふのです。そうしてその僧侶たちは、洛陽の白馬寺はくばじといふのに居て、經文を漢文に譯したといふことですが、これはどうも後世の作り話のようです。

それから後には、次第に西の方から僧侶の來ることが多くなり、布教も盛になれば、信者もふえて來ました。そうしてずっと後の時代にはなりますが、朝鮮にも、それからまた日本にも、ひろまったのです。佛教はシナ人の信仰上ばかりでなく、その藝術の上に影響したことは非常なものでした。それはまたあとで申しませう。明帝のつぎの章帝しょうていも、よく人民の苦を察して、善政を行いましたから、天下は太平を樂みました。

紙の發明

シナでは早くから文字もつくられ、書物もできたことは、前からの話でお分りになつたでしょうが、そういう書物を、私どのがいま普通に見るもののお考えになつたら大間違であります。第一、いま考えるような紙は、當時まだシナにはありませんでした、それどころかいま文明を誇る西洋にだってなかつたのです。

それならその頃の書物は、どんなものであつたかと申しますと、その頁ページは竹片です。

竹を短冊形に割り、火に炙つてあぶらをぬいて使つたのを簡かんといいます。これに金属の筆でほりつけたこともありましよう。後に墨や毛筆が發明されてからは、それをも使いました。そういう頁は麻糸か鞣革なめしがわでくくられたのです。書物を數えるのに、一卷二卷などというのはそのためです。また木片を用いたこともありましようし、帛はく即ち絹を使つたこともありましよう。歴史に名を傳えることを「名を竹帛に垂たる」などというのもこういう事實からおこつたのであります。

そういうものが、紙の役目をして居ましたが、竹や木の不便はいうまでもなく、絹も價が高くても實用的ではありません。それでもっと便利なものの發明には、どんなに多くの人人が、苦心をしたことでしょうか。そういう事情は、もとより少しも記されては居りませんが、この後漢の和帝のとき元興元年西暦では一〇五年。日本では日本武尊で有名な景行天皇の御世に、宦官かん宮中の女官の蔡倫さいりんという人が、とうとう一つの發明に成功しました。この紙は樹皮や古い麻布などを煮とかし、それを漉すいて作つたのです。これは今日普通に考ふる

紙の形式よりも、或は布に近かつたものであるかも知れませんが、この製紙法の發明は、非常な惠を人人に與えたものであつたことは、いうまでもありません。

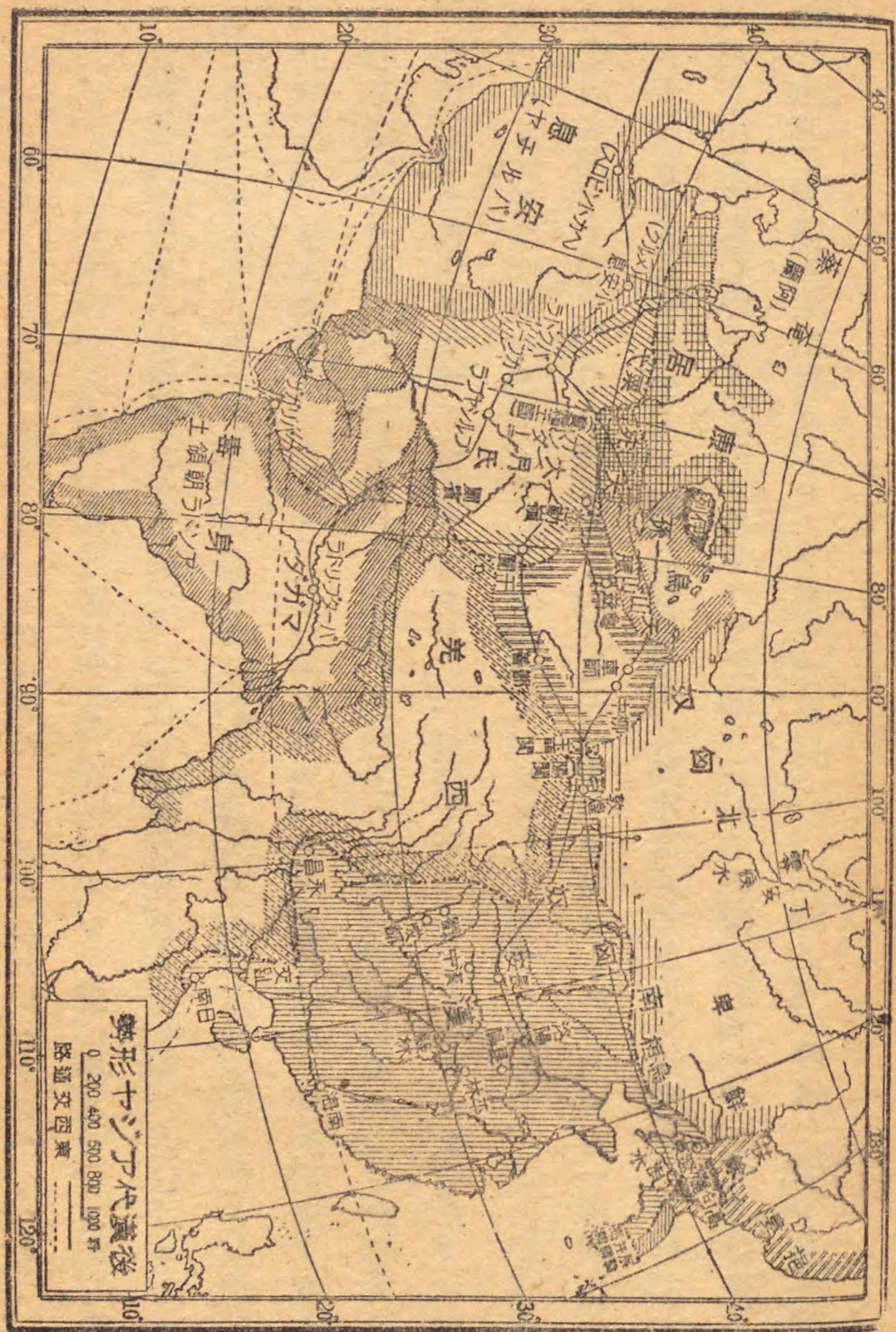
これからいろいろの改良があつて、多くの種類の紙が、時代の下るままにつくられて來ました、そうしてそれはずっと後のことにはなりません、唐の時代に、サラセンというアラビヤ人の國に傳わり、そこでまた改良があり、更にそれがヨーロッパに入りました。ヨーロッパで、またまた改良が加えられて、ついに今日の西洋紙となつたのであります。それゆゑ、西洋紙・西洋紙とは申しますが、その先祖をだんだん調べて見ると、それはシナの人の千八百年も昔の大發明が、もとになつて居るとは、驚くべきことではありませんか。

ローマへの道

この後漢の初めに、匈奴はまたその勢をもち返して來まして、西域の國國を征服す

るとともに、漢の領土をも荒らしました。そのうちに匈奴は更に南北に分れて争を始めたので、漢は南方を保護し、兵を遣はして北匈奴を討ち、大いにこれを破りました。そうした上で一方には班超はんちゆうという人をして、西方の國國の平定をさせました。班超は僅か卅六人の勇士と共に、その使の道に上り、まず鄯善ぜんぜんという國に行きました。その國王は初めは班超を優待しましたが、匈奴の使者が来てから急に態度をかえたので、班超は怒って一夜匈奴の使者を襲い殺し、國王を驚かして漢に降参させました。それからほかの國國をも勢に乗じて、次ぎ次ぎに従え、ついにまた一時たえてゐた昔の西域いせいとく都護を置くこととしました。

班超は西域のことに力をつくし、止まること前後三十一年、よく西方の外民族の心を服しました。が何分にも血氣の壯年で故郷を去ったさきで、白髪のお翁となりましたので、都こいしい心にはうちかてません。勅許を得て歸朝しました。その滞在中の一つの重大な仕事は、西方のローマたいしん（當時漢では大秦という名でよびました）に使を



出して交通を開こうとしたことです。この使者は、はるばる長い旅を西へつづけて、安息あんそく（西洋史にいうパルチヤ）という國に着き、今のペルシャ灣の岸まで行きましたが、更に西への航海の困難をきかされて、やむを得ず引き返しました。それはローマの豊ゆたかであり、金銀や夜光の珠や、珊瑚そのほかの珍奇のものに富むということが知られて居たから、貿易の利を收めようとしたのでした。この旅行はかく目的を達するとは出来ませんでした。然しこれで漢人の地理上の知識を、更に廣めさせたのも事實であり、また西方の貨物を輸入する道を、一層廣くすることともなりました。

なほローマの方では昔からシナの絹を大へんに珍重して居ましたので、その絹は黄金と目方を同じくして、取引されたということです。またヨーロッパの古い地理書などには、シナのことを絹の國・蚕の國などと、呼んだこともある位です。それでシナに使を出そうとしたこともあつたようですが、とかく邪魔があつて、うまく行きませんでした。後漢の末頃には、ローマ皇帝安敦あんどんマルクス・オウレリウス・アントニウス? の使と稱する者が

海路はるばる漢の南方海岸（今のフランス領インドシナの安南）に來て、交通を求めました。これは當時の西方の大文明國と、東方のそれとの握手であつて、世界史の上の一大事件とも申されましょう。ただそれは不幸にして永くはつづきませんでした。

襁褓きょうほ皇帝こうてい

元帝げんていの後には幼い皇帝がつづきました。中には生後僅かに百日位の皇帝もありましたので、後漢の歴史には襁褓皇帝きょうほてい——襁褓おむつにくるまつてる皇帝——なども記している位です。こうなると外戚がいせきの人人が、勝手なことをしやすいのは當り前のことで、中にも梁氏りやうしというのが、一番はびこつて來ました。桓帝こうていはその餘りに我がままなのを怒つて、宦官かんがんと相談し兵力をもつてこれを倒し、その一族の家財は沒收して、せり賣にしたりと、その賣上げ金はその年の租税そぜいを、半分にへらしてもいい程であつたと傳えられています。

然しこの事件のために、宦官が政治上に、その勢力を振うようになりましたので、漢は一難去ってまた一難という、氣の毒な有様に陥りました。宦官はもともと宮中の女官の取締をする、軽い役人でありましたが、天子の側近く仕える關係から、前にもあったように、とかく政治に口を入れることが出来たのであります（これから後もたびたびこの宦官というものが、政治の上に勢力をふるい、悪事を行ったことがありません）。餘りに宦官が勝手なことを始め出しましたので、官吏や學者の中には、その政治のやり方を攻撃するものが起りました。宦官はこういう人人を壓迫し、或は殺し或は牢屋にぶちこんで、その安全を謀ろうとしました。

それで正義をいい立てて、悪人を除こうとすれば、皆ひどい目にあうというのですから、人心は平和を得ることが出来ません。これはまた野心家の事をたくらむには、都合のいい時となります。まず張角というものが、迷信を利用して、數萬の徒黨をあたため、一騒動を起しました。この徒は黄色の巾をつけて、その印としましたから、黄

巾の賊といわれます。張角はそののち間もなく死にしましたが、部下は各地に散らばって騒ぎを大きくしました。そういう動搖に乗じて、袁紹といふ將軍は兵を率いて宮中に亂入し、宦官をみな殺しにして、皇室の安全をはかったこともありました。

そのとき董卓というものが出て来て、袁紹の勢力を破り、獻帝という天子を立てました。董卓は一族をみな大官につけ、財産もつくり、これでうまく行けば皇帝の位をも奪おう、しくじってもこの財産で安樂に暮そうと、虫のいいことを考えましたが、そうは問屋でおろしません、部下に殺されてしまいました。この人は大へん肥って居たので、いたずら者がそのお臍に火を置いたら、日中からあけ方まで、とぼって居たというお話もあります。

その後には詩人で武將の曹操という人が、獻帝をもち立てて北方の勢力となり、これに對して孫權や劉備が出てまいりました。そうして後漢の天子は、ちやうど渦の中にまきこまれた藁屑のように、ただこの連中のつくる渦のままに、動かされるより仕

方がありませんでした。

曹操は最も勢が強かったから、南方を併せて統一をしようと考え、水軍を率いて、揚子江を下り、孫權へ手紙を出して、「海軍八十萬をつれて、あなたの御領地で獵を致します」と申し送った。これは戦争をほめかしたのであります、これにさきだつて孫權は、劉備と同盟がしてありましたから、部下の驚きにもかかわらず、戦備をととのえ、劉備の軍と力をあわせて、揚子江の中流の赤壁（今の武昌の附近）の下に之れを防ぎ、謀（はかりごと）を設けて曹操の軍船を焼さうちにして大勝利を得ました（これは二〇八年のこと。日本では應神天皇の御世の初め）。これからこの三つの勢力は、お互に結んだり、離れたりして、相争うこと十數年に及びました。

七、北方の嵐

——三國・晋、南北朝の時代——

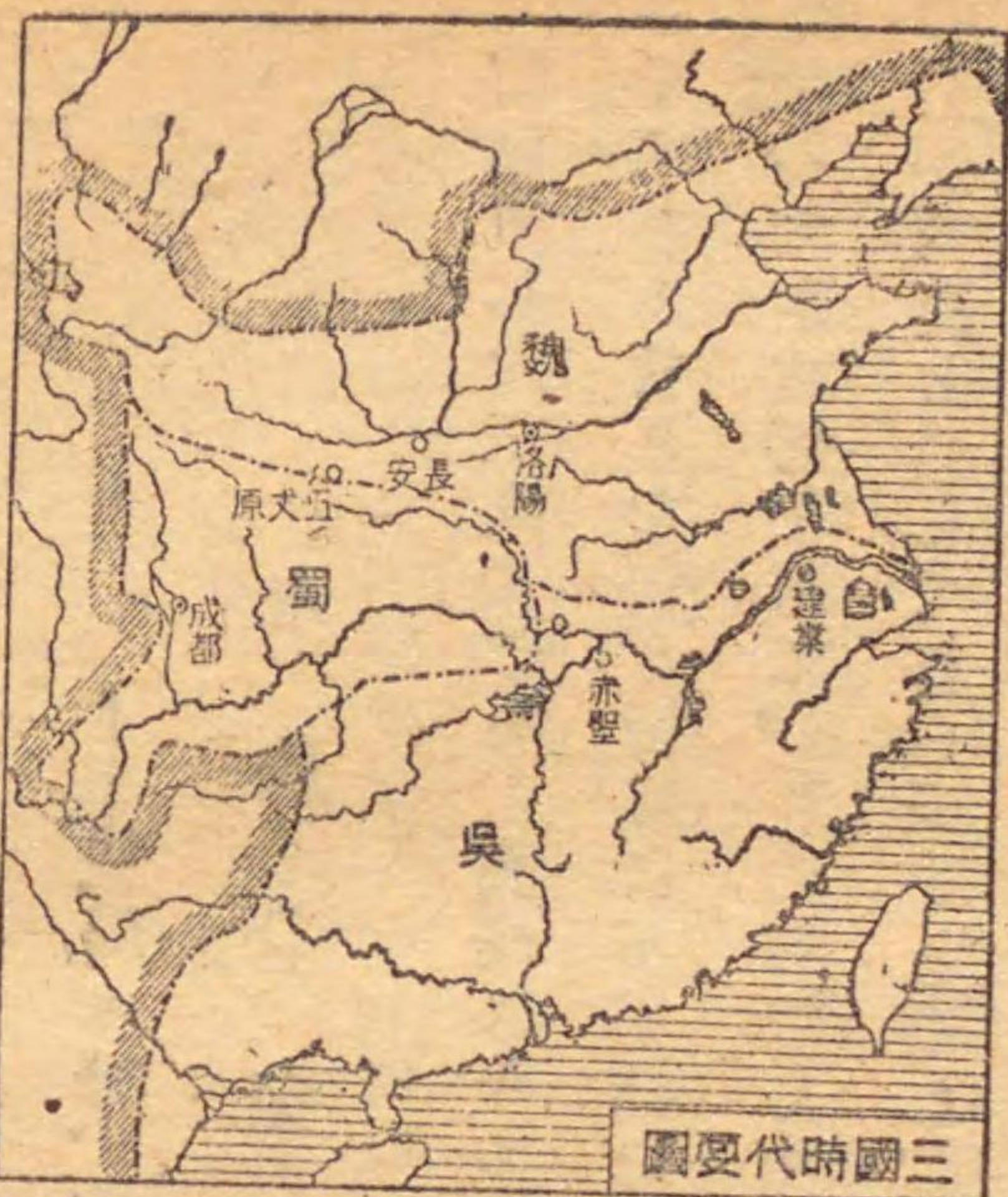
水魚の交り

前に申した三人のうち、劉備は今の四川省方面にその根據地をつくり、その地は小さくはありましたが、智謀にすぐれた諸葛亮（字は孔明）と、武勇ならびなき關羽や張飛の如き武將を得て、北の曹操や東の孫權に對抗していました。その中に曹操の子の丕が後漢を滅して自ら天子と稱し、國を魏と號しました。これは二二〇年のこと。劉備は漢の皇室の子孫と稱して居たものですから、自らそのあとをついで、漢の皇帝の即位式を成都（四川省）で行いました（この國を蜀とも蜀漢ともいいます。蜀とは四川省の異名です）。それから間もなく孫權もまた皇帝を稱し、首府を建業（今の南京）にさだめました。かく三つの國が出来て勢力

を争いましたから、これから晋の統一までを三國の時代といひます。

蜀の國の政につとめた諸葛孔明は、もと世の亂を避けて田舎にかくれて居たのを、

劉備が尋ねてその力をかしてと頼み、一度二度ならず、三度までも願ひに行つたので、



劉備のために骨を折ることになつた人で、劉備は「自分が孔明の援を得たのは、魚が水を得たやうなものだ」と、感謝していたといふことです。孔明は内に政をととのえると共に、その徳望をもつて、南方の外民族をも征服して國境の憂を絶ち、國勢を張ることにつとめました。劉備の死ぬ時には、「もし我が子に

どうかか皇帝たるねうちがあるなら、どうかたすけてやってもらいたい。さもなければ君が代つて位を取り給え」と遺言した。孔明は涙を流してその有り難い言葉に感謝

しましたが、自分はあくまで幼主のために、忠實をつくしますと誓いました。

孔明はかくてこの幼帝をたすけて、一層内外の國務につとめました。魏を伐つときの

上奏文 出師の表といひます の如きは、これを讀んで泣かない者は、人でないといわれた位に、

一言一句、まごころでつづられたものでした。魏を討ちに出ては、智をねり謀をめぐらして、敵の大軍をしはしばやましましたが、五丈原という所で、魏と對陣中、その智謀も忠實もいかんともしがたく、病のために死の手にさらわれてしまいました。

この魏の征伐のとき、魏の大將の司馬懿は、大軍をもちながら、孔明の智謀に恐れをいだいて、男らしく思い切つて戦おうとする勇氣もない。そこで孔明は、或るとき女のかぶる頭巾を贈つて、「どうです、お似合になりますか」と、ひやかしたこともあります。孔明が死んだと聞いたから大よろこび、すぐさま進軍を命じました。ところが蜀の方では、その死んだ孔明を、さも生きてるようによそおわせて、戦車に載せて向わせました。さては一ぱいくわされたかと、魏の兵は恐れあわてて、逃げたとか

いう滑稽な話もあります。蜀は孔明によってその國がもって居たようなものですか、その支え柱ささえはしらがなくなると心細くなりました。そののち魏は二六三年にとうとう蜀を滅してしまいました。そこで三國の争は變じて魏と吳との攻争となりました。

ところがその魏では、こういう戦争に功のあった司馬氏一家が權力をふるい、司馬しは炎えんはついに皇帝の位を奪って自ら天子となり、國を晋しんと號しました。この人は晋の武帝です。そこで今度は晋と吳との對立となりましたが、晋は吳の國の衰えたのに乗じて、二八〇年、兵を南に下してこれを滅し、八十餘年の紛亂はんらんをしずめて、再び統一の政治をすることになりました。

竹林の七賢

晋の武帝は、一族をそれぞれ大名にして、皇室に萬一の事のあつた時には、その守りが出来るように厚く待遇したり、天下の統一を遂げた上はまず安心と、兵備もゆる

めました。がそれはかえって諸大名を我がままにさせることとなり、武帝の死後には天子はあつてもないと同様で、八人の大名が代る代る出て来て、政權の争奪をし、國内は大騒ぎになりました。こんな内亂や兵備のゆるみは、國を危くするものであつたことはいふまでもなく、おまけに外民族は得たり賢しと侵入して來ました。

そんな風に政治上軍事上から、國がみだれたり、よわつたりする原因があつたところに、思想の上には清談せいだんというわるい流行がありました。これは國の爲めだの、社會のためだのと、まじめになつて努力どりよくすることを卑いやしみ、それよりは酒を飲み詩を作り音楽でもして、心のどかに日日をおくることを、大へん高尚なこととして尊んだ風習なのです。こういう風習は三國の頃から起りはじめて來ましたが、晋になつては上下の流行病となり、大臣でも政をとることなどをよそに、いろいろと遊んで、耻はづかしなものもあるようになりました。

この清談の仲間の中で、最も有名なのが七人ありまして、世に竹林ちくりんの七賢しちけんといつ

て居ります。みんな酒が好きで、中には三斗で始めて酔うというものもありました。外に出るときには、いつも僕に酒瓶をかつがせ「乃公が死んだら、これに付けてくれ」といつて居たものもあります。また中には世の中の事務にまじめにとめ、禮儀だの道徳だのを説く者を罵つて、「世のいわゆる君子は、まるでヅボン下に居る虱のようなものだ。虱は逃げるにも歩くにも、その縫目が尺度で、それでその行動進退は道にかなつてるといつたような様子だが、それは君子がけちくさい行動をして、それで道徳的だとうぬぼれて居るようなものだ。しかし一たび思わざる事件にでもあおうものなら、あわててしまつて何事もできない」などといつたものも居ります。

もともと漢民族には、孔子のように國家中心の政治を主張する者もあれば、一方にはそういうものを馬鹿にしてかかる考え方も、古くからありました。堯の時代に居た許由という人は、堯から天下をゆずろうかといわれたとき、耳の汚れだといつて川の水で耳を洗つたといつてお話も傳えられて居ります。これは老子・莊子の思想や、この

清談などを喜ぶ人人に、共通な心持ちだったのです。

さてこのほにか晋の厄介物であつたのは匈奴です。匈奴は後漢の時に、全くその勢を失いましたが、降参したものは長城の南に移り、漢の姓の劉を称することを許されて、山西省の北部に住んで居りました。晋の時その酋長に劉淵といつて者が出ると、晋の内亂や兵備の薄くなつたのにつけてこんで、その勢力を張り、ついでその子の聰は兵を出して、三一七年晋を滅しました。

北方の嵐

晋が亡びましたときに、その一族は南の建康今の南京で皇帝を稱し、その後をつづけることになりました。歴史の上では前の時代を西晋、これから東晋といひます。これはその首府の方角からつけたものです。これで漢民族の政治の中心が、揚子江の南にうつり、棄てられた北方の黄河の流域は、主なき土地となつて、北や西からの外民族のために開放されました。

た。かねがね中原の地に、よりよき土地を求め、より高き生活を試みたいとねらって居た外民族どもは、我れがちにとこの空地あきちに襲い來ったのであります。

そういう外民族を總稱して、五胡ごこといって居ます。胡こというはもとは匈奴こつのことをいいた語ことばですが、後には一般的に西方北方の外民族を指す意味になりました。五胡ごこは匈奴・羯けつ 匈奴の同種・鮮卑せんび 東胡民族の一派・氏てい・羌きやう 二つともチベット族で、これらのものが百五十年餘りの間に、前後十六ばかりの國を建て、まことにめまぐるしい戦争の繪卷を、くりひろげて行つたのでした。

こうした北方の騒動は、前秦ぜんしんの國を建てた氏種しんの苻堅ふけんという王によって、一まず鎮められました。この苻堅をたすけて政をしたのは、王猛おうもうという賢臣でしたが、初めて王に見えた時には、ぼろをさげ虱をつぶしながら天下の問題を論じたということです。王猛は苻堅が南の東晋を討とうとする野心のあるのを知って、それは危険だと、いつも諫めて居ましたが、王猛が死にますと、王は勢に驅られて南征の大軍を發しまし

た。八十萬と號する軍は、東晋を一もみにもみつぶすべく、くり出されましたが、涇水けいすいという所の戦で、必死を極めた東晋の軍に、もろくも敗られてしまい、王は命ながら都ちやうあんの長安に逃げ歸りました。そこでまた多くの國が競い立ち、前秦はやがて滅ぼされて、北方にはまたまた大嵐が起りました。

東晋は南下の大軍を撃退して、一いさつきましたが、その安心が禍となって、内亂がつづいて起りました。さきに桓温かんんという大將の如きは、「男子と生れたからには、美名を百世の後にのこすことが出来なければ、いっそのこと醜名しゆうめいでもいいから傳えてやろう」といって、むぼんむぼんを企てました。それは成功しませんでしたが、こんな父をもちましたその子の玄げんは、とうとう國にそむいて自ら皇帝を稱し大亂をおこしました。こういう亂を平げて功のあつた劉裕りゆういという將軍は、ついに東晋を滅して、宋そうという國を建てました。これは四二〇年のことで、日本では第十九代の允恭天皇の御世。

この北に興亡した國國の王の中には、學問を保護したり、佛教を信じた人も多く、

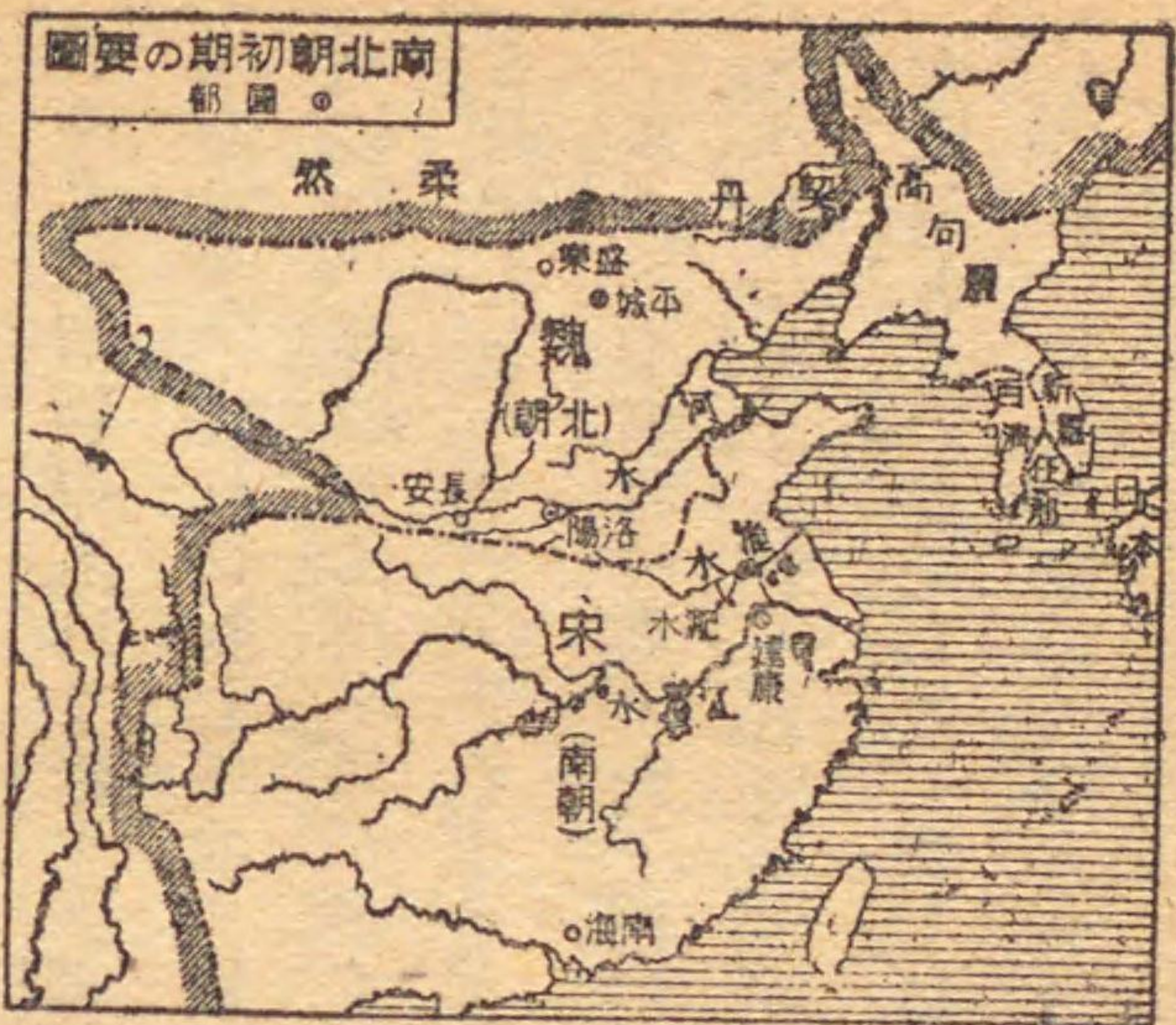
寺塔を建てたり名僧を西域から招いて布教させたりしました。中でもインドから来た佛圖澄という僧は、不思議な術をもって居て、幾日も幾日も、食をとらないでも居られるし、目に見えぬ鬼神を使って、不思議を現わしたりしたということです。そういう風に、佛教が盛になりますと、インドに入って巡禮をしたいと願うシナの僧侶も出ました。法顯という人の如きはそれで、長安から西に向って、インドに入り、十数年の後、セイロン島から、南洋を通って歸朝しました。その旅行の苦しみはいまでもありませんが、信仰の熱情はそういう冒険をもやらせたのであります。

索虜と島夷

北の方では涇水の戦後の騒亂が、四三九年、鮮卑民族の建てた後魏という國によって平定され、そこで南の宋と、この後魏との対立が起りました。また南ではそのうち宋を滅して南齊、南齊を滅して梁、梁を滅して陳と三國が相ついで興亡し、北では

後魏が東西に分れ、それから北齊・北周が興り、隋がこれに代り、その隋がまた南北を統一することになります。その間が約百五十年でした。この分立の時代を南北朝時代といいます。北方民族は、今の女の子のおさげの様に、髪を編んで後に垂らしているもので、南朝の人はこれを索虜と悪口をいいました。索を下げてる野蠻人ということなのです。これに對して北方民族も、南方の漢民族を野蠻人扱いにして、島夷と呼びました。南の方は川や湖が多く、その地は島みたいだということから、島に住んでる野蠻人といったのです。

さてこの南北に興った王朝の間には、戦争もありましたし、北朝ではその上、新に北の蒙古地方に勢力を振って来た柔然とか、ついでには突厥とかいう北方民族とも、戦をしたり和を結んだり、面倒がありました。北周の外戚の楊堅というものが、北周を滅して隋という國を建て、やがて南朝の陳をも滅して、五八九年統一を遂げました。楊堅は隋の文帝であります。



して、例えば馬に乗ることなどはこの時分から盛になりました。今までは室の中では座ぶとんみたいな敷物をしいて、床ゆかに坐る習慣でありましたものが、次第に椅子を用いて腰をかけるようになって来ました。これも外民族の感化だといわれて居ります。

それから南北どちらも、この時代は佛教が盛で、ひろく行われました。皆さんのよく知っているあの達磨は、この南朝の梁リョウのときに、インドから海を渡って来て、禪宗ぜんしゆうを傳えた名僧なのです。その影響のことは後でまたいしましょう。それから道教という宗教が興って来ました。この教はシナに大昔からあった山川などを崇拜する教や、その他いろいろの迷信、まじないや仙人の術などをよせ集めて、それを前にいいました老子の教にひきつけて、後漢の末にできたものです。その後だんだん佛教の形式などもとり入れましたが、北朝の魏ぎの初めた寇謙之こうけんしという人が出て、立派な宗教とし、一時はまるで國教のような勢力を得ました。この教は、修養によって欲心を去りわきわい災を避けて、不老不死に至るのを理想とするものです。實際に於いて、今日まで漢民族の信仰や、道德の本もとともなっているものです。シナの人のほんとうの心持を調べるにはこの教をよく研究しなければなりません。

こういう風に宗教は盛でありましたが、人情は極めてあらく、北朝でも南朝でも、

皇帝達が不幸な最期を遂げた者の多かつたことは、いかなる亂世にもまさつて居ます。北朝では二十六人の中十五人も殺され、南朝では二十四人の中十一人が、同様の運命にあつて居ます。

筆の力と信仰の熱

晋の時代から南北朝にかけては、シナは藝術の上に、いろいろなすぐれた人を生み出しました。詩人としては東晋の陶淵明とうえんめいという人が最も有名です。ごくやさしい言葉の中に、豊かな情味のある氣分をあらわしました。殊に役人などをして上役のものからくだらぬことをいわれるのを不快に思つて、そんなものはさらりとすてて故郷に歸り、自然を友として樂んだ文章や詩などは、よく日本人にも愛誦されて居ます。

それから繪画もまたこの時期の間に非常に進歩したといわれて居ます。その天才の一人は東晋の顧愷之こがいしという人で、その作品というのが（實際は模写ですが）ロンドン

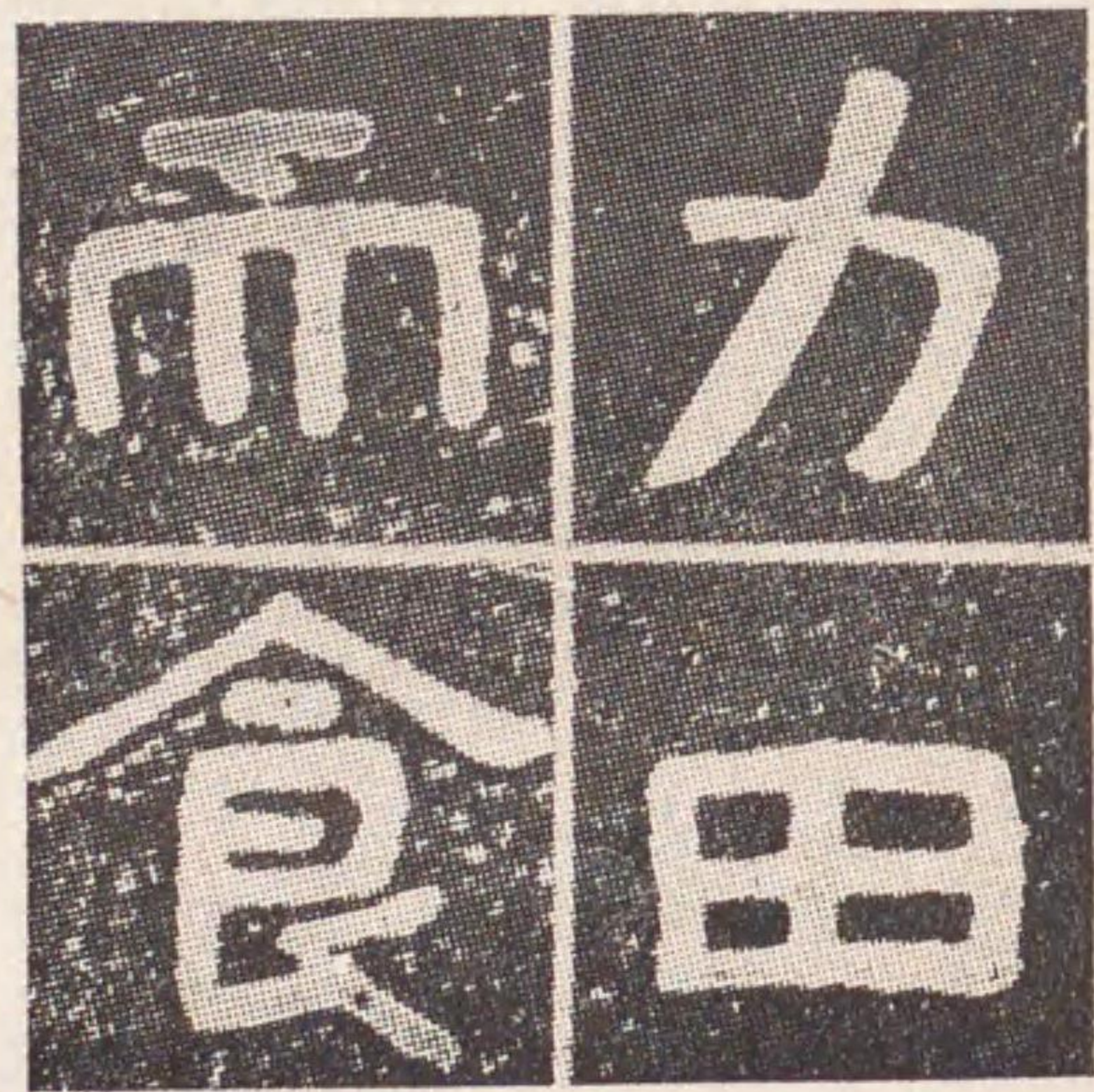
の博物館の寶物となつて居ます。それは婦人の誠いましめをかいた卷物で、風俗畫としても大へんに面白いものであります。またその形のうつし方を見れば、写生的な點もうかがわれますし、筆づかいを見ればなかなか達者であつたこともおもわれます。また當時は一方には、畫のかき方などについての、理論をいうことも盛になつて、後世の東洋の畫の標準となる筆法や、表現法のことも定められました。

この繪畫と並んで、書道というものが、一つの立流な美術とされますが、これも東晋のときに王羲之おうぎしという天才が現われて、後世に大きい影響を與えました。あとでいう唐の太宗は、この人の書いた蘭亭記らんていきというのを、やつと手に入れて非常に喜ばれ、そのときの有名な書家に之れをうつさせ、ほんものはこの世に残しておくのが惜しくて、自分の死ぬるとき、陵みかさの中に葬はうむらせたということです。それほどですから、その肉筆の書などは有りませんが、その眞筆しんぴつを想像することの出来るものが、幸に我が國にも傳えられて居ます。この時分の書で、筆で書かれたものは、少ししかありません

が、石にほりつけたものは方方に残されて居ます。シナでは皇帝や賢臣の功績、佛教の經文や、儒學の經書の句などを、石に刻して後に残すことが、古くから行われて居ました。そういうものの中で、文字も立派であり、大仕掛のものが、この時代につくられました。その一つは、シナで一番神聖な山とされている、山東省の泰山にありま
す。それは河床のようになってる谷間の石に、金剛經というお經の言葉を、一字の
大きさは五〇センチメートル四方位で、二千餘字もほりつけたものです。こういう大
きい仕事をしたが、それは誰がやったのか、名前も残して居りません。そのほか崖に
なった岩などに、彫りつけたものも、各地に見出されます。こういう石刻の文字は形
の上には多少の違いがあり、又うまいまいもありませんが、大體に於いて、筆力はつ
よく、やたらに手先の細工をしないで、ほんとうにすなおな心持ちそのまゝを出して
いることで、書を習う人には、非常な参考となつて居ます。よく六朝風の書體などと
いいますのは、これをひっくるめて呼ぶ名なのであります。六朝とは三國の吳と東晉



山東省泰山經石峪の金剛經刻字



同刻字の拓本



「東晉」の王羲之の書



(東晉) 雷悦之の女史箴圖卷(一部)

と南朝の宋・齊・梁・陳の六王朝の事で、何れも今の南京を首府にして居たものを總稱して言うのです。然し書とか彫刻とかの上で、六朝風という場合には、それをばなれて、北朝の魏のものなどを主として申します。

前にもいったように、佛教が盛であつたため、寺を建て塔を造り、佛像の彫刻をすることなども、この時は非常に發達しました。中にも今日まで残つて居て、當時の人の篤い信仰心と、すぐれた技術を示してくれるものは彫刻です。彫刻は後魏の時代のもの最も沢山のこつてゐます。山西省の雲崗・河南省の龍門・甘肅省の敦煌などという所にある石窟に、その代表的のものが見られます。雲崗のは自然の岩山の中腹に、東西一キロメートル近くにわたつて、大小いろいろの窟があります。そこに大きいのは一五メートル、またはそれ以上と思われる石佛をくり出してあるし、壁には何百何千という、数え切れない程の佛體をほりつけてあります。その窟というのは、つまり一つの佛殿なのであります。この沢山の佛像のつくり人は、何人あつたか分りま

せん。またその時代もざつと五十年ばかりにわたる間ですから、技術にはちがいもありませんが、その仕事はすべて強い信仰心から來たのです。その最も大きいのは五つありまして、それは後魏の皇帝が、祖先の後世を弔うために、造らせたものと傳えられて居ます。なほこういう石窟には佛をつくつたわけを彫りつけた銘がのこされてゐますが、龍門の石窟には特に澤山あり、またその文字が美術的に大きい價值のあるので有名です。こうした石の窟をつくることは、もとインドに起つたのを、シナでもまねたのであります。従つてインドの美術のかたが、そこにも現われていることがみとめられます。こういう後魏時代の佛彫刻の様式は、朝鮮に傳わり、それから日本にも入つて來ました。推古天皇時代の日本の佛彫刻は、こういう系統様式がもとになつたのであります。有名な法隆寺の釋迦像や藥師像などはその例です。書にしても彫刻にしても、この時代の美術は、その當時の天才のすぐれた腕まえと、強い信仰のつつしみ深かつた心もちとで、でき上つています。そこには美しい優

しい、或は強い氣持ちが、ただよつて居ます。こうゆうものはただ骨董いぢりとゆうだけの老人や、物ずきの人人のおもちやにのみまかせるのは、餘りにもつたいないものであります。

八、太陽の輝き

—隋と唐との時代—

大運河

南北朝の争いを隋が一つにまとめたことは、さきに申しましたが、その始めの文帝の次に、煬帝ようたいという天子が立ちました。この人はぜいたくなことが大好きで、立派な宮殿を建て、大きな庭園をつくる。さうして珍らしい草や木や庭石から鳥獸なども、國中からとよよせる。費用ひようおかまいなしの勝手放題をしました。離宮りきゆうの数は四十一つとか申します。そういう離宮を遊びまわるのに、馬車で行くのも面白くないと、船で行くことを考え、黄河から揚子江の水をつずけるために、永濟渠えいさいきよ・通濟渠つうさいきよ・刊溝かんこう江南河等の運河うんがを開かせ、龍船りゆうせんという美しく飾った船などを備えて、首府の長安から南

の江都こう揚州揚州の離宮などを往復しました。この運河は然しそういう遊びのためばかりであったとも、斷言は出来かねるので、これで南方から穀物などを、北に運ぶ上には、大へんな便利を得ることになりました。今の大運河という南北シナをつなぐ大切な水路すいろうは、だいたいこのときのもの、後に修理したのであるということですが。

煬帝は一方には政治の上にも注意して、法律などを改めもしましたし、外國の征伐には國威を輝かすことを忘れませんでした。自分ではかの秦の始皇帝や、漢の武帝と肩をならべる氣で居たのです。北方では南北朝の終りごろから、勢力を得て来て、北シナをおびやかした突厥種とつげつしゆコ種コ種という北方民族を征服して、その侵入をとどめました。北方巡幸のさいに、その酋長しゆうちやうが来て、皇帝の萬歲ばんさいを祝したときには、漢の天子もこうはいかなかつたらうと、大得意で詩を作っています。さらに南方では今のフランス領インドシナ半島の國國を征服するし、海を渡っては臺灣その頃には流求(りゆう)を攻めを攻めて、その土人を捕虜にしました。また西の方の國國とは、貿易關係で交通を開くとい

うように、その威光を四方にはりました。そうして都では、そういう外國から使者が来ると、いろいろ演藝などを見せて豊かな生活の有様を示し、町ではどの料理店ででも、勝手に飲食させて代をとらせない。國が富んでいるからこうするのだと虚勢でどろかしたということです。

● 日没する處の天子

この煬帝のときは、我が推古天皇の御代に當ります。攝政の聖德太子は、小野妹子をこの皇帝の處へお遣わしになって、國と國とのおつきあいはじめられました。それは推古天皇の十五年（六〇七年）のことです。そのとき太子がお書きになった國書が、「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す、恙なきや」という句で、始められて居たのを見て、煬帝は何分とも前申すような皇帝でしたから、非常に不愉快な顔つきをして、「野蠻人は禮儀を知らないからいかん」と、ぶんぶんされたそう



山西省雲崗の石佛（北魏時代）

これは雲崗石窟初期の五窟の二に當るもので最も大きい石佛。今は露佛となっている。



(唐) 閻立本筆隋煬帝像

す。それでも翌年には我が國への答禮とうらいの使者を出しました。これが我が國とシナとの公こうの交際の始めでした。

我が日本の事は前漢の頃に倭わという名で、始めて中國の書物に見えますが、後漢のときには九州地方の酋長が使を出したこともあります。三國の魏の時代になると彼我わがの使者のゆきさきも始まり、それから南北朝時代には、倭王の使者が南朝の王廷に遣わされたことが、南朝の史書に見えています。そういう後にこの隋への遣使となるのであります。この事は兩國の記録に、はっきり記されているのであります。「日没する處の天子……」という記事などは、隋の國の書物に出ています。それはよほど驚いたことだったのでしょう。

煬帝は更に東の朝鮮半島の高句麗こくわの征伐を企てました。そこで少し朝鮮半島の事を申して置きましょう。前に書いたように、前漢の武帝は、半島北部をその領土としました。後漢の始め頃に遼東りょうとうにツングス種の高句麗こくわ國が興って、半島北部に侵略の手を

伸ばし、晋の末頃には遼東から半島北部は、高句麗の領土となります。そうい
う間に南の韓族の國國も變化して、辰韓諸國は新羅となり、馬韓諸國は百濟となり、
北の高句麗に對して、いわゆる三國（我が國史ではこの三國を、高麗・新羅・百濟と
呼び、三韓といひます）の對立の形が現われました。弁韓は任那となって、最も早く
我が國の朝貢國となりました。さて三國の中では、高句麗が最も強く、他の二國はこ
れに壓迫されがちでした。そのため三國間の懸引きや戦争、また中原の王朝への朝貢
とか、我が國への朝貢など、それはなかなか微妙複雑な事情がありました。こういう
歴史事實は、從つて半島の民族の性質の上にも、いろいろな影響を與えることとなつ
たのであります。

さて煬帝のこの高句麗征伐は、大皇帝の武威を輝かそうとする野心もありましたが、
前に父の文帝が企てて失敗したので、その報復という意味もあつて、「今度こそは！」
という意氣込で、百萬の大軍をくり出し、帝自ら指揮の任に當つたが、大敗して逃げ

歸る。直に再征の令を下して、軍人も兵糧をも徵發して、東へ遣わしました。こうい
う戦争には兵士のほか、その倍も人夫が徵發されましたが、そういう人夫は疲れに疲
れて、道ばたにばたばたおれて死ぬというむごい有様でした。

こうしたこともその軍隊が勝利を得られたら、或はいくらかよかつたかも知れませ
んが、引きつづく敗軍は、この皇帝の威嚴を損し帝權の強さを疑わせました。そこで
今まで煬帝を強い権力者として、何をされても我慢していた人民は、もうそのおもし
をはねのけることが出來ると、思ひましたからたまりません。各地にむほん人が出
て、皇帝の地位を奪おうと争いました。そういう騒ぎもよそに、煬帝は最も氣に入つ
た江都の離宮に、酒盛をして居ましたが、とうとう臣下の手に殺されました。殺され
るまで、盃を口から離さなかつたと傳えられて居ります。

隋の滅びる頃に

江の南で楊が散れば

日没する處の天子

河北ぢや李が花ざかり

という流行唄がはりました。江とは揚子江、河とは黄河をいうのです。隋は楊という姓であつたので、それが倒されて、北の方で李というものが興つて來るといふなぞでした。煬帝は李を目の敵にしましたが效なく、李を姓とした群雄の一人の李淵は、六一八年、ついに隋に代つて皇帝となりました。これが唐の高祖で、隋と同じく長安を首府とさだめました。

民は國の本

唐の時代はシナの歴史の四千年の間に、一番はなばなしい時代であり、我が日本にはとりわけいろいろな關係があつた時であります。この國は第二代の太宗という天子のときに、すっかり其の土臺が出來ました。

太宗の御世はまことに平和で、シナ式の形容では「道におちた物があつても、拾

て持つて行くものもなく、夜は戸締りをしないでも盗人は入らず、旅の商人などが野宿しても危いことがなかつた」といつて居ります。これは太宗が常に「天子は國あつての天子、その國も民あつての國である。民こそは國の大本だ」と、民をよくいたわる政治をしたためであるといわれています。そのいい政治のためには、いい制度が必要です。唐の初にはいろいろの役所にも、新しいきめをつくるし、學校のことも法律のことも、それぞれよりよく整えられました。國民の生活を安らかにするためには、均田の法を行つて、田地を人民に平等に使用させることも謀りました（皆さんのよく御存知の、我が「大化の改新」の班田收授の法の如きは、この均田法に關係があります）。こういう善政には房玄齡・杜如晦・魏徵などという名臣が、よく天子を輔佐いたしました。この名天子の立派な言行を書き記した貞觀政要貞觀というの
は太宗の年号という本は、後に我が國にも傳えられ、政治家のいい教科書となつたといふことです。その次の高宗は父ほどのえらい人物ではありませんでしたが、それでもよく前代の盛な國運

をうけつぎ、多くの賢臣の力によって、國內を治めると共に、外國をも征伐し、領土などは更に拡大することが出来ました。

隋のところで、ちよつと話した突厥は、この太宗・高宗二代の間に、遠く西方に撃退されて、北は蒙古、西は中央アジアの地まで、みな唐の支配を受けることとなりました。チベットの民族も好を修めれば、インドとも交通する、滿洲の地方からも貢をたてまつる。南は今のフランス領インドシナ半島からも使が来る。西は中央アジアを越えて、ペルシャをも一時その保護の下に置きました。それから東では、さきに太宗が高句麗に兵を出して、失敗したので、高宗は攻め易い百濟に、まず兵を加えてこれを滅し、(六六三年)、ついで高句麗を攻めて六六八年これをも滅し、半島の大半を支配することになりました。

こういう勢力の發展は、シナの歴史に今まで見られなかった事であります。そうしてこの四方からの使者は、正月には必ず唐の朝廷に、よろこびを申入れる。皇帝はこ

うしてその玉座の下に跪く、世界のはてはてからの使節の上に、威儀いかめしき多くの臣下を従えて、その尊嚴を示したのです。そういう國國からの、數えつくされなゝささげ物には、いかばかりその當時の人人は、よろこびもし、おどろきもしたことでしよう。

老女の即位

月でいえば満月にも似た、この唐の世にも、暗い雲のかかるのを、防ぐわけには行きませんでした。というのはこの高宗はとかく病氣がちで、政を親しくとることがむづかしかつたので、皇后の武氏という人が、夫に代って大臣たちの意見もきけば命令もしました。それで人民は天后と申して、天子と同じく敬ってその命をささました。

この皇后は非常な美人で、始めは太宗の宮中に仕えて居りましたが、後にとうとう高宗の皇后になったのです。智慧もあり學問もあり、政治家としても立派な腕まえをも

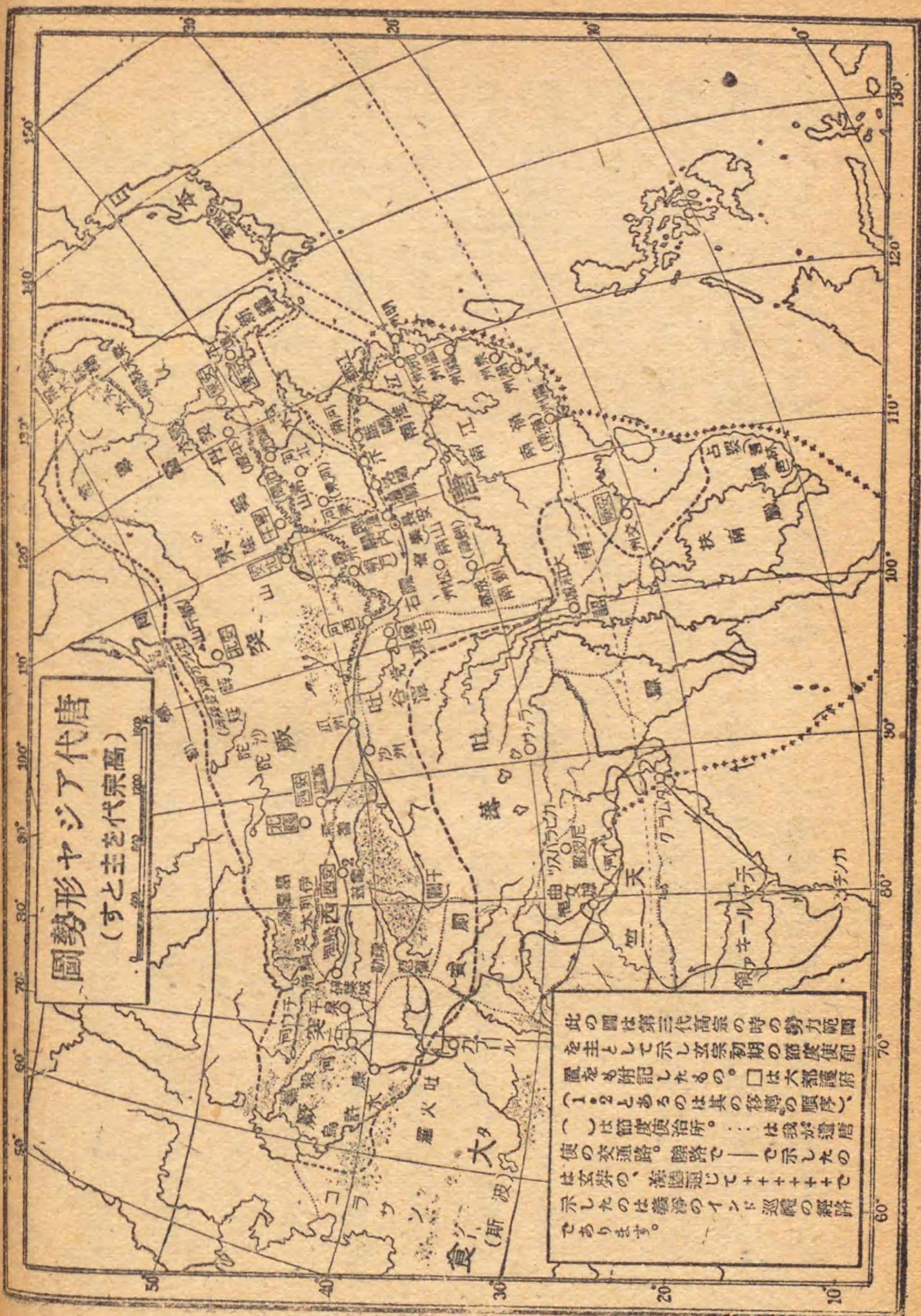
つて居ました。シナは婦人がいじめられる國のように、誰しも思いがちですが、実際はなかなか婦人の勢力は強くもあり、又なかなかえらい婦人が、歴史の上にあられれて来て、男子と腕くらべをしても、ひけをとらないのがあります。漢のときの呂氏や、殊にこの武氏のようなのは、その中でも第一の位置を占める人です。

さて六八四年、高宗がなくなると、武氏は皇子の中宗・睿宗を、つづけて皇帝に立て、すぐまたそれをやめて、自ら皇帝の位を奪い、國の名を周と改めました。このとき、武氏の年は六十七でした。則天武后というのがこの人です。こんなお婆さんが大きな唐の支配者になったのですから、驚くではありませんか。それもあたり前に帝位についたのなら、まだしもですが、いわば皇帝の位を奪ったのですから、これに不平な唐の皇族や、その臣下のあったのは、當然のことです。そういう連中は片っぱしから除いて、自分の身の安全を謀りましたが、また一方でははたらきのある人物は、重く用いて政をとらせました。それでたいした騒ぎもなく、その大國を治めること

と十五年。八十二のとき、老病にかかって弱つたので、大臣達は相談して、ついに兵力を以て武后に迫り、中宗を再び位につけることとしました。そこで唐の皇室は回復いたしました。

ところがこの中宗の皇后に、韋氏という人がありました。中宗が位をやめられて、諸處を歩いていた間は、よく夫を慰め忠實に世話をした人でした。この韋氏は武氏ほどの才もはたらきもないくせに、その眞似をして權力をふるおうと考え、ついにその夫であり、天子である中宗を弑してしまいました。これを見て、前にやめられた睿宗の子の隆基は、兵を率いてこれを誅し、父を再び位につけ、やがてそのゆずりを受けて天子となりました。これが有名な玄宗です。

前に申したように、高宗の時代の領土は、めざましい発展を遂げましたが、その晩年頃からこういう騒動の間にかけて、國境の防禦がおろそかになったため、外民族がまた勢をもちかえして、唐の國境線は後退しました。別図で都護府をつなぐ線と、次



にいう玄宗の初めの、十節度使の位置とを比べて見ますと、すぐにお分りになるでしょう。殊に朝鮮半島では、ただ一つ残った新羅の國は、唐に朝貢しながら、一面には半島に於ける唐の領土を侵して、遂に半島の大部分をその領土に入れました。これを歴史上、新羅の半島統一と申しています。新羅はこれからその文化の上にも、一大發達を見ることがとなります。その國都慶州が、千古の後に、その藝術的な遺物遺品を誇ることの出来るのも、こうした國力の發展と、唐のすぐれた文化の輸入模倣の結果なのであります。

美人と惡將軍

こういう騒ぎのあとを受けたので、玄宗は民を安らかに治めることに心がけ、宮中のぜいたく品などは焼きすてるし、皇后以下の婦人達にも質素なくらし方をさせる、又よく臣下の諫をさき入れて、いい政をするようにつとめました。韓休という人は餘

美人と惡將軍

りひどい諫め方をするので、そのために玄宗はよわって、顔色もすぐれなくなったのを見て、他の家來が「あの男はおそばからお遠ざけになった方がよろしいでしょう」と申しましたら、「いやいや朕は瘦せたかも知れないが民は肥えた。あれの諫めがあればこそ政も行きとどくのだ」といわれたということです。

こんな工合に政に励み、前の騒動の間の、國の衰えを回復するにつとめました。なお高宗の末から國境の防ぎも、おろそかになり外民族の侵入も始まりました。邊境の大切な場所十箇所には、節度使という將軍を置いて、國境の守りを嚴重にしました。その一方にこの時代は、文學にも美術の上にも、多くの天才が出まして、唐の文明の光ともなりました。

玄宗は長い間のその政に、次第に心のゆるみが出て來ました。もともとはで好きの人でしたから、いろいろと奢りの氣持もはびこって來ました。殊に楊貴妃という美人を大そう愛されてからは、歌に舞踊に、宴會は晝から夜に、夜から晝につづくという

有様。この楊貴妃は南方に出來る荔枝（龍眼肉に似て居る果物です）が大へん好きだったので、それはそれは大騒で、幾千里の遠くから、長安の宮中にとどけさせる。今とちがって交通不便のとき、また廣い唐のことですから、南のはてから北の奥の長安へと、それを運ぶのは、筆には示されない困難があります。それが人民の迷惑になったこともいまでもありません。一事が萬事でそのせい、たくは推測されましよう。

こういうときに玄宗の信任を得たものに、安祿山という將軍が居ます。これは滿洲の生れで、大そう武男の譽のあったものですが、うまく楊貴妃にとり入り、とうとう三つの節度使を己れ一人に兼ねるようになりました。この將軍は大兵肥滿で便便たる腹をして居たので、あるとき皇帝が戯れに「お前のその腹の中には、何があるんだ」ときかれたところ「ただただ陛下に報い奉る赤心のみでございます」と答えました。がそれは赤い清い心どころか、眞黒黒の悪心だったので。そこで間もなく唐の天下を奪う準備をして、然もずうずうしくも、「臣の故郷に名馬を産しますから、馬二千

匹と、その轡くつわとを執る者おのおの二人をつけて都にさしあげましょう」と、謀叛ひはんの前ぶれをしました。皇帝がこれを悟ったときは、もはや北からの軍鼓ぐんこの轟き馬蹄ばていの響は、近く都の人人を驚かしたのでした。それは七五五年、日本では孝謙天皇の御代のことです。

洛陽らくやうは忽ち賊の手に奪われ、長安も危くなりました。玄宗は「二十四郡一人の義士もなきか」と嘆かれて、位を肅宗しゆくそうにゆずり、共に蜀しよくの四今の四川省へにげられる。道で家來出來こころませんといいましたので、帝はつらい情を忍んで貴妃を殺させました。その悲しみの場に、南方から貴妃の好きだった荔枝が届きましたが、その人はもう息がたれてしまったと悲話も伝えられています。こういう悲にたえて、玄宗は軍隊の心をなだめ、回復を謀りましたが、賊軍の勢は強く、官軍はどこもかしくも敗北ばかり。ただ僅かんしんけいに顔真卿も書道の名人でもありました、その他の人人が、奮闘して回復につくし、忠義の名をあげま

した。そのうち賊軍の方では、仲間喧嘩も起り、官軍は回紇かいこつ種トルの援軍を得て、勢をもり返し、八年の後にやっと、この亂を平げました。これは肅宗しゆくそうの次の代宗のときでした。

これで一まず大亂は治まりましたようなものの、田地を荒らされ、人民はちりぢりばらばらになり、さしも榮えた唐の世も、これからは衰え始めました。

太陽の輝き

唐の時代は前に申したように、漢民族の黄金時代で、すぐれた藝術家も現われれば、えらい宗教家も、賢い政治家も智勇ある將軍も出ました。唐はその當時の世界で、最も大きい領土と、最も高い文明とをもったもので、ほんとうに太陽のように、全世界に輝いたものといえます。

宗教では佛教が最も盛で、インドからは殊に徳の高い名僧達が來ました。後に我が

空海や最澄が留學して、日本に傳えた眞言宗や天台宗は、唐に榮えた立派な宗派でした。インドへ巡禮した唐の名僧には、太宗の時の玄奘、高宗の時に義淨があります。苦しい長い間の旅をして、多くの經文をもち歸り、これを漢文に譯しました。今、日本で讀まれるお經には、この玄奘の譯したものが、少くないということです。その旅行記玄奘のは大唐西域記、義淨のは南海寄歸傳といひますは、その頃の西方南方の歴史や地理を、研究する學者には、今も大切な參考になつて居ます。

道教も佛教に劣らず盛で、その本尊の老子は、唐と同じ李姓であつて、唐の先祖だといふことから、一時は國教のよになつたこともありすし、「老子道德經」を役人を採用する試験の科目に加えたこともありすし。

又キリスト教の一派（唐では景教といひました）も、ムハメツド教（シナでは回教）も、古いペルシャの宗教のゾロアストル教（唐では祇教）といふのも傳えられました。このゾロアストル教は火を拜むので、拜火教ともいわれます。この教では光明

（善）の神と暗黒（惡）の神とがあつて、その争でこの世の中のいろいろな事が起る人は光明の神を援けて、暗黒の神を滅してしまふものだと言ひます。光明の神をアラ・マツダ（Ahura Mazda）といひます。皆さんの家の電燈の球にマツダ・ランプ（Mazda Lamp）といふのがありましよう。それはアメリカであの電球を發明したときは、暗かつた今までの炭素球に比べて、まことに光明のようだといふので、この神様の名をとつてつけたのです。

佛教の盛になつたために、美術の上に重要な發達がありました。寺や塔が各地に建てられ、立派な佛像佛畫はこれを飾りました。西域からすぐれた畫家も來て、新しい畫風を傳へましたが、それはインドの壁畫の影響のつよかつたことが察せられます。

（皆さんが御存知の我が法隆寺の壁畫は、世界の寶ともいふべき貴いものですが、あれは恐らくこの唐の畫風に感化をうけた天才が、筆をふるつたものなのでしょう。人物風俗畫には閻立本や張萱、佛畫は吳道子や李眞、山水畫は李思訓や王維が、天才の

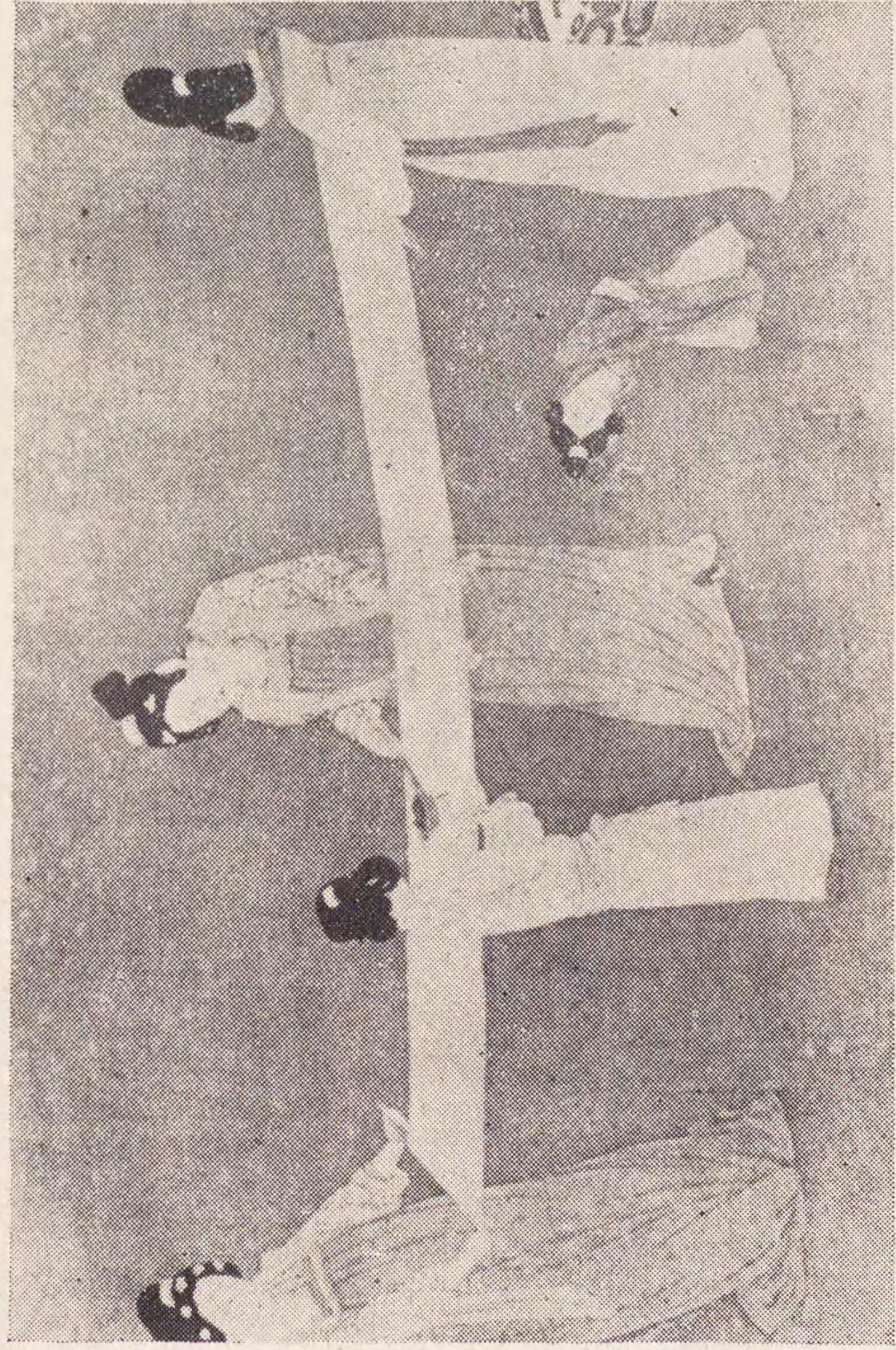
名を伝えられて居ります。

風景画は東洋ことにシナで最も早く、また最もよく発達したもので、西洋などはずっとおかれて居ます。それは漢民族には天然を愛する心もちが古くからあり、また深かったためでしょう。殊に墨の濃い淡い度合によって、自然界の氣分を巧にあらわすことなどは、最もすぐれた點であります。そういうことはこの唐の時から初まったともいえるのであります。そうして後には今いった李思訓の畫風を北宗畫といい、王維のを南宗畫といい、風景畫の二大系統とします。李思訓の畫は強い線で精密に、山でも木でもの輪廓をつくり、これに極彩色をしたものだという事です。王維のはそれと違って、墨のぼかしを主としたものという事であります。彫刻では佛像の如きは、今までよりも、更に美しく更に愛にみちた、ほんとうによく佛教の理想を、現わすものも作られました。それは河南省の龍門とか山西省の天龍山とか甘肅省の敦煌とかの、石窟にも残されて居ます。



山西省天龍山石窟の菩薩像 (唐初期)

河南省龍門の大佛 (唐の初期)



唐代婦女圖
これは唐の風俗畫家張萱の宋の徽宗が模寫したたもの
のと傳えてゐる圖卷の婦人の風俗を見るに
興味あるものである。

書道には前にいった忠臣の顔真卿がんしんけいも有名ですが、初には歐陽詢おうようじゆんや柳公權りゅうこうけんなどの上手も居ました。こういう人人の字は、我が國で今でもよく習字の手本にされます。これらの書家は千二百年も昔の人人ですが、私どもに決して縁えんもゆかりもないものはないのであります。藝術の天才という者の生命は驚くべきものであります。

文學では詩人には李白りへく・杜甫とほが第一で、王維わいや白居易はくきよも詩の才がすぐれ、韓退之かんたいしはその文章によって鰐わいの害がいを去つたとまでいわれる文章の大家でした。

漆物や織物でもその他の工藝でも、非常な進歩がありました。

さて我が日本はこの唐と永く交際をして、遣唐使けんとうし・留學生りゅうがくせいをやりましたが、そういふ人の中には、吉備真備きびのみまきび・阿倍仲麻呂あべのなかまろのような學識文才にすぐれ、唐を驚かした人も少くありませんでした。真備は在留二十餘年、經けい・史し・制度せいどなどの研究をし、歸國の後には政治の上に大功を立てました。また詩文の才を謳うたわれた仲麻呂は、玄宗に信任があつく、李白・杜甫・王維などとも交りがあった人。歸朝の途で難船して再び唐に

戻り、高官に任用されてついにそこで終りました。古今集におさめられてる「天の原
ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」という歌は、故國を偲ぶ情を、月
に寄せたものと伝えられて居ます。それから最澄（傳教大師）や空海（弘法大師）の
如き高僧も、いづれもみな留學僧で、しかもその學徳は唐の名僧知識からも尊敬され
た程の人でした。

こうした交通や、えらい學者や、名僧の留學によって、唐に栄えた學問でも美術で
も音樂でも文學でも宗教でも工藝でも、そういうものの影響が、多く我が國に及び、
奈良時代や平安時代の初めの日本の文明は、かなりそのおかげを受けました。それで
宮中の年中行事や、婦人のお化粧などにも、その感化は現われ、中には後世までも
残されたものもありました。
元旦のお屠蘇や、五月五日（端午）に菖蒲を軒にさすこと、年の暮の追
取入れることができ、かつそれをよく消化して、我が國の實際に
齷など、みな唐の影響の日本化したものであります。外國の文明を巧に
合うように、作りかえたことは、我が國民の一つの特質です。

兵士の我がまま

安祿山の亂の間には、地方の平定のため、國內にも節度使を設けたり、また賊を手
なづけるためには、賊將でも降参さへされば、この節度使を授けてやることもありま
した。それで數も増し、その性質もわるくなって來たところ、更にわるいことには、
そういう連中がお互に聯合して、政府に抵抗するようになりしました。弱って來た唐に
は、これを抑えつけることがむずかしかったのであります。

唐は初め全國皆兵主義で、一般平民は農業をすると共に、事ある時には兵に徴され
て戦線に立つことになっていたので、農業の暇に訓練を受け、また代る代る都の守備
にもまいりました。然しこれはなかなか規則通りには行かなかつたので、玄宗の時に
は志願兵を募ることとしました。平和好きなシナ人は、もともと武力をいやしみ、兵
士を軽く見ていました。戦争のときなど指揮官には文官を以ってあてるのが、當り前

のことになっていました。「好人兵に當らず、好鐵釘に打たず」という諺もある位、いい人間は兵隊にはならないものと、相場がさまつていました。そういう國民の考えですから、志願して兵士になる者にろくなものはなく、盜賊と同様なものも少くありません。そういう兵士をいま申したような將軍が、募集したり指揮するのですから、その害悪の及ぶ所は、知るべしであります。それで唐の末には、こういう悪將軍悪兵士のために、大騒動が起つてまいりました。

また唐では、宦官が政治の上に我がままとしはじめ、ある時には近衛兵の司令官となつたこともあり、或る時は大學の總長ともいふべき地位も占めました。それから後には自分達の好きな皇族を天子に立て、氣にくわれないものは殺したり、やめたりするような亂暴を始め、大臣などは願で使うという有様でした。もちろんその間には、兵士の亂暴を抑えつけた天子もあり、宦官を手さびしくやつつけようとした名君もありましたが、倒れかけた大きい御殿は、一本や二本のつかい棒では、どうにもなり

は致しません。

その上に悪いことには、外民族の勢力が、だんだん唐の領土を犯して來まして、東にも西にも北にも南にも、その國境はちぢまつてまいります。また前にもいったように、唐では内亂を平げるのに外民族の力をかりましたから、次第に外民族の將兵の數がその領土内に増して來ました。

こうして内外の事情がわるくなると、いつもの例のように、天下をねろろ大盜賊も出て來ました。黃巢こうそうというものの亂もその一つで、山東に起つて各地を荒らし、遂には長安をも陥れました。この亂はその部下の一將の朱溫しゆおんという者が、黃巢を殺して降參したので、やっと鎮めることが出來ました。そこで朱溫はよく忠をつくしたというので、唐の天子から至忠せんちゆうという名をいただきました。がその忠義はほんの表面だけで、宦官を除いてその名聲があがり、權力を得ますと、とうとう唐の皇帝を脅かして、その位を奪つてしまいました。これで唐は亡びました。それは九〇七年のこと。我が國で

は醍醐天皇の御代（名高い菅原道真が死んでから五年目に當ります）。朱全忠の建てた國を後梁（ゴリョウ）といひます。

海東の盛國

唐の文化が太陽の輝きのように、四方の國に影響を與えた中には、滿洲の地に興つた渤海國（ハク）も、その一に數えられましよう。この國はシナの歴史に靺鞨（ムツカツ）という名で記される、滿洲民族（ツングス種）の國で、高王大祚榮（コウオウダイソエイ）を第一代として、十五代二百餘年間もつづき、海東の盛國なりと傳えられています。初め大祚榮は唐に滅された高句麗（コウクリ）に臣事していた者でしたが、唐の則天武后（ソクテンブコ）の時に、唐の勢力に叛いて自立し、震國（シン）東方の王を稱しました。後に唐の玄宗から渤海郡王（ハクハクケンオウ）という榮爵を授けられたので、これを國號と稱しました。第二代の武王は、唐及び朝鮮半島の新羅に對する關係から、はるばる日本海を越えて、我が國に使節を送り、高句麗國の後繼者として好を修め、

同盟を願つてまいりました。我が聖武天皇はこれをお許しになり、その使者を厚くもてなされました。

さて渤海は第三代の文王から、第十代の宣王（セン）の間に、領土も廣まり、制度も整つて「海東の盛國」と唐の歴史に書かれる國となり、なお二代の後まで榮え、それから次第に衰えて來たようです。その細い事は明かではありませんが、第十五代の大譚譚王（ダイタンタン）のときに、今の熱河（ネツカ）の北に興つた契丹族（キツタン）蒙古種とツングスの尊長の耶律阿保機（ヤリツアホキ）（遼の太祖）に攻め滅されました。それは唐も滅びた後の五代の後唐の初めで、西紀九二六年。我が國では醍醐天皇の延長四年に當ります。

渤海國の領土は、滿洲の吉林省が中心で、東はロシア領沿海州・朝鮮北部を含み、南は奉天省の一部、朝鮮の平安北道の一部に及んでいました。國都は二三度かわりましたが、最も長くその地位を占めていたのは、上京龍泉府（ジョウキョウリョウセンフ）と呼ばれ、吉林省寧安縣（ネいあんけん）の東京城（トウキョウじょう）に當る所です。そこにはなお當時の都の城壁・宮殿・寺院などの跡も残つて

いて千年の昔を語り、土中から掘り出されたものによって、その文化を知ることにも出
來ます。

我が國との交通は、始めには軍事的な意味もあつたようですが、後には貿易を主とする
ことになりました。そうして二百年餘、その國の亡びる時までつづき、三十四回も
の來使があり、我が國からも使者を遣わしたり、或は遣唐使が路をこの渤海にかりて
歸朝するものもあつたりして、その交りは極めて親密でありました。この國は貿易を
主眼とし、表面は貢物をたてまつるといふ名で、大抵は百餘人の一行を、我が國に送
つて來ましたが、その使はもとよりただの商人ではありません。大使以下の人人は、
多くは漢詩漢文にすぐれた教養ある朝廷の役人でした。それで我が國でも、その接待
にいろいろと苦心し、その時時に、詩文に名ある朝臣にこれを迎えさせ、詩文の会な
どに、隣國の好みを修めました。菅原道真などもこうした接待の一人となつたことも
ありました。この國の使者の作つた詩で、我が國の詩集にのこされているものもあり

ます。またこういう國際的な集合といふものは、とかく儀式ばつたことが多いもので
すが、渤海とのそれは、そうしたことはなくて、いかにも楽しい打ちとけた氣分のも
のであつたようです。主客ともに酔つて興に乗じて詩を作るなどということも記され
ています。現に菅原道眞の詩にも、「醉中衣を脱して斐大使に贈り一絶を敍して寄せ
て以つて之れを謝す」といふ題のあるのでも、知ることが出來ましよう。

こうして一千年もの昔に、我が國が滿洲にあつた國と親交があり、日本海を湖水と
する交通が開かれたことは、興味ある史實ではありませんか。

九、論語の活用

——五代と宋との時代——

纏足の始り

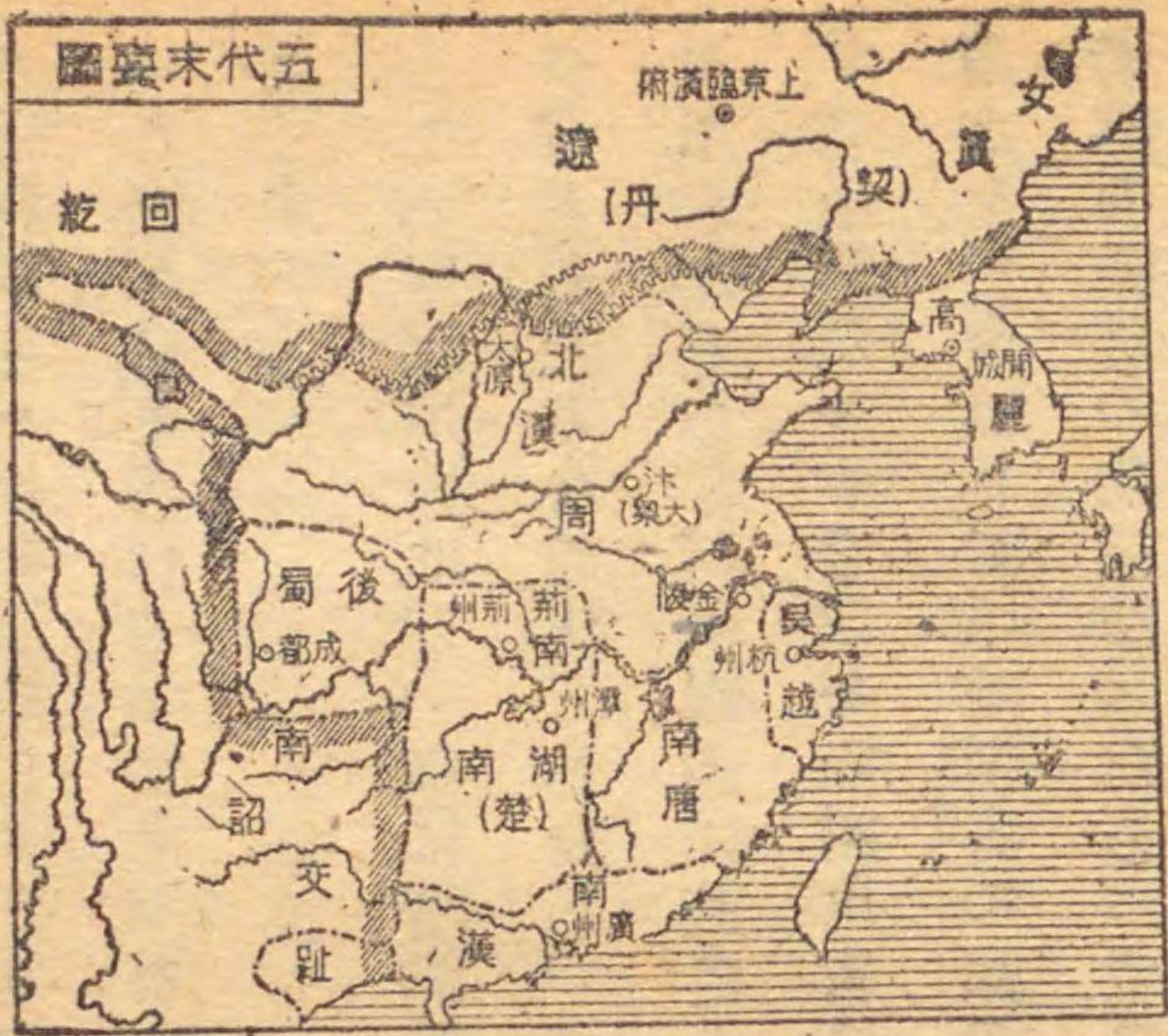
さて後梁が唐に代って興ってからの五十四年間というものは、唐末の紛亂のつづきともいうべき時代で、後唐・後晋・後漢・後周と併せて五つの王朝が興亡したので、五代という名がつけられて居ます（五つの中で後唐・後晋・後漢はトルコ種出身の將軍が皇帝になった國です）。けれどもこういう國國は、中國の廣い土地の支配に成功したものではありません、僅に黄河の流域を中心とした地方を保っただけで、他にはそれぞれ勢力ある武將が割據して、國を建て王を稱して、これに反抗していました。そういう國が前後十國もありましたから、この時代を五代十國の世とも申します。

その間に前にいったように、今の熱河の北方に興った契丹族の會長耶律阿保機は滿洲の渤海國を滅して勢を張り、その子は中原をもおびやかし一時は後晋の都であった

大梁河南省開封縣を占領して、そこに根據をすえようとしましたこともありました。この契丹の建てた國を遼といひます。

契丹の侵入は、その後も引きつづいたので、後周の時にはそれを防ぐために、將軍の趙匡胤を遣わしました。この人は部下に大さう人望のあつた將軍でしたから、兵士達はその進軍の途中で、「こういう大事の際には、今の皇帝のような幼少無智の方ではしかたがない。どうしても趙將軍にお願いして、

帝位について、この國難を救っていただけさうではないが」と相談をさめ、急に將軍の



寢室におしかけ、天子の着る黄袍こうほうをきせて、皇帝の位に即くように迫りました。そこで趙將軍もそれを承知して帝位につき、周に代って、宋そうの國を建てることとなったという話が伝えられています。これは九六〇年のことで、趙匡胤は宋の太祖といわれる人です。

この五代の世は、一口に暗黒時代のようにいわれますが、實は唐の文化を宋に引きつぐ上の大事な時代でしたし、また北方民族が次第に漢民族に壓迫を加えて來る傾きを示した上から、中國の民族史という方面から見ても、興味がある時期なのであります。十國の一つで、今の四川省にあつた蜀しよくの國の、美術工藝印刷術の發達とか、今の南京を首府にしていた南唐なんとうの國の、美術の奨勵などは、宋に於ける繪畫・工藝・印刷術等の隆昌の基を作つたものであります。

なおそうした文化の上の、直接なことではありませんが、この時代に奇妙な風俗の起つたことを紹介しておきましょう。それは漢族の婦人が、歩くのもむずかしいよう

に足を小さくする、あの纏足てんそくの習慣です。日本でも「馬鹿の大足」ということもあつて、足の大きいのは、餘りよくはいわなかつたようですが、シナではもともと男も女も、足は小さいのを自慢にします。けれどもこの女の纏足は、その極端になつたものです。このことの起りは、はっきりは分らないのですが、今いました南唐の宮中で一宮女まいまが舞を舞う時に、足首を小さくくり、三日月のようにして、舞臺に立つたのが評判になり、だんだん足を小さくする風がはやって來たということでした。流行というものは、始はほんのちよつとしたつまらないことがもとになって、その結果は非常なことになりがちのものです。この纏足は間もなく大へん流行となり、元げんから明みんにかけては、纏足をしないものは女でないという程にもなりました。この氣の毒な習慣は、今日でもまだすつかり止めることが出來ずに残されています。

論語の活用

前にいったように、宋の太祖は兵士に推されて天子となりますと、都を汴京（前の大梁と同じ所）にさだめ、他の群雄の征服につとめ、二代目の太宗のときにすっかり平定することが出来ました。太祖は軍人ではありませんでしたが、兵士の長い間の亂暴をよく知り抜いて居たので、そのわがままを抑えることに骨を折ると共に、一方には學問の奨励をしました。たので、この宋の時代は學問の發達の上では、大切な時期となる基が開かれました。太祖・太宗の時代に大臣として政にあずかったのは、趙普（ちようぷ）と云う人でした。この人は大それた論語を愛讀し、それによって政治をとりました。あるとき太宗に「臣に一部の論語が御座います。半部を以ってさきに先帝をお輔けて天下を定めました。他の半部を以って陛下のために、太平の治をおたすけ致しましょう」といったということでした。この間に皇帝の權力はかたく定まり、大臣以下はその命のままになる君主專制（せんせい）の形が整いました。その官吏は、後世の手本となった科擧（かきよ）という國家試験でとりました。さて前にいった契丹（きつたん）——遼の國（りやう）に對して、宋の太宗は中原内部の統一が出来ること、

兵を出してこれを討ち、その南侵（なんしん）の路をふさごうとしましたが、かえって敗れ、兩國の關係は面倒になりました。次の眞宗になると、果して遼は大舉南下して來たので、眞宗は親征して、瀋州（せんしゅう）という地で大いこれを破りましたが、遼の願をいれて和を結びました。その條件は國境は開戦前の通り。遼は宋を兄として敬い事（つか）えること。宋は毎年銀十萬兩・絹廿萬匹を遼に贈るということでありました。

この事件の後に立った宋の仁宗は、その治世にえらい人物の多く出たことで有名ですが、對外關係は餘り香ばしくありませんでした。チベット種（せいか）の西夏（せいしか）という國が今の甘肅省（かんしゅう）に興つて、宋の西北方を犯したので、これが撃退につとめたところ、遼はそれを口實にして兵を動かし、宋を脅（おびやか）したから、止むを得ず銀絹の贈物を増加し、西夏にも同様銀絹を與えることとして、僅に一時の平安を求めるといふような事件も起りました。それは西夏は宋に臣下として、仕えるといふ約束ではありませんでしたが、こうしたことは遼が宋を兄として事（つか）えると約したことに共に、全く形式的な面子（めんづ）（體面）の上

の事で、實質的には大きい損失でありました。こういう事件は十一世紀の中葉のことでした。宋を脅した遼は、當時聖宗の治世で、その長い支配は、すぐれた政治的手腕と共に、大領土を開いて満蒙から朝鮮半島に及び、西域との交通もおこりました。朝鮮半島では、唐の末には新羅も紛亂の状態に陥り、群雄が争をつづけましたが、その中で王建という者が、ついに半島の大部分を統一して、九三六年高麗という國を建てました。これは中原では前にいった五代の後梁の初に當ります。高麗は建國後間もなく、後梁に朝貢しましたが、遼が強くなると、またそれにも使を出して貢を納めていました。朝鮮の歴史はとかくこういう大陸の武力や勢力に、動かれやすいことを注意する必要があります。

つむじ曲りの大臣

宋が遼や西夏に、莫大な銀絹を贈ることは、財政上の大きい苦みであつたばかりでなく、漢民族の誇を傷けることでもありましたから、どうかして宋の國威を盛り返したいという願は、その君臣の共にいだいていたところでありました。第六代の神宗という皇帝は、年も若く元氣の方でしたから、この事を深く考えた末、王安石という人を抜擢して大臣とし、萬事をまかせました。

王安石は政治家であり、また文章家としても詩人としても、有名な人の一人です。前に「萬言の書」というものをたてまつつて、天下國家の改革を論じたこともありましたが。皇帝の厚い信任の下に富國強兵の策を考へて、今までの政治のやり方とは、大へん違つたことを行うこととしました。それが新法といわれるものです。

この新法の中には青苗法といつて、春の種蒔きのもとでに困る貧乏の百姓には、政府が金を貸してやり、秋のみのりの後に、利子をつけて返えさせる法もありました。また今までは政府の御用には、平民は或る日數だけはただで働く義務がありましたのを、金を納めさせてこれに代え、政府はその金の一部で、別に人夫を募集して仕事を

させる募役法ぼえきというのもありました。これは貧乏な人を救うのと、政府の収入を増すことを目的としたのです。今の言葉でいえば一種の社会政策の意味をもったものでありました。その他にも市易法しえきとか均輸法きんゆなどというのもありました。また軍事教育のためには、全国皆兵主義をとり、人家十戸を一ばん小さい隊たい（保ほといいます）として、弓矢を與え軍馬を飼かわせて、農業の暇に訓練させる保甲法・保馬法ほばというのを定め、これで國の大事のある時の用にたてる計畫でした。

この方法は、餘りに急な改革でありましたので、反對する人がなかなか多く、殊にその當時の人望第一といわれた司馬光しばこう司馬温公という名でよく知られて居ます。有や、詩文の名家資治通鑑という歴史の本を編した人です、大家の蘇東坡そとうはなどは、その筆頭ひつとうでした。司馬光と王安石とについて、こんな話があります。或る日この二人が、ある人に御馳走によばれました。そのとき主人がお酒をすすめました。二人ともお酒は飲めませんので、おことわりしましたが、主人は「まあまあ」としきりにすすめます。司馬光は主人があまりにいいしますので、一口、飲みま

したが、王安石はとうとう盃をとらなかつたということです。司馬光は立派な正直の人であつた上に、そういう風ふうに相手の人に、氣まづい思いをさせない性質もありました。王安石も決してわるい人でないどころか、立派な人です。けれども、自分の思うこと、やりたいことは、何處までもやり通す——他の人の心持はどうであらうと——という所があつた人です。王安石のもっと頑固であつたことの話としては、あるとき神宗のお伴ともぞうで、釣をして居たとき、釣の餌をお辨當と間違えてつまんだ。一口食べて氣はついたが、とうとうそれを平たいげたというのがあります。ほんとうの事ではありませぬが、そんなことが伝えられるように、剛情な人だつたのでしよう。それで時の人は、王安石のことを、拗相公ようしやうこう（つむじ曲りの大臣）といつて居たということです。さて王安石の新法は考えとしては、まことに立派でしたが、反對する人人に、人望のある名臣が多く、安石の部下で仕事をする人人が、とかく人望の少い人達でしたから、反對が多くなりがちでした。それに政府の収入を増すためには、人民から取りた

てるものも、前よりは多くなりましたので、人民は司馬光等にみかたしました。それでせっかくの企くわだても、いい結果をおさめることが出来ず、ただ政治上の争いをひどくするにすぎませんでした。

これから新法の党派と、反対黨（舊法黨）との争がつづきました。司馬光も一時は總理大臣として、立ったこともありましたが、その死後には、司馬光ほどの人物が舊法黨にもなく、ただこの二つの党派は、何でも自分の方が政治の實權をとればいい、自分が大臣になればいいということばかりを、考える人人となりましたから、そんなことで國がしつかりするわけもなく、宋の政は日ましに衰えて來ました。

新文字の創作

遼りょうが滿蒙の大勢力となったことは、前に一言しましたが、一體この五代から宋にかけては、北方の民族が、だんだん南の漢民族を壓迫し始めて來た時で、それは武力で

強さを示したばかりでなく、文化の上にも、その特性を示そうとしました。そうした現われの一つは、漢字に對して自分達の新文字を作ろうとしたことに見られます。遼の第一代の太祖のときに作られた契丹文字きつたんもじは、その最初のものであります。契丹文字は今日ではまだ讀むことは出来ませんが、どんなものであるかということは、さしえ第十四圖を御覽になれば分りましょう。

遼が契丹文字を作ったのに眞似したのか、西夏せいしかの國でも亦その特別な文字を作り出しました。それは西夏文字と呼ばれています。これは漢字と對照の字書なども殘されていて、大體讀むことができます。こういうものを作るには作りまし、それが漢人文化との、對抗の意味があるにはありましたが、實際はやっぱり制度や學問と同じように、漢字の勢力には敗けてしまつたのです。漢人の文化の力というものは、こういう點からも、觀察して見る必要があります。

さて遼はさきに一言した聖宗の時が黄金時代で、それからあとは次第に衰えて來ま

した。そうすると遼に抑えられていた、満洲のツングス種の女真族が、頭をもちあげて来ました。この女真族は、前の渤海と同じ種族に属するもので、南満洲から松花江流域へ分布していたものであります。その中で今のハルビンの東南、アルソカ河畔に根據した完顔阿骨打（金の太祖）という酋長は、遼の弱って来たの見て、これと開戦し、女真族を統合して、一一一五年には皇帝を稱し、國を金と號しました。その始めの首府会寧府は、今の吉林省阿城縣の南の白城という地です。この金の國でも、建國後間もなく、女真文字を制定して、それを使用しようとして、いろいろ努力しましたが、遼と同じように、結局は全く漢字に壓倒されてしまいました。女真文字は多少は讀むことが出来ます。

満洲でこういう騒動の始った頃は、宋では前にいった黨派の争いのつづけられていた時でした。金の興ったことは、遼に苦んだ宋には、いい味方が出来たともいうべきものでありますから、宋の徽宗は金の太宗と同盟して、一二二五年ついに長年の敵

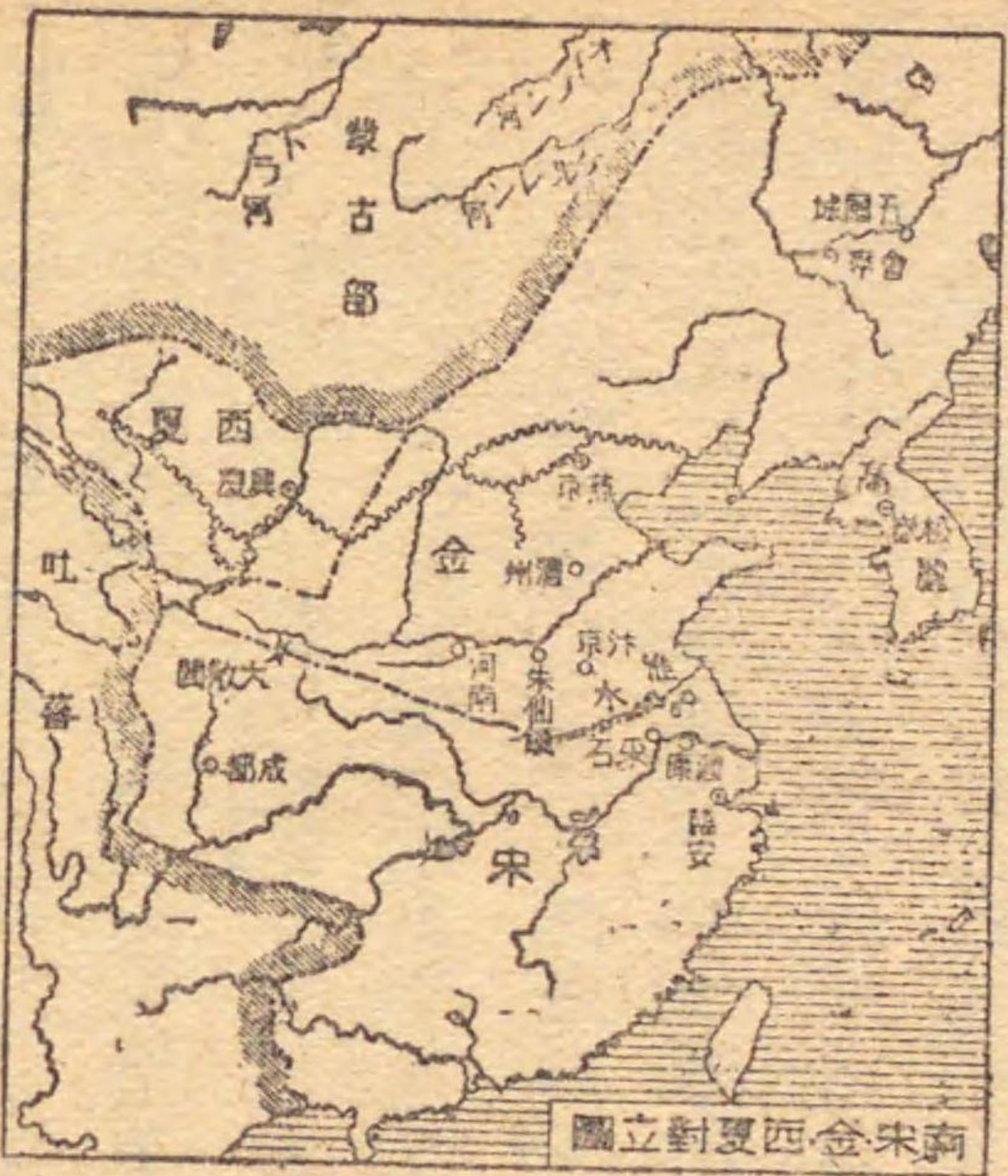
であった遼を滅しました。然しこの戦争の間に、宋の弱いことを見ぬいた金は、その野心を逞しくして、宋をも併呑しようと、大兵を下して國都汴京を攻めおとし、徽宗とそれについだ欽宗や、皇后を始め、大臣以下の官吏や人民を捕虜とし、また宮中や國都の、目ぼしい財寶を掠奪して、北に歸りました。

この徽宗は大そう美術の好きな方で、多くの美術品も集めれば、自分でも花鳥畫などを上手にかかれました。また庭園を造らせることも好きで、國中から珍しい草木や石などを取りよせたので、その運送のために人民を苦めたことも多く、いろいろな騒動も起った程でした。そういう結果は國力を弱め、ついにその國を亡國のような有様に導くに至ったのであります。

恥の鐵像

かく皇帝も大臣も敵國にとらわれたので、宋の臣下は、欽宗の弟の高宗を立てて、

南の方の臨安リンアン 浙江省 杭州ハングウ に都をうつし、そこで回復の謀はかりごとを致しました。宋はかく汴京
首府の時代と、後の臨安國都の時代とは、國勢も異り、領土にも大變化がありました。
た。史上では前期を北宋、後期を南宋と區別して呼びます。こういう時に當って、宋



議を主張しまして、現に金軍に對して、勝利を得ている軍人はいうまでもなく、金を

仇と烈しい戦争論をする學者などを壓迫して、一一四一年に金との平和條約を結びま
した。それで宋と金との境は、西は陝西の大散關たいさんかん、東は黄河と揚子江との間の淮水わいすいと
いう河を以って限ること、宋は金に臣事すること、貢を納めることなどがきめられま
した。秦檜のためにひどい目にあつた將軍の中で、岳飛がくひという人が一ばん有名です。
この人は親につかえては孝、君につかえては忠臣の手本とされる人で、また武勇にかけ
てもすぐれて居ましたが、秦檜から邪魔にされて、死刑に處せられてしまいました。然
し後世の人人は、この孝子忠臣を慕いまして、杭州の西湖せいこの畔はしりに立派な墓をつくつて、
その靈を慰めると共に、その墓所の外には秦檜夫婦の裸體ちんたいの鐵像を置き、鐵の鎖でこ
れを繋いで、永久に罪をわびているようにしてあります。今は禁じられては居ます
が、前には岳飛のお墓まいりをする人人は、きつとこの鐵像に小便をかけたものだとい
うことでもあります。

金はこの條約で、シナ本部の北半を、その領土に入れることが出来ましたから、

海陵王かいりやうという皇帝は、一もみにこの宋を滅そうと、まず都を今の北平ぺいぴんにうつし、大軍を南に下しましたが大敗しました。それで次の世宗せいそうは、宋におわびをする意味で條約を少しゆるめて、宋の面目の立つようにはしました。それから四十年ばかりは兩國とも無事で、殊に宋では學問の非常に進んだ時ともなりました。

ところが宋は、野心ある大臣の失策で、やがてまた金と戦争をはじめて敗れ、そのため金きんに澤山しやうきんの償金をとられることになりました。これで國力は一層衰おとろえて來ました。前にいった金の世宗は一代の名君といわれた人で、いろいろ政治上の整頓もし、殊に國粹保存の政策で、國民の自覺をよび起しなどしましたが、なかなか効果はなく、次第に國力にゆるみが見えて來ました。そうこうしてゐる中に、西北の外蒙古の地に蒙古族が興つて來たので、これに苦められるようになりました。

畫筆の誇

宋は遼りやう（契丹きつたん）や金きん（女真じよしん）に苦しめられ、ついで次に述べるように、しまいには蒙古に滅ぼされることになりました。武力の方からいえば、いかにもいくじのない一時しのぎもやりましたが、三百年にわたって北方民族と戦いつづけたことは、決してなみなみの努力とは申されません。それはそれとして、學問美術の上からいうと、シナの歴史上まことに大切な時代だったのであります。

太祖以來學問を奨励し、戦亂の間に散らばった書物を、探し集める、又いろいろの書物の編纂出版をしました。中には大藏經だいざうきやうといって、佛教の經文全部をまとめた、大叢書そうしよの出版もありました。また美術のためには、書院しよいんや畫院がゐんを設けて、美術家の保護美術の奨励も致しました。こういう皇帝たちの好みは、臣下にもうつたから、學者や詩人や美術家の、多く出たのも當然のことでしょう。

學者には程顥ていこう・程頤ていいの兄弟が、儒學に新しい説を立てましたが、それを大成したのが、朱熹しゆき（即ち朱子しゆし）であります。朱子は多くの著書を残しましたが、その學説は次

の元・明・清に影響したばかりでなく、我が國にも朝鮮にも及びました。我が徳川時代などは、漢學といえはすぐこの朱子の學問の別名と思う位でした。文章の名家も多くありましたが、詩文ともにすぐれたのは歐陽修や蘇東坡（名は軾、しよく）です。東坡の「赤壁の賦」はよく知られています。この人は衛生のことにも注意し、料理法にも通じて居ました。その發明したというものにおいしい東坡肉というのがあります。シナ料理で御承知の方もありましょう。

こういう學問の發達、編纂の事業が盛になった結果、印刷術の進歩は、宋の一大特色でありました。シナでは印刷術は、すでに隋のときに起つたということですが、ただ宋以前のものは殆ど現存しませんから、宋代の版本は、特に宋版という名で貴重なものとなっています。なお木版ばかりでなく、仁宗のときには畢昇（ひつしょう）という人によって、とうとう活字版が發明されました。この活字は膠（にかわ）でつくつたもので、一字一字ばらばらになるから、一字版（いちじばん）という名もありました。この發明は今から九百年近くも昔のことです。西洋で金屬活字が發明されたよりは、四百年も前のことです。木版印刷のこ

とにしましても、西洋ではシナから伝えられたのです。ただ不幸にも、この宋代の活字印刷は、十分な發達をしないで中絶してしまいました。

美術殊に繪畫に多く天才の出たこと、この宋の時代のようなことは、例が多く御座います。山水畫には前にいつた唐の李思訓（りしきん）の風をうけたものに、李成・范寛（はんかん）が居ます。そうしてこの畫風は畫院の中心をなしたもので、その線やぼかしのくっきりしたこと、青緑などの彩色、宮殿式の建築の配置とかいうものに、貴族的趣味を現わしました。これに對して王維（おうい）の畫風を受けた者には、董源や巨然（きよねん）が現われ、米芾（まいびつ）その子の友仁（ゆうじん）が出ました。水墨で柔かみがあり、しっとりした氣分の風景をかきました。殊に米芾は、ぼつぼつ點をうって、それで山や木の姿や氣分をよく現わしました。このやり方は米法といわれて居ます。この王維から米芾等にわたる畫風——南宗畫（なんそうが）または南畫——は更に元になって大に勢力を得ました。畫院の山水畫でも、後に出た夏珪・馬遠（ばえん）または梁楷などになると、趣（おもむき）きが違って來て、墨でいろいろの氣分を出すことに

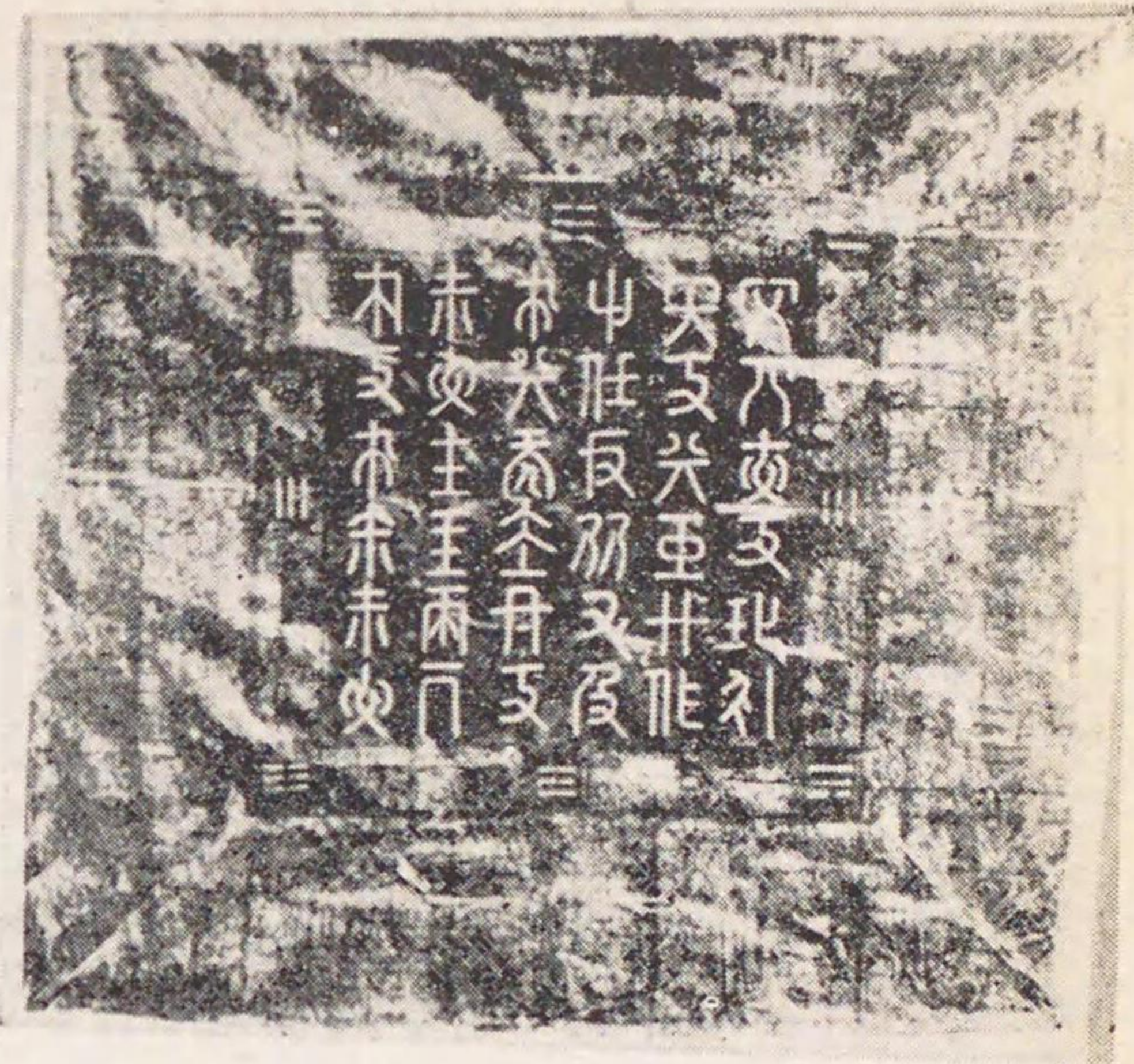
成功しました。中にも梁楷は山水畫にもいいものがありますが、人物畫にはすばらしいのかききました。あらっばい筆、ごく簡単な墨の線しかつけませんが、それで人物をいさいさとさせて居ます。この「踊り布袋」などは、畫もおどって居ますが、見る人もそれにつれこまれそちではありませんか。

花鳥畫には畫院の特色をよく出したものがあります。徽宗も山水花鳥の名家でしたが、李安忠はその第一の人でした。花鳥畫も山水畫と同じように、後世では南北の二つに分類されます。北派は黃氏體（黄居采（こうきよ）が始めです）といい、畫院の畫風がそれで、南派は徐氏體（徐熙といふ人）を始とします。といたしました。そのほか、人物・佛畫には李龍眠（りりゅうみん）（公麟）といふ大家も出ました。又このときには文學者や僧侶で、墨畫の筆を採る人も多くなりましたが、中にも牧溪（ぼくけい）は最もすぐれた人でした。雲間に隠見する龍の墨畫なども、この宋の時代から盛になります。

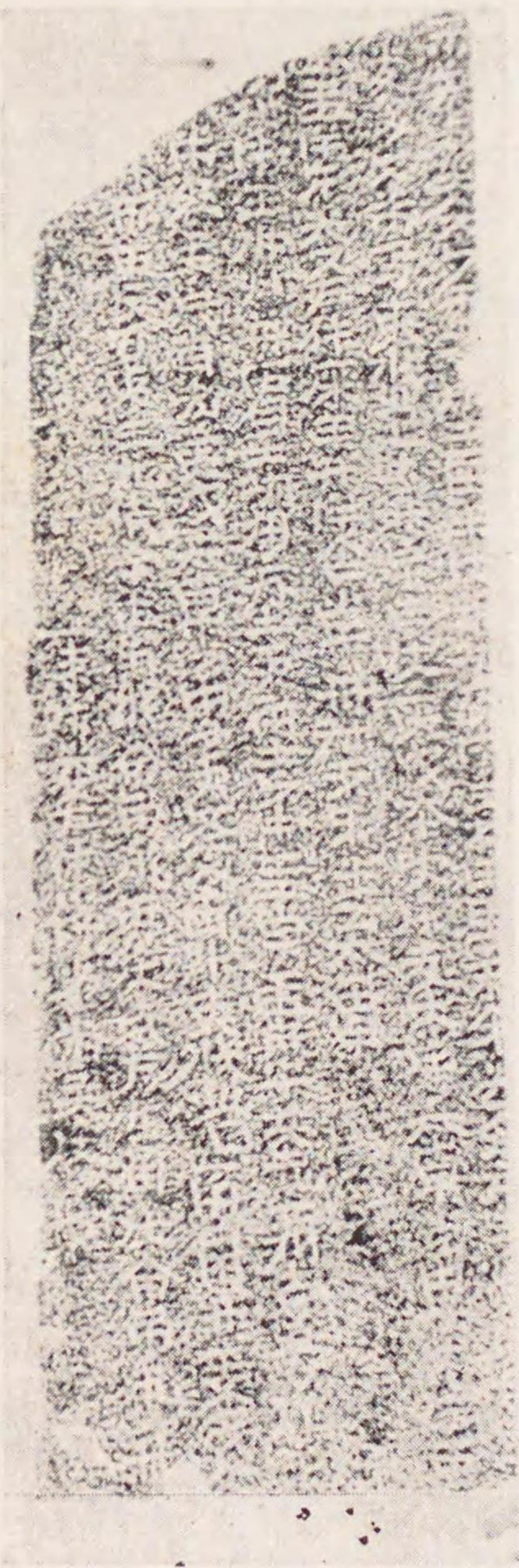
繪の具を主にせず、ただ形の寫生だけにとどまらず、簡単な筆と墨の濃淡とで、自



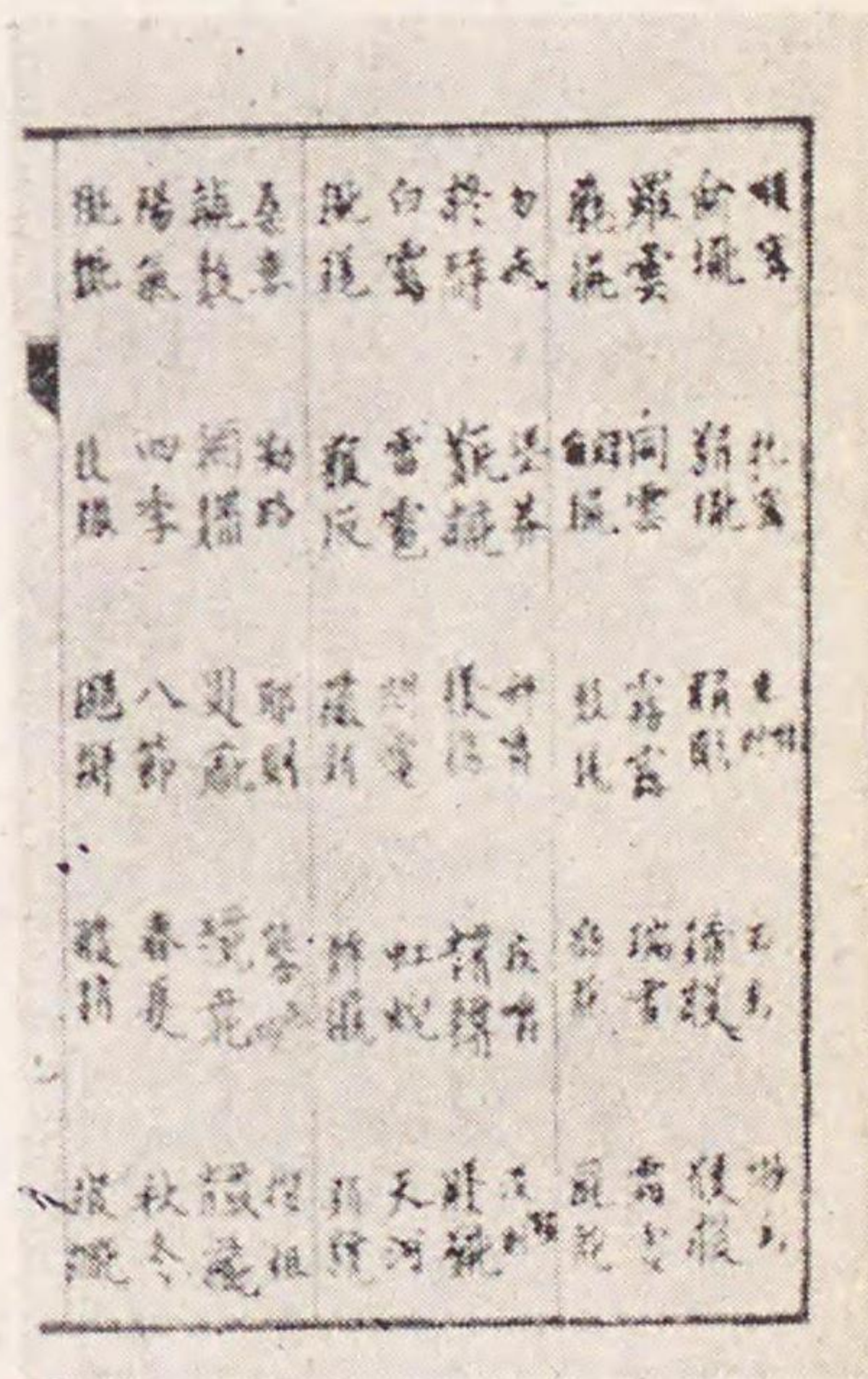
(宋) 梁楷筆踊り布袋



契丹文字



女真文字



西夏文字 (左から奇數行の文字)

然でも人物でも仙人でも、その氣分をよく現わし、その精神を伝えることのできるのは、シナ畫（また日本畫）にのみ見られる所です。簡単な墨の一色には、色も味もなさそうに見えて居ても、實は味えば何ともいえない、いい味あじわいがあるのです——ちよどそれは、シトロンや味つけのソーダ水もいいでしょうが、山からの清水が何ともいえない味をもっているように。その墨畫にはこの宋の時に最も大切な發達が見られたのであります。

一〇、蒙古風

—元の時代—

少年會長

宋と金とが戦をして、お互に弱って来た頃に、外蒙古の北部、オノン、ケルレンという、二つの河の流れ出る地方に、游牧ゆうぼくしていた蒙古族の部落の會長の子に、テムジンという少年がありました。父のエスガイは、附近の部落を征服して、なかなか勢力をはりましたが、この少年の十三のときに死にましたので、一たん従った部落もこの少年を馬鹿にしてそむきました。テムジンは父のときのように、勢をもち返そうとする、大きい心を忘れぬと共に、兄弟と母に孝行をつくすことも忘れませんでした。それは野に山に川に、獲物を求めて、その日を暮らして行くという、貧しい生活では

ありませんが、賢い母と、すぐれた子供たちは、平和にその日その日を送って、来るべき日を楽しみました。それで「母夫人ははふじんの野蒜のびる、らっきょうで養った子どもは、帝王を望むに至った」と、蒙古の本には書いてあります。

テムジンは年の長ずるままに、すぐれた才能を示し、蒙古の諸部落を征服して、父のときにまさる大きい勢力をつくりました。それで一二〇六年我が國では土御門天皇の御代。源実朝が將軍の時ですは、つき従った會長の上に立つカカン漢字では可汗と書きます。カは大、カンは君長の義（可汗）と稱することになり、チンギスカカンチンギス・カカン（成吉思可汗、略して成吉思汗とも書きます）と稱することになりました（蒙古は後に國の名を、元げんといいましたから、チンギス汗のことを元の太祖といえます）。

それから西南の西夏も攻めれば、東の金の領土にも兵を出して、黄河の北方を占領し、更に西に出ては、中央アジアの侵略を企て、四人の子をひきい、親ら出陣して大いに勝利を得、その先鋒せんぽうは南ロシアの地までも荒らし、一軍はインドに侵入しました。

チンギス汗はついでその大領土を、四人の子に分ち與え、そうして一二二七年には西夏を滅し、さらに黄河流域を保つてゐた金をも一もみにしようと、兵を進めました。途中で病の爲にたおれました。

太祖の死後クリルタイという會議が開かれて、皇帝を選ぶこととなり、三男のヲゴタイという人が位につきました。これが太宗です。この會議は蒙古には古くからあったもので、チンギス汗が可汗の位についたのも、この會議によつたのでありますが、後には國の大事は、すべてこれできめることとなりました。

悪魔の天降り

チンギス汗の武功でひろめられた蒙古の領土を、更に大きくしたのは、その子孫たちであります。第二代の太宗は、始め宋と同盟して、一二三四年に金を滅して、その地の大部分をとり、ついで朝鮮半島の高麗を服屬しました。が蒙古の武力の偉大さは

ヨーロッパへの侵入に見られます。一二三六年太宗の甥のバツ（拔都）を、總司令官とする五十萬の大軍は、首府のカラコルムを出發して、シベリヤの南方を通つて、南ロシアに入り、北に向つてリヤザンとかモスコウとかいう町町を、蒙古馬の蹄に荒らしてから、二つに別れて、一つはハンガリヤの方に入り、分れた一つは、ポーランドから更にドイツ領に入つて、一二四二年にはワールスタットという町で、ヨーロッパ諸國の聯合軍を撃破し、ハンガリヤに來て別軍と合し、さらに大いにヨーロッパを攻伐しようとしたとき、太宗死去の知らせがあつたので、東へ引き上げることとなりました。ただバツは新に征服した南ロシアの一部分と、中央アジアの一部とを領して、キプチャク汗國という國を建てて、その王となりました。

この侵入はいたる處で、殺人放火強奪という悪い事は、何でもやりましたから、ヨーロッパ人の驚きと恐れとは、一通りや二通りではありませんでした。蒙古兵は敵を倒したときは、その軍功のしるしに、相手の鼻を切り取りましたが、それがこの時の

戦だけでも、二十七萬もあつたということです。そのむごさは察することが出来ましよう。キリスト教の迷信の強かつた當時のヨーロッパでは、これを自分達の罪を罰するため、神から下された悪魔だと思つて、その犯した罪の悔い改めをするものもあれば、悪魔退散の御祈禱も、盛であつたということです。

その後第四代の皇帝憲宗のときは、その弟のフラグというのが、また西の方に遠征して、小アジア方面までも征服して、そこにイル汗國を建ててその王となりました。こうしてヨーロッパの一部にも、中央アジア・西アジアにも、勢力をのばすことが出来ました。これと共に憲宗は、かねての宿題だつた宋を滅して、中原の統一をも遂げようと致しました。それでまず兵を下して、今の雲南・四川の方面の國國を従え、弟のクビライ（忽必烈）等と、道を分けて宋に迫りました。蒙古の兵は宋の諸城に勝ちましたが、憲宗が陣中に歿し、北には内亂が起りましたから、クビライは宋の大將の申出でを好機に、和睦を約して北に歸りました。

蒙古風

クビライは宋と和約をして北に歸る途中で、皇帝の位につきました。我が國を征服しようとして大軍を出し、大敗をした元の世祖はこの人です。世祖は内亂を平定すると、國都を今の北平にうつし、これを大都といひ、國の名も漢人式に元とつけました。北シナでは五・六月の頃になると、蒙古の沙漠に起る旋風のために、ひどい塵をかぶり、知らぬ間に何もかも塵だらけになることがあります。それを蒙古風といつています。ちようどそのように、蒙古族の勢力は、今や漢民族の上におおいかぶさろうとしたのであります。

世祖は大軍を下して襄陽の城を攻め、ペルシヤ人の工夫した大砲（大石を投げ飛ばす器械）で宋軍を驚し、苦戦の後にこれを陥れ、一方はこれから揚子江を下り、一方にはバヤン（伯顔）という名將に命じて、宋の首府をつかせました。臨安の都ではこれ

を聞いて大騒ぎ、文天祥ぶんてんしょうなどという忠臣は、兵をもつて一戦して、もり返しをしようといふとめましたが、一方には弱音を吐くものもあつて、ぐずぐずして居るうちに、元の兵は忽ち都を陥れ、皇帝てい、皇太后こうたうごうのほか多くのものが捕虜とされました。

そうしてまた元に降参するものも多くありましたが、なおあくまで元に反抗する者は、北におくられた皇帝の兄弟を奉じて、海岸づたいに南の厓山がいざんにうつつて、そこに立てこもりました。元はこれを追つて水陸から攻めたので、宋の力戦りきせんも功なくて敗れ文天祥は執えられて大都に送られました。一二七九年には、元の攻撃がますますひどくなつたので、今はこれまでと、宋の君臣は霧に乗じて海上に逃れ、陸秀夫りくしゆふという忠臣は、まずその家族を海に投じ、つづいて當時九歳であつた廣王くわうわうの皇帝ていを背負つて、水に投じて了いました。諸臣宮女の之れになろう者も多く、その屍しかばねの浮んだもの、實に十萬餘と記されて居ます。史上稀まれに見る悲惨な事でありました。

こうして宋は滅され、蒙古人の全シナの支配が行われることとなりました。この勝

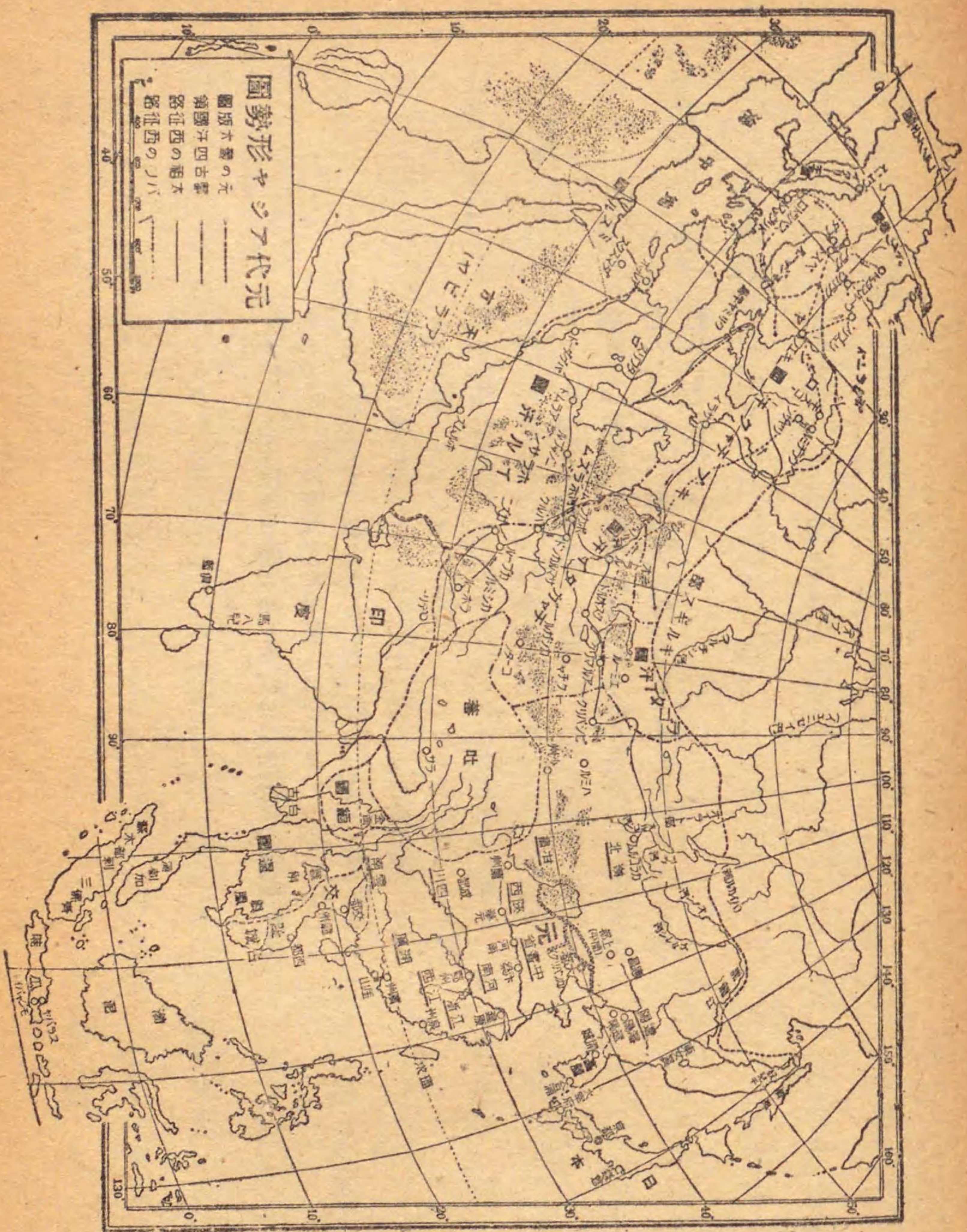
利に先立つて、世祖は既に屬國とした朝鮮半島の高麗を案内として、我が國に使を出し、我が國をも服屬しようとした。御承知の通り、北條時宗はこれを斥け、更に兵力で脅かしたのも撃退しました。文永のついで元は宋を滅し、海軍が自由になつたので、大仕掛の襲來をやつたのが、あの弘安の役です。一二八一年宋の滅亡した翌翌年。我が後宇多天皇の弘安四年。元の歴史にさえ、生きて歸るもの僅に三人と記す程な大まけをしたので、くやしかつたのでしよう。今度は北の方から、日本を攻めようとする謀はかりごとをめぐらし、その準備も致しましたが、たびたび臣下が諫めたのでどうとう思い切ることになりました。ちよつとここで高麗の事をいっておきましょう。この國は元の時には全くその屬國となり、王子は質として元の都に送られ、國內には元の官吏が出張して政を見るといふ有様となりました。世祖の婿となつた忠烈王の如きは、蒙古の風俗をまねて、かえつて世祖からなぜ國俗を棄てるのかと、注意された位でした。半島人が強大な勢力に負けると、とかくこういふへつらいのようなことをするのは、見のがせない事實で

あります。

世祖は日本には敗けましたが、南洋方面では大成功で、インドシナ半島やその附近の國國にはその勢力をふるいました。それでこの蒙古民族の支配した所は、アジヤでは日本・シベリヤ・インドとを除く殆んどすべてと、ヨーロッパの一部分でした。こういう廣大な領地の開かれたのは、シナの歴史の上には、あとにも先にも見られない所です。この領土が四つの汗國と、本家ともいべき元室の直領地とに分れました。地圖を御覽になればそのあらましはわかるでしょう。

チパングの島

蒙古が興ってからいま申したように、大きい領土が開かれ、今までアジヤ・ヨーロッパの間にあった小國が滅されたこと、チングス汗以來の軍事上の必要で、道路をよくしたことなどのため、西方のペルシヤ人・アラビヤ人・ヨーロッパ人も、多く元



シナ史の上ではこの蒙古のときが、一番大きい國家を見たのです。この圖は元の世祖(クビライ)の時を中心としての領土です。蒙古人としての勢力の及んだ範圍は……で示しました。この廣い領土の中が元の皇室領とヲゴタイ汗國、チャガタイ汗國、キプチャツク汗國、イル汗國とに分れて居りました。古いロシヤの王家の如きも、一時このキプチャツク汗國の支配を受けたことがありました。今の外蒙古北部の一部落から起つた酋長とその子孫とが、僅か八十年ばかりでこつこつという大きい領土を作つたのですから、蒙古人の武力というものの恐ろしさもわかりでしょう。

にまいりますし、殊に元の世祖は、蒙古人を重く任用したのはいうまでもありませんが、なお外國人でもすぐれた才能があれば、政事にでも何にでも用いたから、沢山の外國人が、その政府には仕えました。我が日本のことを、始めてヨーロッパに知らせたこととで有名な、イタリヤのヴェニスの生れの、マルコ・ポーロという人もその一人です。

この人の父は商人で、二度目のシナ旅行のときに、マルコをシナにつれて來ました。この十七歳の若者は、それから二十年餘りも元に居て、世祖に信用され、南方の知事にもなりました。一二九五年、故郷ヴェニスに歸つてから、東方で見たり聞いたりしたことを人人に傳えました。その話が後に旅行記として、世にあらわれました。その旅行記の中で、我が日本はチパング(Cipangu)の島という名で書かれて居ますチパングの發音が、なまつたものだと思います。それによると、この島は獨立の國で、人は色が白く文明の程度も高い。そうして非常に黄金に富んで居る。この島の王様の大きい御殿は、その屋根がすっかり美しい黄金で葺ふいてある。そればかりでなく、御殿の中の敷石しきいしも

部屋部屋の床も、またすっかり黄金でつくられて居るし、窓も黄金である。それから黄金の他に、寶石も無盡藏であるということなども伝えられています。我が日本の國も實際に、この話の何萬分の一かでも、黄金が出たら、どんなにかよかったことでしょう。それでクビライ（世祖）はこの黄金をとりたいたので、この國に兵を出したが大敗をしたということも伝えて居ます。この話はヨーロッパに大きい影響を與えたもので、後にはあの有名なコロンブスという人の如き、このチパングの島に來たいために、冒險的な航海をして、まちがってアメリカを發見してしまつたのです。まちがっていいことをしたのかも存じません。日本のことを西洋でジャパン、ジャボン、ヤパンなどというのは、このチパングが、更になまつたものであります。

さてマルコ・ポーロが我が日本の事を、そんな風に傳えたというのは、まるっきりでたらめであつたかといひますと、必しもそうはいえないのです。というのは、宋の終り頃の、我が國とシナとの貿易品を見ますと、日本の輸出品の中には沙金や金や眞珠などというものがあります。こういうものを賣出す位ですから、本國には有り餘つ

て居ることと、南方のシナ人は考えていたのでしよう。それゆえマルコ・ポーロが、それをこんな言で傳えたというのも、決して一口にめちやくちやの話だとも、申されないのであります。

その他この前後にはヨーロッパから、キリスト教の宣教師も來るし、商人も交易に來ました。ペルシヤ人やアラビヤ人で、大臣になつたものもあります。また學問などでも、アラビヤから新しいものが傳えられ、天文學や曆學は大いに進歩し、精密な曆も出來ましたし、精巧な天文觀測の器械なども作られました。（この元の曆が後に我が國に傳りましたが、それをもとにして江戸時代には前よりも精確なものを作つたこともあります。）

石の下にも若草

漢民族はちようど重たい冷たい石に、抑えつけられたように、蒙古人の強い武力に

屈服は致しましたが、然しそれでもその強い文化は衰えることなく、石の下にありながら、どこまでも伸びよう伸びようとする、若草のような活力をもちつづけました。それはやがてこの時代を飾る文學ともなれば、美術ともなったのであります。

元の時には芝居の脚本や、小説が沢山に出来ました。シナの芝居はしぐさや立廻りよりも、歌が一番大切なものでありますから、脚本も歌が主です。その歌の調子その他のさめで北曲（ほくきょく）と南曲（なんきょく）とがあります。その何れにも脚本の立派なのが出来るし、芝居の整ったのは、この元の時です。小説には水滸傳（すいこでん）と三國志演義（さんごくしえんぎ）というのがあります。この二大傑作は、日本にも翻譯されたのがあります。實に痛快なシナ式の豪傑（ごうけつ）や忠臣が、紙上におどって居る面白い作品です。

なぜこの蒙古人が政治を行ったときに、こういう文學が栄えたのでしょうか。それは漢民族は「文章は經國の大業（けいこくのだいぎょう）」などといって、天下國家を治めるために、文學を修めたのでしたが、蒙古人の天下になつては、それが思うようにいかない。それでその

不平を洩らすために、こういうものを作つて、作中の人物に勝手なことをいわしたり、させたりしたのであるともいいます。また蒙古人は、むずかしい歴史を研究したり、書物を読んで、漢民族の風俗や習慣を知るよりも、芝居を一目見て、面白くおかしく楽しみの中は、すぐいろいろの漢民族の社會の事情を、知ることを喜んだためでもありましょう。そういう風に二つのことがあつたところに、天才が出たのです。藝術は天才が出なくてはだめです。

美術の方では、初期には畫にも書にも、すべてすぐれて居た趙子昂（ちやうしやう）が居ました。繪畫は畫院などこそありませんでしたが、美しい花鳥畫の名手には錢舜舉（せんしゆんきよ）や王若水（わうじやくすい）が居ましたし、顔輝（がんき）という人は仙人の畫などに得意でした。山水畫は元の末に出た四人の名家（倪雲林（げんうんりん）、黄子久（わうしきう）、王叔明（わうしゆくめい）、吳仲圭（ごちゆうけい））によつて、南畫の方が發達し、非常に後世に影響することとなりました。

漢民族は蒙古に苦められ、支配されはしましたが、そんな軍事的なことにはかまわず、えらい藝術家はすぐれた藝術を作つたのであります。こういうところに漢民族の

すぐれた點も存して居ます。そうしてやがてまた政治的にも、こういう力が芽ぐんで來ました。

さて蒙古人は前にいったように、實にすばらしい領土をもちましたが、その本家ともいうべき元では、世祖のときにもう財政が苦しくなり、後には税を高くする、やたらに交鈔（紙幣）を出して民を困らせました。その上に皇帝は皇族の中から選舉されることになっていましたから、代のかわり目には、政治上の争がひどくなり、皇帝は野心家のおもちやとなる、それから皇族間に内亂も起りました。また世祖の時に入ったラマ教というチベットの佛教が、次第にはびこって來て、その僧侶が横暴をして人民を苦めました。世祖はラマ僧パシユパに命じて、パシユパ文字という新字を作らせました。これも漢字への對抗と思われませんが、すぐすたれてしまいました。それでは政治がうまく行く筈はありません。こういう元室のよわり方を見た漢民族は、この侵入者をおっぱらって、支配權をとり戻そうとして立ちました。そういう一人に朱元璋しゆげんしやうという人があつて、群雄を従えると共に、遂に大都たいとを攻めおとし、元の皇帝を蒙古に逐い、一四三六年、皇帝の位に即きました。これが明の太祖たいそです。

一一、新世界からの光

——明の時代——

永樂錢

元を滅した明の太祖は、南方の片田舎の貧乏人の子で、お寺の坊さんになったこともありますが、法衣ころもをすてて武器をとり、一かどの大將となり、遂に皇帝の位に即いた人です。都を金陵きんりやう後の南京にさだめ、蒙古人によってかさまわされた中國を、もとのように建て直そうと、政治の上にも學問の上にも、心をくばりました。

元の衰えて來たころ、朝鮮半島の高麗では、權臣の間に勢力争いなどが起つて、政が亂れてまいりました。明が元に代ると、この新大國に附くかどうかというところで、争も大きくなりましたが、將軍李成桂りせいけいは、その一派から推されて、ついに國王の位に

即ち、明に使を出して好を修めました。そこで明の太祖は國號を選んで朝鮮とし、ついで成桂を國王に封じて、その屬國としました。李成桂は朝鮮の太祖といわれる人であり、



さて明は第二代の惠帝の時に成桂が、その叔父の燕王棣という、北方の強い大名が野心を起し、金陵を攻めて惠帝の位を奪ひ、都を燕京にうつしてこれを北京といひ、金陵を南京といふことにしまし

た。これが三代目の成祖です。成祖は大志のあった名君で、北では蒙古に逃げた元の子孫を征伐し、南は遠く南洋からインド洋方面に、宦官の鄭和を將としてたびたび多くの軍艦を出して、明の威光を輝かしました（今日の南洋に於けるシナ人——それを華僑といひます——の勢力というものは、實にすばらしいものですが、この成祖の南洋威服は、そういう活動のもとを作るのには、一つの機會を與えたものであります）。この頃は我が國では足利氏が將軍となつて居ましたが、交通も貿易も行われませんでした。足利義滿が國の恥をも忘れて、日本國王と稱して取引をしたのも、また義持が國交を断つたのも、みなこの成祖のときであります。この明初の貿易で、明の當時の通貨であった、永樂通寶永樂通寶の年号です 即ち永樂錢が、澤山に我が國に入つて來て、後まで長く使用されることになりました。それから後、なお時にはきれ、時にはつづいた明との交通貿易で、宋や元時代の名畫などが、我が將軍の部屋を飾ることとなつたり、いい陶器や磁器が、諸大名の寶庫にも入りました。そうしてそれは我が國民の美術工